講座の紹介

中3 国語（光村図書 教科書対応）を受講するみなさんへ

講座の特徴

- 〈要点がコンパクトにまとまった動画〉+〈確認テスト〉なので、スキマ時間での学校の授業の復習や定期テスト対策をするのにオススメです。
- 教科書で学習する内容に対応しています。

講師からのメッセージ

- 伝えたいのは、「Let's（レッツ）感動！」
  正しい日本語の読み方を身につけると、文章の内容がもっとわかりやすくなって、文章から受ける感動は、もっともっと大きくなるよ。
  キミも、感動への第一歩をいっしょに踏み出そう！

宮田泰三

それでは、一緒にスタディサプリで学習していきましょう！

テキストの使い方

はじめに

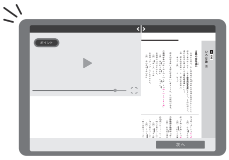
スタディサプリは、スマホやタブレット、PCを使って動画を見たり問題を解いたりすることができますが、テキストを使うと、より学びやすく、理解しやすくなります。
テキストはさまざまな使い方ができるので、ぜひ自分に合った使い方をみつけて活用してください。

教科書との対応について

「光村図書 国語」の内容と対応しています。

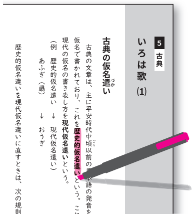
基本の使い方

ステップ1 動画をみる



※読解の講義は動画を見る前に教科書の本文を読んでおきましょう。

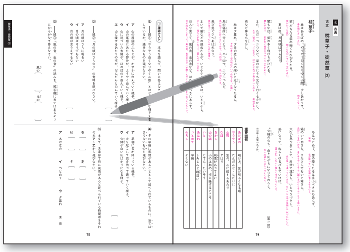
テキストはこう使う！



講師が話したことや大事だと思ったことをメモするとオリジナルのまとめノートになります。

ステップ2 確認テストを解く

テスト前のオススメの使い方



時間があればテスト範囲の講義を最初から復習しましょう。
テキストはアプリやウェブで問題を解いた後の復習や、テストに近い問題形式に取り組みたい時に活用できます。

各パートの説明

6 いにしえの心にふれる

蓬萊の玉の枝――「竹取物語」から (2)

古文の読み方

古文では、主語や助詞などがなかったり省略されていたりする。古文を読むときは言葉を補いながら読むとよい。

（例）…竹取の翁といふ者〈が〉ありけり。〈竹取の翁は〉野山にまじりて…

重要語句

よろづ	いろいろ・全ての事
あやしがる	不思議に思う
いと	とても・たいそう
うつくし	かわいらしい
ゐる	座る・いる

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 次の言葉を現代仮名遣いに直したものとなるように、解答欄に当てはまる言葉をひらがなで答えなさい。

さぬきのみやつことなむいひける

さぬきのみやつこと［　　　］

講義名

教科書の表題に対応しています。

関連する知識や、重要なポイントがまとまっています。

重要語句

教科書本文で出てくる重要語句の意味がまとまっています。
現代文の重要語句一覧は巻末にあります。

確認テスト

動画で説明した内容について問題が出題されます。
解答は別冊で確認できます。
※解説を確認したい場合はアプリでご確認ください。

目次

文法基礎　P006

1 深まる学びへ
握手　P014
文法への扉1　「走って」いるのは誰？（文法を生かす）　P024
言葉1　相手や場に応じた言葉遣い　P026
学びて時に之を習ふ──「論語」から　P028

2 視野を広げて
作られた「物語」を超えて　P032
漢字1　熟語の読み方　P040

3 言葉とともに
俳句の可能性　P044
俳句を味わう　P048
言葉の釣り糸を垂らす　P050
言葉2　和語・漢語・外来語　P052

4 状況の中で
挨拶──原爆の写真によせて　P054
故郷　P056
言葉3　慣用句・ことわざ・故事成語　P070
漢字2　漢字の造語力　P074

5　自らの考えを

複数の意見を読んで、考えよう ――正解が一つに決まらない課題と向き合う …… P078

文法への扉２　「ない」の違いがわからない？（文法のまとめ） …… P082

聴きひたる　初恋 …… P090

6　いにしえの心を受け継ぐ

和歌の世界 …… P092

音読を楽しむ　古今和歌集 仮名序 …… P094

君待つと――万葉・古今・新古今 …… P096

夏草――「おくのほそ道」から …… P104

古典名作選 …… P112

7　価値を生み出す

それでも、言葉を …… P116

8　未来へ向かって

温かいスープ …… P122

アラスカとの出会い …… P126

律儀な桜 …… P130

わたしを束ねないで …… P132

初日 …… P134

重要語句一覧 …… P136

文節

文を自然な発音や意味となる範囲（はんい）でできるだけ短く区切ったまとまりを**文節**という。

〈文〉　鳥が空を飛ぶ。

〈文節〉　鳥が（文節）／空を（文節）／飛ぶ。（文節）

※文に「ネ」を入れて区切ってみるとよい。

文節は、文の中での働きによって、主語・述語・修飾（しゅうしょく）語・接続語・独立語などに分けられる。

①主語・述語

「何（だれ）が」を表す文節を主語、「どうする」「どんなだ」「何だ」「ある（いる）・ない」を表す文節を述語という。

（例）　鳥が（主語）　／　飛ぶ。（述語）

②修飾語

「何の」「どんな」「いつ」「どこで」「何を」「どのように」など、他の部分をくわしく説明する文節を修飾語という。

（例）　白い（修飾語）　／　鳥が　／　青い（修飾語）　／　空を（修飾語）　／　飛ぶ　。

③接続語

文や文節をつなぐ文節を接続語という。

（例）　晴れた。　／　だから、（接続語）　／　外で　／　遊んだ。

④独立語

他の文節と直接は結びつかない文節を独立語という。

（例）　ああ、（独立語）　／　すばらしい　／　景色だ。

確認テスト

(1) 次の文を文節に分け、斜線（／）で区切りなさい。

庭 で ス ズ メ が 鳴 く 。

(2) 次の①～⑤の各文の――線部の文節の種類を、それぞれ**ア**～**オ**から選びなさい。

① 空に美しい虹がかかる。〔　〕

② 街に強い風が吹いた。〔　〕

③ おや、あれは何だ。〔　〕

④ 急いだ。しかし、遅れた。〔　〕

⑤ この建物は図書館です。〔　〕

ア 主語　**イ** 述語　**ウ** 修飾語

エ 接続語　**オ** 独立語

(3) 例に従って、次の文に含まれる主語に＝＝線を、述語に――線を引きなさい。

（例）赤い　花が　咲く。

今日、私は　電車で　博物館に　行った。

(4) 次の～～線部の修飾語は、どの文節を修飾しているか。記号で答えなさい。

私は　昨日、公園で　友達に　会った。

ア 私は　**イ** 昨日　**ウ** 友達に　**エ** 会った　〔　〕

単語

それだけで意味をもつ最も小さな言葉の単位を**単語**という。

〈文節〉 鳥が（文節）／青い（文節）／空を（文節）／飛ぶ。（文節）

〈単語〉 鳥（単語）／が（単語）／青い（単語）／空（単語）／を（単語）／飛ぶ（単語）。

●自立語・付属語

単語は、大きく、自立語と付属語に分けられる。

・**自立語**…単独で文節を作ることができる単語。その単語だけで言葉のイメージが浮（う）かぶことが多い。

・**付属語**…単独では文節を作ることができず、自立語と共に使われる単語。その単語だけでは言葉のイメージが浮かばないことが多い。

（例） 鳥（自）が（付）／空（自）を（付）／飛ぶ（自）。 おにぎり（自）を（付）／食べ（自）た（付）。

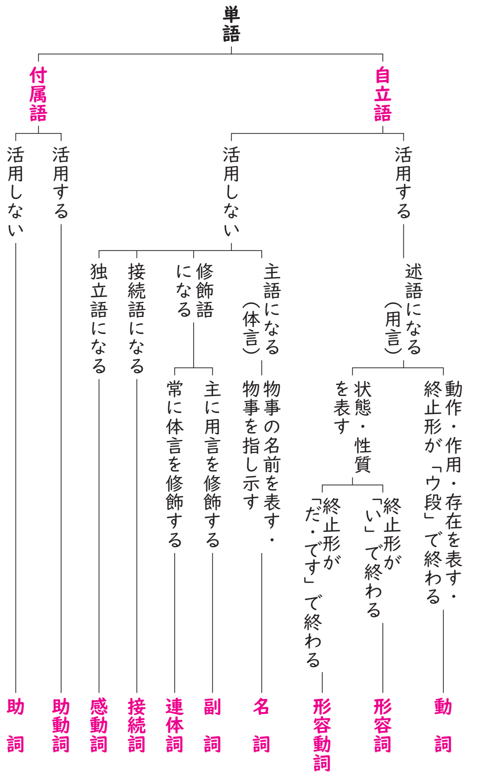
●活用

文中で、言葉の組み合わせに応じて単語の形が変化することを、**活用**という。

（例） 話す＋た → 話した
明るい＋た → 明るかった
静かだ＋た → 静かだった
走ります＋た → 走りました

●品詞

単語を分類したものを**品詞**という。単語は10種類の品詞に分けられる。



確認テスト

(1) 次の文を単語に分け、斜線（しゃせん）（／）で区切りなさい。

庭 で ス ズ メ が 鳴 く 。

(2) 例に従って、次の文の自立語を□で囲み、付属語に――線を引きなさい。

（例）［鳥］が［空］を［飛ぶ］。

私 は 自 転 車 で 駅 に 行 く 。

(3) 次の①～④の品詞が、自立語なら**ア**、付属語なら**イ**で、それぞれ答えなさい。

① 名詞〔　　〕　② 動詞〔　　〕

③ 助詞〔　　〕　④ 助動詞〔　　〕

(4) 次の文の（　）に当てはまるように、「歩く」という単語の形を変化させなさい。

私は毎朝、公園を（　　）ます。

〔　　〕

(5) 次の文の（　）に当てはまるように、「白い」という単語の形を変化させなさい。

雪で外が（　　）なった。

〔　　〕

用言

自立語の中で、**活用があり**、**単独で述語になる**ことができるものを**用言**という。品詞では、**動詞**・**形容詞**・**形容動詞**が用言にあたる。

（例）花が咲（さ）く。　花が赤い。　花がきれいだ。

●**動詞**………動作・作用・存在を表す。言い切りが「**ウ段**」で終わる。

（例）話す・咲く・いる

●**形容詞**……状態・性質を表す。言い切りが「**い**」で終わる。

（例）明るい・楽しい・赤い

●**形容動詞**…状態・性質を表す。言い切りが「**だ**・**です**」で終わる。

（例）静かだ　・きれいだ　・立派だ
静かです・きれいです・立派です

体言

自立語の中で、活用がなく、**主語になる**ことができるものを**体言**という。品詞では、**名詞**が体言にあたる。

（例）空が青い。

●**名詞**………物事の名前を表す。物事を指し示す。活用しない。

（例）山・私・これ

・品詞分類表

- **単語**
  - **自立語**
    - 活用する
      - 述語になる（用言）
        - 動作・作用・存在を表す・終止形が「ウ段」で終わる ― **動詞**
        - 状態・性質を表す
          - 終止形が「い」で終わる ― **形容詞**
          - 終止形が「だ・です」で終わる ― **形容動詞**
    - 活用しない
      - 主語になる（体言） ― 物事の名前を表す・物事を指し示す ― **名詞**
      - 修飾語になる
        - 主に用言を修飾する ― **副詞**
        - 常に体言を修飾する ― **連体詞**
      - 接続語になる ― **接続詞**
      - 独立語になる ― **感動詞**
  - **付属語**
    - 活用する ― **助動詞**
    - 活用しない ― **助詞**

確認テスト

(1) 次の各品詞が、用言ならア、体言ならイ、それ以外であればウで、それぞれ答えなさい。

① 形容詞〔　　〕　② 形容動詞〔　　〕
③ 助詞〔　　〕　④ 動詞〔　　〕
⑤ 副詞〔　　〕　⑥ 名詞〔　　〕

(2) 次の①〜⑥の品詞を、それぞれア〜エから選びなさい。ただし同じ記号を何度使ってもよい。

① 美しい〔　　〕　② 読む〔　　〕
③ 辞書〔　　〕　④ のどかだ〔　　〕
⑤ 見る〔　　〕　⑥ 海〔　　〕

ア 動詞　イ 形容詞　ウ 形容動詞　エ 名詞

(3) 例に従って、次の――線部の単語を言い切りの形に直しなさい。

(例) 話した → 〔話す〕

動きます。〔　　　　〕

(4) 例に従って、次の――線部の単語を言い切りの形に直しなさい。

(例) 明るかった → 〔明るい〕

うれしくなる。〔　　　　〕

その他の自立語

●**副詞**……状態や程度などを表す。主に用言を修飾(しゅうしょく)する。

（例）ゆっくり 歩く(用言)。　とても 多い(用言)。

●**連体詞**……常に体言を修飾する。

（例）この 花(体言)　大きな 木(体言)

●**接続詞**……前後の文や語をつなぐ。接続語になる。

（例）だから・しかし

●**感動詞**……感動・呼びかけ・挨拶(あいさつ)・応答を表す。独立語になる。

（例）ああ・ねえ・おはよう・はい

付属語

●**助詞**……自立語の後に付いて、語句と語句の関係を示したり、意味を付け加えたりする。活用しない。

（例）鳥が飛ぶ。　私も笑う。　強くて優しい。　何ですか。

●**助動詞**……用言・体言や他の助動詞などに付いて、意味を付け加えたり、話し手の判断を示したりする。活用する。

（例）走らない。　走った。　中学生だ。

・品詞分類表

- 単語
  - **自立語**
    - 活用する
      - 述語になる（用言）
        - 動作・作用・存在を表す・終止形が「ウ段」で終わる — **動詞**
        - 状態・性質を表す
          - 終止形が「い」で終わる — **形容詞**
          - 終止形が「だ・です」で終わる — **形容動詞**
    - 活用しない
      - 主語になる（体言） — 物事の名前を表す・物事を指し示す — **名詞**
      - 修飾語になる
        - 主に用言を修飾する — **副詞**
        - 常に体言を修飾する — **連体詞**
      - 接続語になる — **接続詞**
      - 独立語になる — **感動詞**
  - **付属語**
    - 活用する — **助動詞**
    - 活用しない — **助詞**

確認テスト

(1) 次の①〜④の――線部が、副詞なら**ア**、連体詞なら**イ**、それ以外なら**ウ**で、それぞれ答えなさい。

① あの山。 〔　　〕

② 高い山。 〔　　〕

③ 早く起きる。 〔　　〕

④ いきなり起きる。 〔　　〕

(2) 例に従って、次の〰〰線部の副詞が修飾している文節に――線を引きなさい。

(例) ゆっくり　話す。

私たちは　のんびり　公園を　歩いた。

(3) 例に従って、次の文に含(ふく)まれる連体詞に〰〰線を引きなさい。

(例) この　花。

私はそんな話は知りません。

(4) 次の各文の――線部が、接続詞なら**ア**、感動詞なら**イ**で、それぞれ答えなさい。

① もう出発の時間になった。さあ、そろそろ出かけようか。

② みんなで落とし物を探した。ところが、どこにも見つからない。

① 〔　　〕 ② 〔　　〕

(5) 例に従って、次の文に含まれる助詞・助動詞に――線を引きなさい。

(例) 白い 鳥 が 飛ん だ。

私 は 毎 朝、リ ン ゴ を 食 べ ま す 。

握手（1）

井上ひさし

上野公園に古くからある西洋料理店へ、ルロイ修道士は時間どおりにやって来た。桜の花はもうとうに散って、葉桜にはまだ間があって、そのうえ動物園はお休みで、店の中は気の毒になるぐらいすいている。椅子から立って手を振って居所を知らせると、ルロイ修道士は、

「呼び出したりしてすみませんね。」

と達者な日本語で声をかけながら、こっちへ寄ってきた。ルロイ修道士が日本の土を踏んだのは第二次大戦直前の昭和十五年の春、それからずっと日本暮らしだから、彼の日本語には年季が入っている。

「今度故郷へ帰ることになりました。カナダの本部修道院で畑いじりでもしてのんびり暮らしましょう。さよならを言うために、こうして皆さんに会って回っているんですよ。しばらくでした。」

ルロイ修道士は大きな手を差し出してきた。①その手を見て思わず顔をしかめたのは、光ケ丘天使園の子供たちの間でささやかれていた「天使の十戒」を頭に浮かべたせいである。中学三年の秋から高校を卒業するまでの三年半、わたしはルロイ修道士が園長を務める児童養護施設の厄介になっていたが、そこには幾つかの②「べからず集」があった。（中略）その中に、「ルロイ先生とうっかり握手をすべからず（二、三日鉛筆が握れなくなっても知らないよ）。」というのがあったのを思い出して、それで少しばかり身構えたのだ。この「天使の十戒」が、さらにわたしの記憶の底から、③天使園に収容されたときの光景を引っ張り出した。

風呂敷包みを抱えて園長室に入っていったわたしを、ルロイ修道士は机越しに握手で迎えて、

「ただいまから、ここがあなたの家です。もう、なんの心配もいりませんよ。」

と言ってくれたが、彼の握力は万力よりも強く、しかも腕を勢いよく上下させるものだから、こっちの肘が机の上に立ててあった聖人伝にぶつかって、腕がしびれた。

だが、顔をしかめる必要はなかった。それは実に穏やかな握手だった。ルロイ修道士は病人の手でも握るようにそっと握手をした。それから、この※ケベック郊外の農場の五男坊は、東京で会った、かつての収容児童たちの近況を熱心に語り始めた。

※ケベック……カナダ南東部の都市。

回想

過去の出来事を振り返りながら語ることを**回想**という。物語や小説では、回想が入ることで現在と過去の出来事が交互に展開することがある。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「その手を見て思わず顔をしかめた」とあるが、なぜ顔をしかめたのか。適当なものを選びなさい。

ア ルロイ修道士が天使園の園長であったことを思い出し、かしこまったから。

イ ルロイ修道士の握手が穏やかなものだったので、不思議に思ったから。

ウ ルロイ修道士と握手をすべからずといわれていたのを思い出したから。

〔　　〕

(2) ――線②「べからず集」はどのようなものか。次から選びなさい。

ア しなければならないことを集めたもの。

イ したほうがよいことを集めたもの。

ウ してもよいことを集めたもの。

エ してはいけないことを集めたもの。

〔　　〕

(3) ――線③「天使園に収容されたときの光景」とあるが、この光景がえがかれている箇所（かしょ）の最初と最後の三字を答えなさい。ただし句読点も字数に含（ふく）む。

□□□～□□□

(4) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 「わたし」がルロイ修道士と再会したのは、桜の花が散ってしまい、葉桜になっていた頃（ころ）だった。

イ ルロイ修道士は「わたし」に、別れを告げるために皆に会って回っているのだと話した。

ウ 「わたし」はルロイ修道士が園長を務める光ヶ丘天使園に、中学を卒業するまで厄介になっていた。

〔　　〕

握手 (2)

井上 ひさし

（爪が潰れたルロイ修道士の人さし指を見た「わたし」は、戦争中、ルロイ修道士が、日本人の監督官に木づちで左の人さし指をたたき潰された、といううわさを思い出しました。）

「日本人は先生に対して、ずいぶんひどいことをしましたね。※交換船の中止にしても国際法無視ですし、木づちで指をたたき潰すに至っては、もうなんて言っていいか。申し訳ありません。」

①ルロイ修道士はナイフを皿の上に置いてから、右の人さし指をぴんと立てた。指の先は天井を指してぶるぶる細かく震えている。また思い出した。ルロイ修道士は、「こら。」とか、「よく聞きなさい。」とか言う代わりに、②右の人さし指をぴんと立てるのが癖だった。

「総理大臣のようなことを言ってはいけませんよ。だいたい、日本人を代表してものを言ったりするのは傲慢です。それに、日本人とかカナダ人とかアメリカ人といったようなものがあると信じてはなりません。一人一人の人間がいる、それだけのことですから。」

「わかりました。」

わたしは右の親指をぴんと立てた。これもルロイ修道士の癖で、彼は、「わかった。」「よし。」「最高だ。」と言う代わりに、③右の親指をぴんと立てる。そのことも思い出したのだ。

※交換船～…戦争が始まった後、日本側の都合で交換船が中止になったために、ルロイ修道士はカナダに帰れなくなった、といううわさがあった。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「ルロイ修道士は……右の人さし指をぴんと立てた」とあるが、ルロイ修道士がこのようなしぐさをした理由となるように、次の文の（　　）に当てはまる言葉を、解答欄(かいとうらん)に合うように本文中から書きぬきなさい。

（ **A** ）しているような「わたし」のものの言い方が（ **B** ）であると注意しようと思ったから。

A［　　　　　　］
B［　　］

(2) ――線②「右の人さし指をぴんと立てる」とあるが、ルロイ修道士のこのしぐさの意味するものを全て選びなさい。

ア「こら。」　**イ**「よし。」　**ウ**「わかった。」
エ「よく聞きなさい。」　**オ**「最高だ。」

［　　］

(3) ――線③「右の親指をぴんと立てる」とあるが、ルロイ修道士のこのしぐさの意味するものを全て選びなさい。

ア「こら。」　**イ**「よし。」　**ウ**「わかった。」
エ「よく聞きなさい。」　**オ**「最高だ。」

［　　］

(4) 発言から読み取れるルロイ修道士の考えとして、最も適当なものを選びなさい。

ア 何かによって人を区別して考えるのではなく、一人一人の人間として捉(とら)えるべきである。
イ 自らの立場を理解したうえで、国ごとに異なる考え方を尊重した発言をするべきである。
ウ それぞれの国の違(ちが)いを乗り越(こ)えていくためには、傲慢さを捨てて謙虚(けんきょ)になるべきである。

［　　］

握手 (3)

井上 ひさし

「それよりも、わたしはあなたをぶったりはしませんでしたか。あなたにひどい仕打ちをしませんでしたか、もし、していたなら、謝りたい。」

「一度だけ、ぶたれました。」

ルロイ修道士の、両手の人さし指をせわしく交差させ、打ちつけている姿が脳裏に浮かぶ。これは危険信号だった。この指の動きでルロイ修道士は、「おまえは悪い子だ。」とどなっているのだ。そして次には、きっと平手打ちが飛ぶ。ルロイ修道士の平手打ちは痛かった。

「やはりぶちましたか。」

ルロイ修道士は①悲しそうな表情になって、ナプキンを折り畳む。食事はもうおしまいなのだろうか。

「でも、わたしたちは、ぶたれてあたりまえの、ひどいことをしでかしたんです。高校二年のクリスマスだったと思いますが、無断で天使園を抜け出して東京へ行ってしまったのです。」

翌朝、上野へ着いた。有楽町や浅草で映画と実演を見て回り、夜行列車で仙台に帰った。そして待っていたのがルロイ修道士の平手打ちだった。「あさっての朝、必ず戻ります。心配しないでください。捜さないでください。」という書き置きを、園長室の壁に貼りつけておいたのだが。

「ルロイ先生は一月間、わたしたちに口をきいてくれませんでした。②平手打ちよりこっちのほうがこたえましたよ。」

「そんなこともありましたねえ。あのときの東京見物の費用は、どうやってひねり出したんです。」

「それはあのとき白状しましたが……。」

「わたしは忘れてしまいました。もう一度教えてくれませんか。」

「準備に三か月はかかりました。先生からいただいた純毛の靴下だの、つなぎの下着だのを着ないでとっておき、駅前の闇市で売り払いました。鶏舎から鶏を五、六羽持ち出して、焼き鳥屋に売ったりもしました。」

③ルロイ修道士は改めて両手の人さし指を交差させ、せわしく打ちつける。ただしあの頃と違って、顔は笑っていた。

「先生はどこかお悪いんですか。ちっとも召しあがりませんね。」

「少し疲れたのでしょう。これから仙台の修道院でゆっくり休みます。カナダへたつ頃は、前のような大食らいに戻っていますよ。」

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「悲しそうな表情」とあるが、このときのルロイ修道士の心情として適当なものを選びなさい。

ア 自分が「わたし」をぶったことがあると聞き、驚いている。
イ 自分が「わたし」をぶってしまったことを悔やんでいる。
ウ 「わたし」がぶたれるようなことをしたのを残念に思っている。
エ 「わたし」がやったことを改めて注意しようと思っている。

〔　　〕

(2) ——線②「平手打ちよりこっちのほうがこたえましたよ」とはどういうことか。適当なものを選びなさい。

ア ルロイ修道士が口をきいてくれないので、自分のほうから話しかけようとしたということ。
イ 他のどんな人の平手打ちよりも、ルロイ修道士の平手打ちのほうがよほど痛かったということ。
ウ 平手打ちよりもルロイ修道士が口をきいてくれないことのほうが、つらさが身にしみたということ。
エ 一月間ルロイ修道士が口をきいてくれない期間のほうが、無断外出の期間よりも長かったということ。

〔　　〕

(3) ——線③「ルロイ修道士は改めて両手の人さし指を交差させ、せわしく打ちつける」とあるが、このときのルロイ修道士の心情として適当なものを選びなさい。

ア 「わたし」の無断外出に、改めて怒りがわいている。
イ 靴下や下着が売り払われていたと知り、驚いている。
ウ 無断外出を改めて白状させ、厳しく諭そうと思っている。
エ 悪いことをしたと指摘しつつも、昔を懐かしく感じている。

〔　　〕

握手 (4)

井上 ひさし

ルロイ修道士は壁の時計を見上げて、

「汽車が待っています。」

と言い、①右の人さし指に中指をからめて掲げた。これは「幸運を祈る」「しっかりおやり」という意味の、ルロイ修道士の指言葉だった。

上野駅の中央改札口の前で、思い切ってきいた。

「ルロイ先生、死ぬのは怖くありませんか。わたしは怖くてしかたがありませんが。」

かつて、わたしたちがいたずらを見つかったときにしたように、ルロイ修道士は②少し赤くなって頭をかいた。

「天国へ行くのですから、そう怖くはありませんよ。」

「天国か。本当に天国がありますか。」

「あると信じるほうが楽しいでしょうが。死ねば、何もないただむやみに寂しいところへ行くと思うよりも、にぎやかな天国へ行くと思うほうがよほど楽しい。そのために、この何十年間、神様を信じてきたのです。」

わかりましたと答える代わりに、わたしは右の親指を立て、それからルロイ修道士の手をとって、しっかりと握った。③それでも足りずに、腕を上下に激しく振った。

「痛いですよ。」

ルロイ修道士は顔をしかめてみせた。

上野公園の葉桜が終わる頃、ルロイ修道士は仙台の修道院でなくなった。まもなく一周忌である。わたしたちに会って回っていた頃のルロイ修道士は、身体中が悪い腫瘍の巣になっていたそうだ。葬式でそのことを聞いたとき、わたしは④知らぬ間に、両手の人さし指を交差させ、せわしく打ちつけていた。

別れの握手の描写

「わたし」とルロイ修道士の別れの場面では、これまでの場面とは二人の立場が入れ替わるかのように、「わたし」がルロイ修道士の手をしっかり握って腕を上下に激しく振り、ルロイ修道士が顔をしかめてみせている。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「右の人さし指に中指をからめて掲げた」とあるが、ルロイ修道士のこのしぐさの意味するものを全て選びなさい。

ア「こら」　イ「しっかりおやり」　ウ「よし」
エ「わかった」　オ「よく聞きなさい」
カ「幸運を祈る」　キ「最高だ」

〔　　〕

(2) ――線②「少し赤くなって頭をかいた」とあるが、このときのルロイ修道士の心情として適当なものを選びなさい。

ア　自分が天使園の子供たちに最期(さいご)の別れをしていることを気づかれてしまったと感じ、きまり悪く思っている。
イ「わたし」がかつていたずらをしていたことを思い出し、改めて天使園での思い出を懐(なつ)かしく感じている。
ウ　自分が病気であることを「わたし」に気づかれたくないので、なんとか話題を変えてごまかそうと思っている。
エ「わたし」との別れの時間が近づき、汽車に乗る前に改めて天使園での出来事に思いをはせ、別れを惜(お)しんでいる。

〔　　〕

(3) ――線③「それでも足りずに、腕を上下に激しく振った」とあるが、このときの「わたし」の様子として適当なものを選びなさい。

ア　ルロイ修道士にどのような言葉をかけたらよいかわからず、無理に大げさな動作で別れの挨拶(あいさつ)をしている。
イ　ルロイ修道士と別れることがつらく、何とかしてルロイ修道士を引き止めたいと態度で表している。
ウ　ルロイ修道士が病気であるかどうか確信がもてず、別れの前にルロイ修道士にたずねるか迷っている。
エ　ルロイ修道士との最後の別れになると感じ、ルロイ修道士への思いを全て伝えようとしている。

〔　　〕

(4) ――線④「知らぬ間に、……打ちつけていた」とあるが、このときの「わたし」の心情として適当なものを選びなさい。

ア　ルロイ修道士が「わたしたち」に会って回っていたときの病状を知り、改めてやるせなさを感じている。
イ　ルロイ修道士が病気であったと知り、そのことに思い至らなかった自分にふがいなさを感じている。
ウ　ルロイ修道士がなくなったことを実感し、無断外出の出来事を改めて申し訳なく思っている。

〔　　〕

握手 (5)

井上　ひさし

次の表は、教科書本文の内容をまとめたものである。

場面	内容
場面１	**ルロイ修道士との再会** 　桜の花が散って葉桜にはまだ間がある頃、上野公園にある西洋料理店で「わたし」はルロイ修道士と再会した。ルロイ修道士は、さよならを言うために皆に会って回っていた。
場面２	**ルロイ修道士との対話** 　ルロイ修道士が差し出した大きな手を見て、「わたし」は「天使の十戒」を思い出し、顔をしかめた。 **回想**　光ヶ丘天使園には「べからず集」があり、その中に「ルロイ先生とうっかり握手をすべからず」というのがあった。 **回想**　天使園に収容された「わたし」を、園長室のルロイ修道士は万力よりも強い**握手**で迎え、腕を勢いよく上下させた。 だが、（現在の）ルロイ修道士の**握手**は実に穏やかだった。 **回想**　ルロイ修道士は子供たちの食料を作ることに精を出していた。手はいつも汚れており、てのひらは固く、擦り合わせるたびにギチギチと鳴った。 **回想**　ルロイ修道士は日本人の監督官に左の人さし指を潰された、といううわさが流れていた。 　日本人がひどいことをしたと謝る「わたし」に、ルロイ修道士は右の人さし指をぴんと立て、注意した。「わたし」は、右の親指をぴんと立てて答えた。 　ルロイ修道士にぶたれた思い出を話す「わたし」の脳裏に、両手の人さし指をせわしく交差させ、打ちつけているルロイ修道士の姿が浮かんだ。 **回想**　「わたし」たちは高校二年のクリスマスに無断で天使園を抜け出し、東京へ行った。ルロイ修道士は帰って来た「わたし」たちを平手打ちし、一月間口をきいてくれなかった。 　体調をたずねた「わたし」に、ルロイ修道士は遺言のような言葉をかけた。「わたし」はルロイ修道士に、日本で暮らしていて楽しかったことをたずねた。 （最も楽しいとき）天使園で育った子供が世の中に出て一人前の働きをしているのを見るとき。（上川君の話） **回想**　ある春の朝、天使園の正門の前に捨てられていた子に、「わたし」たちは知恵を絞って姓名をつけた。 （最も悲しいとき）天使園で育った子が、自分の子を天使園に預けるためにやって来るのを見るとき。 　ルロイ修道士は時計を見上げ、右の人さし指に中指をからめて掲げた。別れのとき、「わたし」がルロイ修道士の手をしっかり握って**握手**をし、腕を上下に激しく振ると、ルロイ修道士は顔をしかめてみせた。
場面３	葉桜が終わる頃にルロイ修道士はなくなり、まもなく一周忌である。葬式で「わたし」たちに会って回っていた頃のルロイ修道士の病状を聞いた「わたし」は、知らぬ間に両手の人さし指を交差させ、せわしく打ちつけていた。 （語り手の「現在」＝ルロイ修道士がなくなって一年後）

確認テスト 教科書本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 次の中から、最も過去の出来事を選びなさい。

ア 「わたし」は、ルロイ修道士に西洋料理店で再会した。
イ 「わたし」は、ルロイ修道士に平手打ちをされた。
ウ 「わたし」は、ルロイ修道士から遺言のような言葉を聞いた。
エ 「わたし」は、ルロイ修道士の葬式に参列した。

〔　　　〕

(2) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 「わたし」が天使園に収容されたとき、ルロイ修道士の握手は力強いものだった。
イ 「わたし」と再会したとき、ルロイ修道士は「わたし」に万力より強い握手をした。
ウ 「わたし」と別れるとき、ルロイ修道士は「わたし」の手をとりしっかりと握った。

〔　　　〕

(3) 次の各文の（　　）に入る言葉をそれぞれ選びなさい。

① 「わたし」が、日本人がひどいことをしたと謝ったとき、ルロイ修道士は（　　）、「こら。」「よく聞きなさい。」というしぐさをした。
② ルロイ修道士の注意を受けた「わたし」は、（　　）、「わかりました。」という合図をした。
③ 「わたし」が無断で外出をしたとき、ルロイ修道士は（　　）、「おまえは悪い子だ。」という動きをした。
④ 別れのとき、ルロイ修道士は（　　）、「幸運を祈（いの）る」「しっかりおやり」と指言葉で伝えた。

ア 右の親指をぴんと立て
イ 右の人さし指をぴんと立て
ウ 右の人さし指に中指をからめて掲げ
エ 両手の人さし指をせわしく交差させて打ちつけ

①〔　　　〕 ②〔　　　〕 ③〔　　　〕 ④〔　　　〕

文法への扉１　「走って」いるのは誰？（文法を生かす）

文節・連文節の対応を正しくする

日本語の文は、**主・述・修飾**（しゅうしょく）**・接続・独立**の５種類の文の成分が組み合わさって成り立っている。文を書くときは、主・述の関係や、修飾・被（ひ）修飾の関係などの係り受けがきちんと対応するようにする。

●主・述の関係

主・述は文の成分の中でも文の構造の中心となるものである。主・述がうまく対応していないと、不自然な文になる。

（例）私の将来の夢は、国語の先生になって、言葉のおもしろさを伝えていきたいです。　→　×

※「夢は……伝えていきたい」と、主・述が対応していない。

私の将来の夢は、国語の先生になって、言葉のおもしろさを伝えていくことです。　→　○

●呼応の副詞

呼応の副詞を単独で使うと不自然な文になる。呼応の副詞はその副詞に対応する語句で受けるようにする。

（例）もし…なら、～。　たとえ…ても、～。
決して…ない。　まるで…ようだ。

文節・連文節の対応を明確にする

主・述、修飾・被修飾といった係り受けや、意味のまとまりの切れ目がわかりづらいと、文が複数の意味に解釈（かいしゃく）できてしまうことがある。文の表す意味が明確になるように、修飾語の位置を変えたり、文を分けたりするとよい。また、読点を付けると意味のまとまりがはっきりすることがある。

（例）今朝畑でとれた野菜をサラダにした。

A　畑でとれたのが、今朝。
B　サラダにしたのが、今朝。

・文を分ける。修飾語の位置を変える。

A　今朝畑で野菜がとれた。それをサラダにした。
B　畑でとれた野菜を、今朝、サラダにした。

※修飾語（部）は、被修飾語（部）の直前に置くと、係り受けがわかりやすい。

・読点を付ける。

A　今朝畑でとれた野菜を、サラダにした。
B　今朝、畑でとれた野菜をサラダにした。

打ち消しの表現を含（ふく）む文でも、表す意味が曖昧（あいまい）になる場合があるので、明確に伝わるように表現を工夫（くふう）するとよい。

（例）私は彼女（かのじょ）のように英語が得意ではない。

A　私は彼女と違（ちが）って、英語が得意ではない。
B　私は彼女と同じく、英語が得意ではない。

確認テスト

(1) 例に従って、次の文に含まれる主語に══線を、述語に──線を引きなさい。

(例) 鳥が　空を　飛ぶ。

形式に　注目すると、詩は　定型詩や　自由詩などに　分けられる。

(2) 例に従って、次の文の〰〰線部が修飾している文節に──線を引きなさい。

(例) 鳥が　空を　飛ぶ。

今朝、私は　山の　上で　美しい　朝日を　見た。

(3) 次の文の係り受けが正しくなるように、──線部を正しく直したものを選びなさい。

私の将来の目標は、人の役に立つ研究をしたいです。

ア　研究が目標です　　イ　研究が希望です

ウ　研究をすることです　　エ　研究を考えています

〔　　〕

(4) 次の文で、文節同士の係り受けがうまく対応していない箇所(かしょ)を選びなさい。

この学校を志望した理由は、自由な校風が理由です。

ア「志望した」と「理由は」　イ「理由は」と「理由です」

〔　　〕

(5) 次の文の（　　）に入る言葉を、解答欄(かいとうらん)に合うように答えなさい。

たとえがうまくいかないことがあったとし（　　）、目標に向かって努力し続ける姿勢が大切だと思います。

(6) （　　）内の意味がはっきりするように、次の各文に読点をそれぞれ一つ付けなさい。

① 私は　兄と　母に　相談した。

（相談した相手は兄と母）

② 先生は　うれしそうに　挙手した　生徒を　指名した。

（うれしそうなのは先生）

言葉1 相手や場に応じた言葉遣い

相手や場に応じた言葉遣い

相手とどのような関係か、どのような場での発言か、など、状況に応じて適切な言葉遣いをすることが大切である。敬語を使うか、改まった表現とくだけた表現のどちらを使うかなど、表現の使い分けに気をつける。

●相手との関係に応じた言葉遣い

目上の人や初対面の人などに対しては、敬語や改まった表現が用いられる。一方、親しい相手に対して敬語や改まった表現を使うと、よそよそしい印象を与えてしまう。

●場や状況に応じた言葉遣い

公的な場では、敬語や改まった表現が用いられる。私的な場では、相手との関係に応じて、くだけた表現を使って親しみを表すこともある。

言葉には、改まった印象を与えるもの、くだけた印象を与えるものがある。状況に応じてより適切な言葉を選ぶようにする。

(例) さっき・さきほど　※「さきほど」のほうが改まった表現。

間違えやすい敬語

敬語は、相手に対する敬意を表すほか、改まった気持ちを表したり、相手との距離をとったりする働きがある。状況や相手との関係に応じて、適切な敬語を使うことが大切である。敬語を使うときは、次の点に注意する。

・尊敬語と謙譲語を混同しない。

・自分や、身内など自分に近い人に尊敬語を使わない。

(例) ×お父さんは今 ×いらっしゃいません。 → 父は今おりません。

・敬語を重ねすぎない。

(例) ×お話を ×お承りする。 → お話を承る。

×お読みになられる。 → お読みになる。

確認テスト

(1) 次の――線部の言葉を、改まった言葉遣いに直しなさい。

（改まった場で）　会場までご案内するよ。

〔　　　　〕

(2) 次の①～③の各組の言葉で、より改まった表現をそれぞれ選びなさい。

① **ア** きのう　**イ** さくじつ
② **ア** きょう　**イ** ほんじつ
③ **ア** あす　**イ** あした

①〔　　〕　②〔　　〕　③〔　　〕

(3) 次の――線部の敬語を、解答欄(かいとうらん)に合うように正しく直しなさい。

私からご説明になる。

ご説明〔　　〕

(4) 次の――線部の敬語を正しく直しなさい。

声をかけてくださられた。

〔　　　　〕

学びて時に之を習ふ――「論語」から(1)

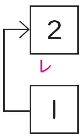
漢文の訓読

漢文を日本語の規則に従って読むことを**訓読**という。漢字だけで書かれた原文を**白文**といい、これに**訓点**を加えたものを**訓読文**という。主な訓点には、送り仮名・返り点・句読点がある。

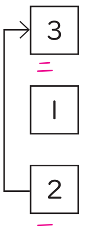
●**送り仮名**…漢字の右下に、カタカナで送り仮名を書く。訓読では、「て・に・を・は」といった助詞や、助動詞なども補う。

●**返り点**…漢文を日本語の語順で読むため、漢字の左下に補う。

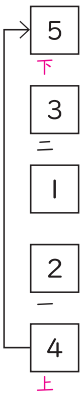
・**レ点**……下から上に一字返って読むことを表す。

（例）


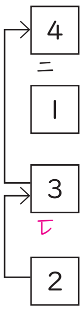
・**一・二点**…下から上に二字以上返って読むことを表す。

（例）


・**上・下点**…一・二点をはさみ、さらに返って読むことを表す。

（例）


・**一レ**……一点とレ点を組み合わせたもの。先にレ点に従って下から上に一字返り、さらに二字以上返って読む。

（例）


●**句読点**……語句や文の切れ目を表すために補う。

訓読文を、漢字仮名交じり文に書き改めたものを**書き下し文**という。訓読文を書き下し文に直すときは、次のような決まりがある。

・送り仮名はひらがなに改める。
・返り点が示す順に従って書き改める。
・漢字は原則そのままだが、「之（の）」「不（ず）」などの助詞・助動詞はひらがなに改める。

〈白文〉　学而時習之

〈訓読文〉　学ビテ而時ニ習フレ之ヲ、

〈書き下し文〉　学びて時に之を習ふ、

「学而時習之」の「而」のように、訓読で読まず、書き下し文でも省略する文字を**置き字**という。

（例）　学ビテ而（置き字）時ニ習フレ之ヲ、（学びて時に之を習ふ、）

確認テスト

(1) 返り点に従って、次の□に読む順の数字を書きなさい。

□レ□□レ□レ□

(2) 返り点に従って、次の□に読む順の数字を書きなさい。

□レ□二□レ□□一

(3) 返り点に従って、次の□に読む順の数字を書きなさい。

□下□□二□□一□上

(4) 返り点に従って、次の□に読む順の数字を書きなさい。

□二□□㆑□□

(5) 次の数字の順に従って□を読むように、返り点を書き入れなさい。

6 1 2 3 5 4

(6) 次の書き下し文となるように、訓読文に返り点を書き入れなさい。

之を知る者は、

知ル之ヲ者ハ、

(7) 次の訓読文を書き下し文に直しなさい。ただし「而」は置き字である。

温レメテ故(ふる)キヲ而知レバ新シキヲ

【　　　　】

(8) 次の訓読文を書き下し文に直し、解答欄(かいとうらん)に当てはまる言葉を書き入れなさい。ただし「不」は助動詞に当たる言葉、「而」は置き字である。

学ビテ而不(ざ)レバレ思ハ則(すなは)チ罔(くら)シ

【　　　　】則ち罔し

学びて時に之を習ふ ——「論語」から (2)

『論語』は、今から二千五百年以上前の古代中国の思想家・※孔子と、その弟子たちの言行録。孔子は仁や礼にもとづく政治を理想として、諸国に自らの思想を説いて回った。当時の混乱した時代にあってはその考えは受け入れられなかったが、孔子の教えはのちに儒教として広まった。

①子曰はく、「学びて時に之を習ふ、②亦説ばしからずや。
言われることには、学んで、機会があるごとに復習する、
朋遠方より来たる有り、亦楽しからずや。
友が遠方から訪ねてくる、
人知らずして慍みず、亦君子ならずや。」と。
世の人が自分を認めてくれなくても不満をいだかない、なんと徳の高い人格者ではないか。

子曰、「学而時習レ之、不二亦説一乎。有下朋自二遠方一来上、不二亦楽一乎。人不レ知而不レ慍、不二亦君子一乎。」（※学而）

子曰はく、
「③故きを温めて新しきを知れば、以て師たるべし。」と。
師となる資格がある。

子曰、
「温レ故而知レ新、可二以為一レ師矣。」（為政）

子曰はく、
「学びて思はざれば則ち罔し。
学ぶだけで自ら考えることがなければ、明確に理解することができない。
思ひて学ばざれば則ち④殆し。」と。
自分で考えるだけで学ぶことがなければ、危険である。

子曰、
「学而不レ思則罔。思而不レ学則殆。」（為政）

子曰はく、
「之を知る者は、之を好む者に⑤如かず。
何かを（詳しく）知っているという人は、（それだけだと）それを好きだという人に
之を好む者は、之を楽しむ者に如かず。」と。
何かを好きだという人は、（それだけだと）それを楽しむ人に

子曰、
「知レ之者、不レ如二好レ之者一。
好レ之者、不レ如二楽レ之者一。」（雍也）

※孔子…春秋時代の魯の国の思想家で、名は丘。一般に敬称で孔子と呼ばれる。
学而…論語の各篇は、「子曰」を除いた各篇の初めの句から名付けられる。為政・雍也も同様。

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「子」の説明として適当なものを選びなさい。

ア 子どもを表す言葉で、ここでは弟子を指している。
イ 相手を指す語句で、ここでは聞き手を指している。
ウ 男子に対する敬称(けいしょう)で、ここでは孔子を指している。

〔　　〕

(2) ――線②「亦説ばしからずや」の意味を選びなさい。

ア もう一度喜ぶことではない
イ なんとうれしいことではないか
ウ さらに説明が必要である

〔　　〕

(3) ――線③「故きを温めて新しきを知れば」の意味を選びなさい。

ア 昔からの友との旧交を温めて、新しい知人ができるようになれば
イ 過去のことは捨て去ってしまい、より新しいことを知るようにすれば
ウ 古い物事や学問に習熟して、そこから新たな知識が発見できるようになれば

〔　　〕

(4) ――線④「殆し」とあるが、なぜ危険だといっているのか。適当なものを選びなさい。

ア 自分の考えだけに頼(たよ)っていると、独断に陥(おちい)ってしまうから。
イ 人の意見ばかり聞いていると、考えがまとまらないから。
ウ 先人の知識を学んでも、それが正しいとは限らないから。

〔　　〕

(5) ――線⑤「如かず」の意味を選びなさい。

ア 学ばない　　イ 従わない
ウ 及(およ)ばない　　エ 似ていない

〔　　〕

作られた「物語」を超えて (1)

山極 寿一

1 私たちは、野生動物の行動を誤解することがよくある。かつてライオンやトラを凶暴な動物、キツネやタヌキをずる賢い動物と見なしていた。そう見えたのは、人間が彼らを追い詰めて敵対的な行動を取らせ、①それを人間に都合がいいように解釈してきたからである。いわば、人間が作った「物語」である。このような「物語」は動物たちに大きな悲劇をもたらすことがある。

2 私が研究しているゴリラは②その格好の例である。十九世紀の中頃にアフリカで初めてゴリラに出くわしたヨーロッパの探検家たちは、③ゴリラをとても凶暴で好戦的な動物と見なした。それは、二足で立ち上がり、てのひらで交互に胸をたたくドラミングとよばれる行動を、戦いを宣言していると解釈したからだった。ドラミングをするゴリラのオスを見て、襲われる恐怖におびえた探検家たちは銃の引き金を引いてゴリラを撃ち殺したのである。やがて、ゴリラをモデルにした「キング・コング」という映画が製作されて世界の人気をさらい、人々はますますゴリラを暴力の権化、戦い好きな怪物と見るようになった。

（1・2は教科書本文における形式段落番号を表します）

「　」付きの言葉

「　」は、通常の意味とは異なる特別な意味をもつことを表すことがある。本文中の「物語」は、通常の物語という言葉とは異なる意味で用いられている。

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「それ」が指す内容として、適当なものを選びなさい。

ア 人間が野生動物の行動を誤解することがよくあること。
イ 人間に追い詰められたときの、動物たちの敵対的な行動。
ウ 人間が野生動物の行動に対して都合がいい解釈をすること。
エ 人間によってもたらされる、動物たちにとっての悲劇。

〔　　〕

(2) ――線②「その格好の例」とあるが、何に対する例か。解答欄に合うように本文中から書きぬきなさい。ただし、記号も字数に含む。

□□□□□□□□□□が、
動物たちに□□□□□をもたらす例。

(3) ――線③「ゴリラをとても凶暴で好戦的な動物と見なした」とあるが、これはなぜか。適当なものを選びなさい。

ア 十九世紀の中頃まで、ヨーロッパでゴリラの存在は知られていなかったから。
イ ゴリラが取るドラミングという行動を、戦いの宣言であると解釈したから。
ウ 映画によって、ゴリラは戦い好きな怪物だという認識が広まっていたから。

〔　　〕

作られた「物語」を超えて (2)

山極 寿一

8 ①ゴリラのドラミングに対する誤解が広まったのは、人間がある印象を基に「物語」を作り、それを仲間に伝えたがる性質をもっているからだ。いつの頃からか人間は言葉を発明して、自分が体験したことを語ることができるようになった。そのおかげで、②人間は多くの知識を共有できるようになった。自分が体験していない地震や火事の出来事を人から聞くことによって、適切な対処の方法を知ることができる。まだ見たことのない動物と出会ったらどうすればいいか、それを知っている人から学ぶことができる。言葉は人間の社会に知識を蓄積し、新しい技術や工夫をもたらして、人間が飛躍的に発展する道を開いた。しかし一方で、言葉には自分の体験を脚色したり誇張したりする力もある。実際には見ていないことを、あたかも体験したかのように語ることもできるのだ。③それは人の口から口へ、またたくうちに広がっていく。最初の話が誤解によって作られていると、その間違いに気がつかないうちに、それが社会の常識になってしまうことがよくあるのだ。

（中略）

10 アフリカの森で暮らすゴリラの調査を通じて、私は人間の、自然や動物、そして人間自身を見る目がいかに誤解に満ちているかを知ることができた。その誤解を解くためには、相手の立場に立って、一つ一つの行動にどんな意味があるかを考えることが必要である。人から伝え聞いた「物語」と実際に自分が向かい合っている現象とを照らし合わせ、これまでの常識を疑ってみる態度も必要となる。「物語」によって作られた常識の陰に、しいたげられている生き物や人間がいないか、意味を取り違えて排除していることがないか、思いを巡らすことが大切だと思う。

（8・10は教科書本文における形式段落番号を表します）

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「ゴリラのドラミングに対する誤解」の事例からわかる人間の性質を、本文中から二十八字で探し、最初と最後の三字を答えなさい。ただし、句読点や記号も字数に含む。

□□□～□□□

(2) ——線②「多くの知識を共有できる」とあるが、この具体的な例となっているひと続きの二文を本文中から探し、最初の十字を答えなさい。

□□□□□□□□□□

(3) ——線③「それ」が指す内容を選びなさい。

ア 言葉によって人間の社会にもたらされ、社会を発展させた新しい技術や工夫。
イ 実際には見てもいないのに、あたかも自身で体験したかのように語られた話。
ウ 誤解が人の口から口へと、またたくうちに広がり、社会の常識になること。

〔　　〕

(4) 8段落では、人間の社会に誤解が広まる要因となっている言葉の性質について述べられている。次の文の（　　）に入る言葉を本文中から十九字で探し、最初と最後の三字を答えなさい。

・言葉には（　　）があり、見ていないことでも体験したかのように語ることができる。

□□□～□□□

(5) 10段落の内容に合うものを選びなさい。

ア 自分の立場でものごとの意味を一つ一つきちんと考え、自らも「物語」を語り継いでいくことが大切である。
イ さまざまな人から聞いた複数の「物語」を照らし合わせて、正しい「物語」を見つけることが大切である。
ウ 「物語」に基づく常識の陰にしいたげられている存在がいないか、思いを巡らすことが大切である。

〔　　〕

作られた「物語」を超えて(3)

山極 寿一

11 ドラミングが戦いの宣言だという「物語」の誤解を超えた先には、「ゴリラが人間とは別の表現を用いて平和を保っている」という私にとって新しい価値をもつ豊かな世界が広がっていた。体の仕組みや能力の違う動物の視点に立つためには、その動物が暮らしている自然をよく知ることが必要になる。同じように、この地球に生きるさまざまな人々に起きている「物語」の真実を知るためには、その人々が暮らしている文化や社会をよく理解することが必要であろう。

12 話を作り、伝える能力は、言葉をもった人間に多くの仲間と交流できる世界をもたらした。そのおかげで、人間は見知らぬ人々と出会ってもすぐに受け入れることができるし、遠く離れた場所で起こった出来事をいっしょに喜び、悲しむこともできる。現代はさまざまな文化や社会で暮らす人々が国境を越えて行き交う時代である。だからこそ、自分勝手な独りよがりな解釈を避け、常識を疑うこと、何より自分を相手の立場に置き換えて考えてみる視点が重要である。作られた「物語」を超えて、その向こうにある真実を知ろうとすることが、新しい世界と出会うための鍵なのだ。

（11・12は教科書本文における形式段落番号を表します）

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 動物を理解するために必要なことを、[二]段落から二十字で探し、最初と最後の三字を答えなさい。

〜

(2) さまざまな人々に起きている「物語」の真実を知るために必要なことを、[三]段落から二十五字で探し、最初と最後の三字を答えなさい。

〜

(3) 作られた「物語」を超えるために大切なこととして筆者が挙げていることを二つ選びなさい。

ア 話を作ったり、伝えたりすることを避けること。
イ さまざまな人々が国境を越えて行き交うこと。
ウ 独りよがりな解釈を避け、常識を疑うこと。
エ 自分を相手の立場に置いて考えてみること。

〔　・　〕

(4) 筆者の主張に合うものを選びなさい。

ア 体の仕組みや能力の違う動物の視点に立つことはできないが、人間であれば相手の視点に立つことができる。
イ さまざまな人々と出会うようになった現代では、誤解を乗り越えるために言葉によらない交流をすることが必要である。
ウ これまで知らなかった新しい世界に出会うためには、「物語」の向こうにある真実を知ろうとする態度が大切である。

〔　〕

作られた「物語」を超えて(4)

山極 寿一

次の表は、教科書本文の内容をまとめたものである。

区分	段落	内容
序論	1	私たちは野生動物の行動を誤解することがよくある。それは動物の行動を人間に都合よく解釈してきたからである。このような人間が作った「物語」は、動物たちに大きな悲劇をもたらすことがある。
本論（ゴリラの事例）	2・3	**ゴリラへの誤解** ゴリラのドラミングは戦いの宣言と解釈され、ゴリラは、凶暴で好戦的な動物と見なされていた。
	4〜6	**ドラミングの本当の意味** ドラミングは、自己主張、呼びかけ、不満や誘いかけなど、いろいろな意味をもつ。
	7	**ゴリラの悲劇** 好戦的で凶暴な動物だと見なされたために多くのゴリラがハンターの標的となった。また、動物園でも頑丈な檻の中で鎖につながれることが多かった。
本論（人間全体への一般化）	8	**人間の性質** 人間は、ある印象を基に「物語」を作り、それを仲間に伝えたがる性質をもっている。 ・言葉の利点……知識を共有でき、知識を蓄積して新しい技術や工夫をもたらす。 ・言葉の問題点……自分の体験を脚色したり、誇張したりする力がある。
	9	**「物語」が人間社会にもたらす悲劇** 誤解が「物語」として独り歩きし、争いや衝突となる。
	10	**誤解を解くために** 相手の立場に立って、一つ一つの行動の意味を考える、「物語」と実際の現象とを照らし合わせ、これまでの常識を疑ってみる、「物語」の陰にしいたげられている生き物や人間がいないか思いを巡らす。
結論	11・12	「物語」の真実を知るためには、その人々が暮らしている文化や社会をよく理解することが必要である。さまざまな文化や社会で暮らす人々が国境を越えて行き交う現代だからこそ、独りよがりな解釈を避け、常識を疑い、自分を相手の立場に置き換えて考えてみる視点が重要である。

（1〜12は教科書本文における形式段落番号を表します）

具体化・抽象化

本文では、内容を**具体化**したり**抽象化**したりしながら主張を導いている。具体的な事例が何に対する例になっているかに注意して論理の展開を捉えるとよい。

確認テスト　教科書本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 本文中のゴリラの事例の役割として適当なものを、二つ選びなさい。

ア 人間が作った「物語」が動物たちにもたらした悲劇の具体的な例となっている。

イ ゴリラと人間の体の仕組みや能力の違い（ちが）を、具体的な事例を通して検証している。

ウ 事例を通して、「物語」を作り伝えたがるという人間の性質を導き出している。

エ 「物語」を作り伝える能力が動物一般に共通するものであることを証明している。

〔　　・　　〕

(2) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア ゴリラのドラミングは戦いの合図であり、ゴリラの群れどうしが出会ったときやけんかが起こったときによくみられる。

イ ゴリラのドラミングは、二足で立ち上がり、てのひらで交互（こうご）に胸をたたく行動で、この行動の後はたいてい戦いになる。

ウ ゴリラのドラミングは、自分の気持ちを表したり、相手に誘いかけたりするための行動で、いろいろな意味をもつ。

〔　　〕

(3) 筆者の主張として適当なものを選びなさい。

ア 人間は言葉をもち、話を作り伝えることで発展してきたので、「物語」を生み出すという言葉の力を大切にすべきである。

イ 自分を相手の立場に置き換えてみる視点をもち、作られた「物語」の向こうにある真実を知ろうとすることが大切である。

ウ 「物語」は動物たちに大きな悲劇をもたらしたが、人間の社会においては新しい世界と出会うための鍵（かぎ）となるものでもある。

〔　　〕

漢字の音訓

●音読み（音）

漢字の中国語での発音を元にした読み方を音読みという。

（例）花（カ）

音読みは単独では意味がわかりにくいものも多い。

次の場合は音読みであることが多い。（例外もある）

・「ン」（撥音（はつおん））が入る。　（例）本（ホン）　※例外・何（なん）など

・小さい「ャ・ュ・ョ」が入る（拗音（ようおん））。　（例）朝（チョウ）

・ラ行で始まる。　（例）楽（ラク）

●訓読み（訓）

漢字が表す意味に基づいて、もともと日本語にあった言葉を当てはめた読み方を訓読みという。

（例）花（はな）

訓読みは単独でも意味がわかりやすいものが多い。

また、訓読みは送り仮名が付くものも多い。

漢字の中には、音読み・訓読みのどちらか一方でしか使われないものや、複数の音読み・訓読みがあるものもある。

（例）明　音　メイ・ミョウ
　　　　訓　あか-るい・あき-らか・あ-ける・あ-くる　など

確認テスト

(1) 次の中から、――線部が音読みのものを選びなさい。

ア 役場に行く。　イ 道具を使う。
ウ 仲間と集(つど)う。　エ 宿屋を出る。

(2) 次の中から、――線部が音読みのものを選びなさい。

ア 雪国への旅。　イ 友達からの話。
ウ 店内のお客。　エ 三枚のお皿。

(3) 次の中から、――線部が訓読みのものを選びなさい。

ア 作品の題名。　イ わずかな空席。
ウ 二階の窓ぎわ。　エ 熱いお茶。

(4) 次の中から、――線部が訓読みのものを選びなさい。

ア 動物　イ 穀物　ウ 着物　エ 荷物

(5) 次の熟語の中から、漢字が二字とも音読みであるものを選びなさい。

ア 空気　イ 手順　ウ 残高　エ 真夏

(6) 次の熟語の中から、漢字が二字とも訓読みであるものを選びなさい。

ア 番組　イ 片側　ウ 株券　エ 料理

漢字1 熟語の読み方(2)

熟語の読み

熟語は、音どうし（音＋音）、訓どうし（訓＋訓）という読み方のものが多いが、音と訓を組み合わせて読むものもある。

①音＋音 （例）山脈（サンミャク）

②訓＋訓 （例）朝日（あさひ）

③重箱（ジュウばこ）読み（音＋訓） （例）駅前（エキまえ）

④湯桶（ゆトウ）読み（訓＋音） （例）場所（ばショ）

熟字訓

熟語には、漢字一字ごとに読むのではなく、熟語全体で一つの訓を当てる特別な読み方をするものもあり、これを**熟字訓**という。

〈主な熟字訓〉

明日（あす）　小豆（あずき）　田舎（いなか）　乳母（うば）　叔父・伯父（おじ）　大人（おとな）　乙女（おとめ）　叔母・伯母（おば）

鍛冶（かじ）　風邪（かぜ）　固唾（かたず）　為替（かわせ）　昨日（きのう）　今日（きょう）　果物（くだもの）　今朝（けさ）　今年（ことし）　五月（さつき）

早苗（さなえ）　五月雨（さみだれ）　時雨（しぐれ）　尻尾（しっぽ）　竹刀（しない）　老舗（しにせ）　芝生（しばふ）　清水（しみず）　白髪（しらが）　相撲（すもう）

太刀（たち）　七夕（たなばた）　一日（ついたち）　梅雨（つゆ）　凸凹（でこぼこ）　名残（なごり）　雪崩（なだれ）　二十・二十歳（はたち）

二十日（はつか）　一人（ひとり）　日和（ひより）　二人（ふたり）　二日（ふつか）　吹雪（ふぶき）　迷子（まいご）　真面目（まじめ）　土産（みやげ）

息子（むすこ）　紅葉（もみじ）　八百屋（やおや）　大和（やまと）　弥生（やよい）　行方（ゆくえ）　若人（わこうど）

複数の読み方がある熟語

同じ漢字を使っていても、読み方によって意味が異なる熟語もある。

（例）風車　オランダの風車（フウシャ）。　風車（かざぐるま）で遊ぶ。

今日　今日（コンニチ）の世界情勢。　今日（きょう）はいい天気だ。

確認テスト

(1) 次の熟語の読み方をそれぞれ**ア**〜**エ**から選びなさい。

① 若葉〔　　〕　② 台所〔　　〕

③ 油絵〔　　〕　④ 社会〔　　〕

ア 二字ともに音読み　**イ** 二字ともに訓読み

ウ 重箱読み　**エ** 湯桶読み

(2) 次の熟語の読み方をそれぞれ**ア**〜**エ**から選びなさい。

① 役割〔　　〕　② 手紙〔　　〕

③ 行動〔　　〕　④ 値段〔　　〕

ア 二字ともに音読み　**イ** 二字ともに訓読み

ウ 重箱読み　**エ** 湯桶読み

(3) 次の熟語の読み方のうち、熟字訓であるほうを選びなさい。

昨日・今日・明日

ア きのう・きょう・あす

イ さくじつ・こんにち・みょうにち

〔　　〕

(4) 次の熟語の読みをそれぞれ答えなさい。ただし、いずれも熟字訓である。

① 五月雨〔　　〕　② 梅雨〔　　〕

③ 時雨〔　　〕

(5) 次の熟語の読みをそれぞれ答えなさい。ただし、いずれも熟字訓である。

① 竹刀〔　　〕　② 為替〔　　〕

③ 雪崩〔　　〕

(6) 次の——線部の読みをそれぞれ答えなさい。ただし、①〜③の読みはそれぞれ異なる。

① 演技が上手になる。〔　　〕

② 舞台(ぶたい)の上手に立つ。〔　　〕

③ 彼(かれ)のほうが一枚上手だった。〔　　〕

俳句の可能性（1）

宇多喜代子

A　どの子にも涼しく風の吹く日かな　　飯田龍太

（中略）

俳句が散文や報道記事などと違うのは、省略されている部分を、読む人の自由な解釈で補って鑑賞できるというところである。この句を読んで、「どの子にも」とは自分のことだ、と思う人もあるだろうし、校庭の木陰でクラスメイトとくつろいでいるときのことだと思う人もあるだろう。幼児の頃、海辺で遊んだ体験を思い出す人もあるだろう。

そんな想像をかきたてる個々別々の言葉を一つにつないでいるのが、五・七・五という「定型」と、「涼し」という夏を表す言葉、すなわち「季語」である。詳しい説明を省略する俳句には、一句の柱となる言葉に「季語」を用い、それを五・七・五という「定型」で表現するという基本的な約束がある。この約束を「有季定型」といい、俳句という韻文を支える大きな力となっている。「涼し」が夏の季語であることを知るには「歳時記」を繰ればよい。

俳句の基礎知識

●定型・季語

俳句は**五・七・五**の十七音からなり、それぞれ上五・中七・下五という。定型より音数が多いものを字余り、少ないものを**字足らず**という。俳句には季節を表す語である季語を詠み込む。

（季語の例）

- 春……梅、桜、たんぽぽ　・夏…梅雨、五月雨、若葉
- 秋……名月、天の川、鈴虫　・冬…雪、時雨、大根
- 新年…初春、門松

季語を詠み込む、五・七・五の定型で詠む、という俳句の決まりごとを**有季定型**という。これに対して、季語のない俳句を**無季俳句**、自由な音律の俳句を**自由律俳句**という。

●切れ字・句切れ

「や・かな・けり」など、句の切れ目を示す言葉を切れ字という。切れ字は、感動の中心を表したり、句に余情をもたせたりする働きもある。一句の中での言葉や意味の切れ目を句切れという。切れ字や、その他の言い切りの表現があるところなどに句切れがある。

- 初句切れ…五／七・五　・二句切れ…五・七／五
- 中間切れ…中七の途中で切れる　　などがある。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) **A**の句の季語が表す季節を「春・夏・秋・冬」の中から答えなさい。 〔　　〕

(2) **A**の句に含（ふく）まれる切れ字を答えなさい。 〔　　〕

(3) 季語を用い、五・七・五の定型で表現するという俳句の決まりを何というか。本文中から書きぬきなさい。 〔　　〕

(4) 俳句は韻文と散文のどちらに分類されるか。本文に合うほうを選び、記号で答えなさい。

ア 韻文　**イ** 散文 〔　　〕

(5) 次の①～④の季語が表す季節を、「春・夏・秋・冬」の中からそれぞれ答えなさい。

①こおろぎ 〔　　〕　②桜 〔　　〕

③蟬（せみ） 〔　　〕　④蜜柑（みかん） 〔　　〕

俳句の可能性(2)

宇多 喜代子

B いくたびも雪の深さを尋ねけり　　正岡子規

雪が激しく降っている。重い病気で寝ている子規が、僅かに見える障子の穴からその様子を見ている。どのくらい積もったのか、確かめることができない子規は、病室を出入りする人に、積雪の様子を幾度も尋ねる。今、くるぶしくらいまで積もったよ、とか、膝が埋まるくらいになったよ、などと聞き、庭や道路や公園に積もった雪景色を想像する。

降る雪のことを詳しく説明したくても、「定型」という制約の中では全部言い尽くせない。そこを補うために工夫された方法の一つに「切れ字」がある。冒頭の句で、これ以上は言えないという断念を表しているのが、最後の「かな」であり、子規の句の「けり」である。

（中略　次の三句は本文で紹介されている句です。）

C 跳箱の突き手一瞬冬が来る　　友岡子郷

D たんぽぽのぽぽと絮毛のたちにけり　　加藤楸邨

E 分け入つても分け入つても青い山　　種田山頭火

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) **B**の句の季語と季節を答えなさい。

季語［　　］　季節［　　］

(2) **D**の句の季語と季節を答えなさい。

季語［　　］　季節［　　］

(3) **B**と**D**の句に共通して含(ふく)まれている切れ字を答えなさい。

［　　］

(4) **B**～**E**の句の中から、自由律俳句を選び、記号で答えなさい。

［　　］

(5) **B**～**E**の句の中から、体言止めが用いられている句を選び、記号で答えなさい。

［　　］

(6) ――線部「『定型』という制約」とは何か。適当なものを選びなさい。

ア 五・七・五の十七音で表現しなければならないこと。
イ 季節を表す言葉を用いなければならないこと。
ウ 句の切れ目を表す言葉を用いなければならないこと。

［　　］

(7) 次の①～④は、**B**～**E**のどの句について述べたものか。それぞれ記号で答えなさい。

① 声に出して読むと、唇(くちびる)の形や声の響(ひび)きが、丸いわた毛の軽(かろ)やかさを感じさせる。
② 繰(く)り返される言葉に、旅の中ひたすら深い山道を歩む作者の姿が感じられる。
③ 空中に飛び上がった一瞬が捉(とら)えられており、大気に感じた冬の訪(おとず)れがうたわれている。
④ 病床(びょうしょう)にあって、雪が降る外の景色が気にかかる作者の心情がうたわれている。

①［　　］　②［　　］　③［　　］　④［　　］

俳句を味わう (1)

A　バスを待ち大路の春をうたがはず　　石田波郷

B　ちるさくら海あをければ海へちる　　高屋窓秋

C　萬緑の中や吾子の歯生え初むる　　中村草田男

D　山越える山のかたちの夏帽子　　桂　信子

確認テスト　俳句を読んで、問いに答えなさい。

(1)　**C**の句の季語と季節を答えなさい。

季語［　　　　］　季節［　　　］

(2)　**C**の句に含まれる切れ字を書きぬき、句切れの種類を**ア**～**ウ**で答えなさい。

切れ字［　　　　］　句切れ［　　　］

ア　初句切れ　**イ**　二句切れ　**ウ**　中間切れ

(3)　**D**の句で用いられている表現技法として、適当なものを選びなさい。

ア　体言止め　**イ**　対句　**ウ**　直喩　［　　　］

(4)　次の①～④は、それぞれ**A**～**D**のどの句について述べたものか。記号で答えなさい。

①　山を越え行く人の帽子が山の姿と重なるように描かれている。

②　日常の中ではっきりと感じた季節の変化が捉えられている。

③　海の色と対照的な花びらの色あいが鮮やかに感じられる。

④　草木の生命力と我が子の姿が呼応するように捉えられている。

①［　　］　②［　　］　③［　　］　④［　　］

俳句を味わう (2)

E　いなびかり北よりすれば北を見る　橋本多佳子

F　※金剛の露ひとつぶや石の上　川端茅舎

G　冬菊のまとふはおのがひかりのみ　水原秋櫻子

H　星空は無音の※瀑布鯨飛ぶ　神野紗希

I　咳をしても一人　尾崎放哉

※金剛…ダイヤモンド。　瀑布…滝。

確認テスト

俳句を読んで、問いに答えなさい。

(1) 次の句の季語と季節をそれぞれ答えなさい。

E　季語［　　］　季節［　　］

F　季語［　　］　季節［　　］

G　季語［　　］　季節［　　］

H　季語［　　］　季節［　　］

(2) Fの句に含まれる切れ字を書きぬき、句切れの種類をア～ウで答えなさい。

切れ字［　　］　句切れ［　　］

ア　初句切れ　イ　二句切れ　ウ　中間切れ

(3) Fの句で用いられている表現技法として、適当なものを選びなさい。［　　］

ア　体言止め　イ　対句　ウ　直喩

(4) E～Iの中から自由律俳句を選び、記号で答えなさい。［　　］

言葉の釣り糸を垂らす

いしい しんじ

(筆者は、自分の心の奥底に釣り糸みたいに言葉を垂らしてみると、忘れてしまったと思っていたもの、日頃から思っていても言葉になっていない気持ち、まだ起きていないことなどが、言葉の周りにくっついて、意識の上に現れてくると述べています。)

言葉を書くということは、世の中にある、見える言葉をいろいろとつなぎ合わせて、人に読ませるための文章を作るだけじゃない。普段からも、誰かに手紙を書いたり、メッセージを送ったりしますね。そういうとき、不意に、自分の中へ、ある言葉が沈んでいくことがある。自分の中に眠っているけれども、日常の暮らしでは気づいていない何か、それをざっと集めて、大きくすることが、言葉にはできるんですね。

言葉とは、過去・現在・未来の記憶を引っ掛ける、釣り針みたいなものです。何もないと思っていたのに、実はこんなにいっぱい沈んでいたのか、と、ある言葉を自分の中に浸すだけで、ふわっと内側からわかってきます。

僕が勧めたいのは、①どんなことについても、自分の中に言葉を垂らしてみること。すると、ほぼ必ず、それまでの自分が思ってもみなかった何かがくっついてきてくれます。

遊びの瞬間でも、仲のいい誰かとご飯を食べているときでも、夫婦二人で黙って散歩しているときも、試みに、ある言葉を自分の中にすっと垂らすと、自分の中から、それまでになかった光が差し、外にあふれてくる。ひょっとして、②こういうことは、生きていていちばん大事なことなんじゃないか、と僕は思います。自分の中にある、眠っているものをかき立てながら生きていくというのは。

僕たちはずっと言葉を使って、言葉を交わして、言葉でいろんなものを自分の中へ収めていきます。それはいつしか、言葉の形をほどいて、意識の水底へ、ゆっくりと沈んで目に見えなくなります。でも、それは消えないんですよ。目に見えない、言葉になっていない記憶や未来からの光が、実は僕たちの生を底から支えている。③「書く」ことは、自分の本当の生を、言葉の形で取り戻すことにほかならないのです。

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「どんなことについても、自分の中に言葉を垂らしてみること」とあるが、自分の中に言葉を垂らすとどのようなことが起こるのか。次の文の（　　）に入る言葉を本文中から三十字以上三十五字以内で探し、最初と最後の三字を答えなさい。ただし句読点も字数に含む。

自分の中に言葉を垂らすと、（　　）が言葉にくっついて現れる。

□□□ 〜 □□□

(2) ——線②「こういうこと」とは何か。適当なものを選びなさい。

ア 遊びのときや仲がいい人と過ごすときでも、きちんと言葉を交わすこと。

イ それまで自分になかったものを求めて、外に出て行こうとすること。

ウ 自分の中にある、眠っているものをかき立てながら生きていくこと。

〔　　〕

(3) ——線③「『書く』ことは、自分の本当の生を、言葉の形で取り戻すことにほかならない」とあるが、なぜこのように言えるのか。適当なものを選びなさい。

ア 「書く」ことを通じて、誰かにメッセージを送ったり、コミュニケーションを取ったりすることができるから。

イ 「書く」ことを通じて、自分の中へ収めるものを目に見えるようにし、忘れずに記憶し続けることができるから。

ウ 「書く」ことを通じて、実は自分の生を意識の底で支えている目に見えないものが、言葉になって現れるから。

〔　　〕

和語・漢語・外来語

●和語

もともと日本語で使われていた語を和語（大和言葉）という。通常、**ひらがな**や漢字の**訓読み**で表される。意味がわかりやすいものが多く、やわらかい語感がある。日常会話でよく使われる。

（例）速さ　くだもの　大きい　関わる　わたし

●漢語

漢字の音読みで読まれる語を漢語という。漢語には、中国から伝わったもののほか、日本で作られたものもある。外国語を翻訳するときに新しい漢語が作られることもある。漢語は、通常、**音読み**の漢字で表されるが、ひらがなで書かれていても音読みであれば漢語である。意味が抽象的な語も多く、硬い語感がある。ニュースや新聞などでよく使われる。

（例）速度　果実　巨大　関与　僕

●外来語

漢語以外で、外国語から日本語に取り入れられた語を外来語という。外来語の多くは欧米から取り入れられたものだが、日本で作られた和製英語などもある。**カタカナ**で表記されることが多い。新鮮さや軽快な印象を与える語が多い。

（例）スピード　フルーツ　ビッグ　コミットメント
たばこ　かるた

●混種語

和語・漢語・外来語が組み合わさってできた語を混種語という。

（例）りんご畑（漢語「りんご」＋和語「畑」）
紙コップ（和語「紙」＋外来語「コップ」）
高層ビル（漢語「高層」＋外来語「ビル」）

和語・漢語・外来語は、それぞれ語感が異なる。場面に応じて適切な語を選ぶことが大切である。

確認テスト

(1) 次の言葉の種類をそれぞれ**ア**〜**ウ**から選びなさい。

① ルール［　　］　② 決まり［　　］

③ 規則［　　］

ア 和語　**イ** 漢語　**ウ** 外来語

(2) 次の言葉の種類をそれぞれ**ア**〜**ウ**から選びなさい。

① 学校［　　］　② クラス［　　］

③ 夏休み［　　］

ア 和語　**イ** 漢語　**ウ** 外来語

(3) 次の食べ物に関する言葉の種類をそれぞれ**ア**〜**ウ**から選びなさい。

① てんぷら［　　］　② にく［　　］

③ まめ［　　］

ア 和語　**イ** 漢語　**ウ** 外来語

---

(4) 次の外来語と似た意味の漢語をそれぞれ**ア**〜**エ**から選びなさい。

① サポート［　　］　② プラン［　　］

③ オピニオン［　　］　④ モラル［　　］

ア 計画　**イ** 道徳　**ウ** 支援（しえん）　**エ** 意見

(5) 次の混種語の構成をそれぞれ**ア**〜**カ**から選びなさい。

① レポート用紙［　　］　② 空き缶（かん）［　　］

③ 窓ガラス［　　］　④ 労働組合［　　］

ア 和語＋漢語　**イ** 和語＋外来語

ウ 漢語＋和語　**エ** 漢語＋外来語

オ 外来語＋和語　**カ** 外来語＋漢語

挨拶――原爆の写真によせて

石垣　りん

挨拶(あいさつ)――原爆(げんばく)の写真によせて　　石垣(いしがき)　りん

あ、
この焼けただれた顔は
一九四五年八月六日
その時広島にいた人
二五万の焼けただれのひとつ

すでに此(こ)の世にないもの

とはいえ
友よ
向き合った互(たがい)の顔を
も一度見直そう
戦火の跡(あと)もとどめぬ
すこやかな今日の顔
①すがすがしい朝の顔を
その顔の中に明日の表情をさがすとき
私(わたし)は②りつぜんとするのだ

地球が原爆を数百個所持して
生と死のきわどい淵(ふち)を歩くとき
③なぜそんなにも安らかに
あなたは美しいのか

しずかに耳を澄(す)ませ
何かが近づいてきはしないか
見きわめなければならないものは目の前に
④えり分けなければならないものは
手の中にある
午前八時一五分は
毎朝やってくる

一九四五年八月六日の朝
一瞬(いっしゅん)にして死んだ二五万人の人すべて
いま在る
あなたの如(ごと)く　私の如く
やすらかに　美しく　油断していた。

確認テスト

詩を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「すがすがしい朝の顔を」とあるが、作者は「すがすがしい朝の顔を」どうせよと呼びかけているのか。解答欄に当てはまるように詩の中から七字で書きぬきなさい。

すがすがしい朝の顔を［　　　　　　　］

(2) ――線②「りつぜん」の意味を選びなさい。

ア　とりとめがない様子。
イ　物事が急に起こる様子。
ウ　過去のことに感じ入る様子。
エ　恐ろしさにふるえおののく様子。

［　　］

(3) ――線③「なぜそんなにも……美しいのか」とあるが、これはなぜだと考えられるか。詩の内容をふまえて適当なものを選びなさい。

ア　世界の状況に気を配り、戦争が近づいてきはしないかと注意を払っているから。
イ　原爆の恐ろしさや、世界が死と隣り合わせの状況にあることを認識していないから。
ウ　世界の平和のために必要なことを見きわめ、自ら行動に移しているから。

［　　］

(4) ――線④「えり分けなければならないものは手の中に」と対句になっている部分を探し、最初と最後の三字を書きぬきなさい。

［　　　］～［　　　］

故郷 (1)

魯迅
竹内好 訳

厳しい寒さの中を、※二千里の果てから、別れて二十年にもなる故郷へ、私は帰った。

もう真冬の候であった。そのうえ、故郷へ近づくにつれて、空模様は怪しくなり、冷たい風がヒューヒュー音を立てて、船の中まで吹き込んできた。※苫の隙間から外をうかがうと、鉛色の空の下、わびしい村々が、いささかの活気もなく、あちこちに横たわっていた。①覚えず寂寥の感が胸に込み上げた。

ああ、これが二十年来、片時も忘れることのなかった故郷であろうか。

私の覚えている故郷は、まるでこんなふうではなかった。私の故郷は、もっとずっとよかった。その美しさを思い浮かべ、その長所を言葉に表そうとすると、しかし、その影はかき消され、言葉は失われてしまう。やはりこんなふうだったかもしれないという気がしてくる。そこで私は、こう自分に言い聞かせた。もともと故郷はこんなふうなのだ――進歩もないかわりに、私が感じるような寂寥もありはしない。そう感じるのは、自分の心境が変わっただけだ。なぜなら、②今度の帰郷は決して楽しいものではないのだから。

今度は、故郷に別れを告げに来たのである。私たちが長いこと※一族で住んでいた古い家は、今はもう他人の持ち物になってしまった。明け渡しの期限は今年いっぱいである。どうしても旧暦の正月の前に、住み慣れた古い家に別れ、なじみ深い故郷をあとにして、私が今暮らしを立てている異郷の地へ引っ越さねばならない。

※二千里…今の中国の一里は約五百メートル。ここでは遠い距離を表している。
苫…スゲ・カヤなどの草を編み、舟や小屋などにかけて雨露をしのぐもの。
一族…大家族制度では、血縁のある数家族が集住し、共同で生活する。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「覚えず寂寥の感が胸に込み上げた」のはなぜか。適当なものを選びなさい。

ア 真冬の帰郷だったため、あまりに寒さが厳しかったから。
イ 故郷が、記憶(きおく)にあるものに比べあまりにわびしかったから。
ウ 片時も忘れることがなかった故郷にようやく到着(とうちゃく)したから。

〔　　〕

(2) ――線②「今度の帰郷は決して楽しいものではない」とあるが、なぜ今度の帰郷は楽しいものではないのか。適当なものを選びなさい。

ア 厳しい寒さの中を、二千里も離れた地から帰郷したから。
イ 故郷が、覚えていたものとあまりにも違(ちが)っていたから。
ウ もともと故郷は進歩のないものだと思い知らされたから。
エ 家を明け渡し、故郷に別れを告げるための帰郷だから。

〔　　〕

(3) 本文の内容に合うものを、二つ選びなさい。

ア 「私」が故郷に帰ったのは真冬の頃(ころ)であった。
イ 「私」が故郷に帰ったのは今年の正月以来であった。
ウ 「私」は今年まで、一族とともに故郷に住んでいた。
エ 「私」は今、異郷の地で暮らしを立てている。

〔　　・　　〕

故郷 (2)

魯迅
竹内好 訳

　明くる日の朝早く、私は我が家の表門に立った。屋根には一面に枯れ草の※やれ茎が、折からの風になびいて、①この古い家が持ち主を変えるほかなかった理由を説き明かし顔である。いっしょに住んでいた親戚たちは、もう引っ越してしまった後らしく、ひっそり閑としている。自宅の庭先まで来てみると、母はもう迎えに出ていた。後から、八歳になる甥のホンル（宏児）も飛び出した。

　母は機嫌よかったが、②さすがにやるせない表情は隠し切れなかった。私を座らせ、休ませ、茶をついでくれなどして、すぐ引っ越しの話は持ち出さない。（中略）

「一、二日休んだら、親戚回りをしてね、そのうえでたつとしよう。」と、母は言った。

「ええ。」

「それから、ルントウ（閏土）ね。あれが、いつも家へ来るたびに、おまえのうわさをしては、しきりに会いたがっていましたよ。おまえが着くおよその日取りは知らせておいたから、今に来るかもしれない。」

　このとき突然、私の脳裏に③不思議な画面が繰り広げられた――紺碧の空に、金色の丸い月が懸かっている。その下は海辺の砂地で、見渡すかぎり緑のすいかが植わっている。その真ん中に、十一、二歳の少年が、銀の首輪をつるし、鉄の刺叉を手にして立っている。そして、一匹の「※チャー」（猹）を目がけて、ヤッとばかり突く。すると「チャー」は、ひらりと身をかわして、彼の股をくぐって逃げてしまう。

　この少年がルントウである。彼と知り合ったとき、私もまだ十歳そこそこだった。もう三十年近い昔のことである。その頃は、父もまだ生きていたし、家の暮らし向きも楽で、私は坊ちゃんでいられた。

※やれ茎…折れ、しなびた茎。
チャー…アナグマに似た動物とされる。猹は魯迅の造字。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「この古い家が持ち主を変えるほかなかった理由を説き明かし顔である」とはどういうことか。適当なものを選びなさい。

ア もう「私」の親戚が引っ越してしまったことが、家屋からわかるということ。

イ 家を明け渡さねばならないわけが、家屋の様子からわかるということ。

ウ 心情の変化のために、故郷の屋根の見た目も違って見えるということ。

〔　　〕

(2) ――線②「さすがにやるせない表情は隠し切れなかった」とあるが、このときの母の心情として適当なものを選びなさい。

ア 故郷が変わってしまったことを、つらく感じている。

イ 「私」に、引っ越しを打ち明けることをためらっている。

ウ 住み慣れた家を離れなければならず、せつなく思っている。

〔　　〕

(3) ――線③「不思議な画面」が具体的にえがかれている箇所の最初と最後の三字を答えなさい。ただし、句読点も字数に含む。

□□□～□□□

故郷(3)

魯迅
竹内好 訳

(三十年ほど前、「私」は家の雇い人の息子・ルントウと知り合い、仲よくなりました。)

「今は寒いけどな、夏になったら、おいらとこへ来るといいや。おいら、昼間は海へ貝殻拾いに行くんだ。赤いのも、青いのも、何でもあるよ。『鬼おどし』もあるし、『観音様の手』もあるよ。晩には、父ちゃんと①すいかの番に行くのさ。おまえも来いよ。」

「どろぼうの番？」

「そうじゃない。通りがかりの人が、喉が渇いて、すいかを取って食ったって、そんなの、おいらとこじゃ、どろぼうなんて思やしない。番をするのは、穴熊や、はりねずみや、チャーさ。月のある晩に、いいかい、ガリガリって音がしたら、チャーがすいかをかじってるんだ。そうしたら、手に刺叉を持って、忍び寄って……。」

(中略)

「かみつかない？」

「刺叉があるじゃないか。忍び寄って、チャーを見つけたら突くのさ。あん畜生、利口だから、こっちへ走ってくるよ。そうして、股をくぐって逃げてしまうよ。なにしろ、毛が油みたいに滑っこくて……。」

こんなにたくさん珍しいことがあろうなど、それまで私は思ってもみなかった。海には、そのような五色の貝殻があるものなのか。すいかには、こんな危険な経歴があるものなのか。私はすいかといえば、②果物屋に売っているものとばかり思っていた。

「おいらとこの砂地では、高潮の時分になると『跳ね魚』がいっぱい跳ねるよ。みんな、かえるみたいな足が二本あって……。」

ああ、ルントウの心は神秘の宝庫で、③私の遊び仲間とは大違いだ。こんなことは、私の友達は何も知ってはいない。ルントウが海辺にいるとき、彼らは私と同様、高い塀に囲まれた中庭から四角な空を眺めているだけなのだ。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「すいかの番」とあるが、これはどのようなことをするのか。適当なものを選びなさい。

ア どろぼうがすいかを取って食べないように番をする。
イ 穴熊などがすいかをかじらないように番をする。
ウ 果物屋に売られているすいかを見張る番をする。

〔　　〕

(2) ――線②「果物屋に売っているものとばかり思っていた」とあるが、これはどういうことを表しているか。適当なものを選びなさい。

ア すいかは果物屋に売られているものだと勘違い(かんちがい)していたということ。
イ 果物屋に売られていなかったので、すいかを知らなかったということ。
ウ すいかを果物屋に売っているものとしてしか見ていなかったということ。

〔　　〕

(3) ――線③「私の遊び仲間とは大違いだ」とあるが、どのように違うのか。適当なものを選びなさい。

ア ルントウが珍しいことをよく知っているのに対し、「私」や「私」の遊び仲間は狭(せま)い世界のことしか知らない。
イ ルントウや「私」の遊び仲間がいろいろなものごとに詳(くわ)しいのに対し、「私」はものごとの経験が少ない。
ウ ルントウや「私」が裕福(ゆうふく)な暮らしをしているのに対し、「私」の遊び仲間は経済的なゆとりがない。

〔　　〕

故郷 (4)

魯迅
竹内好 訳

ある寒い日の午後、私は食後の茶でくつろいでいた。表に人の気配がしたので、振り向いてみた。思わずあっと声が出かかった。急いで立ち上がって迎えた。

来た客はルントウである。ひと目でルントウとわかったものの、そのルントウは、①私の記憶にあるルントウとは似もつかなかった。背丈は倍ほどになり、昔の艶のいい丸顔は、今では黄ばんだ色に変わり、しかも深いしわが畳まれていた。目も、彼の父親がそうであったように、周りが赤く腫れている。私は知っている。海辺で耕作する者は、一日中潮風に吹かれるせいで、よくこうなる。頭には古ぼけた毛織りの帽子、身には薄手の綿入れ一枚、全身ぶるぶる震えている。紙包みと長いきせるを手に提げている。その手も、私の記憶にある血色のいい、丸々した手ではなく、太い、節くれだった、しかもひび割れた、松の幹のような手である。

私は、感激で胸がいっぱいになり、しかしどう口をきいたものやら思案がつかぬままに、ひと言、

「ああルンちゃん――よく来たね……。」

続いて言いたいことが、後から後から、数珠つなぎになって出かかった。※チアオチー、跳ね魚、貝殻、チャー……。だが、それらは、何かでせき止められたように、頭の中を駆け巡るだけで、口からは出なかった。

彼は突っ立ったままだった。喜びと寂しさの色が顔に現れた。唇が動いたが、声にはならなかった。最後に、②うやうやしい態度に変わって、はっきりこう言った。

「旦那様！……。」

③私は身震いしたらしかった。悲しむべき厚い壁が、二人の間を隔ててしまったのを感じた。私は口がきけなかった。

※チアオチー～…チアオチー、跳ね魚、貝殻、チャー、いずれも三十年前のルントウとの会話に登場する。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「私の記憶にあるルントウとは似もつかなかった」について、次の各選択肢(せんたくし)を、『私』の記憶にあるルントウ」と、「現在のルントウ」に分け、記号で答えなさい。

ア 顔は艶のいい丸顔である。
イ 顔には深いしわがある。
ウ 目の周りが赤く腫れている。
エ 手は血色がよく、丸々している。
オ 手は太く、節くれだち、ひび割れている。

「私」の記憶にあるルントウ〔　　　〕
現在のルントウ〔　　　〕

(2) ——線②「うやうやしい」の意味を選びなさい。

ア 親しみがあり、誠実なさま。
イ 遠慮(えんりょ)がなく、ぶしつけなさま。
ウ 若くて、物事に慣れていないさま。
エ 相手を敬い、丁重にふるまうさま。

〔　　　〕

(3) ——線③「私は身震いしたらしかった」とあるが、このときの「私」について正しく述べているものを選びなさい。

ア 身分や境遇(きょうぐう)の違(ちが)いの中で自分とルントウが隔てられてしまったことに強い衝撃(しょうげき)を受けている。
イ 思いがけないルントウの言い方によって、自分とルントウの立場の違いを思い出している。
ウ ルントウが自分の記憶にある姿と異なることに驚(おどろ)き、時間の流れを改めて感じている。

〔　　　〕

故郷 (5)

魯迅
竹内好 訳

（ある日の午後、「私」は三十年ぶりにルントウに会いました。）

彼(かれ)は後ろを向いて、「シュイション（水生）、旦那様(だんなさま)にお辞儀(じぎ)しな。」と言って、彼の背に隠(かく)れていた子供を前へ出した。①これぞまさしく三十年前のルントウであった。いくらか痩(や)せて、顔色が悪く、銀の首輪もしていない違(ちが)いはあるけれども。「これが五番目の子でございます。世間へ出さぬものですから、おどおどしておりまして……。」

母とホンルが二階から下りてきた。話し声を聞きつけたのだろう。

「御隠居様(ごいんきょさま)、お手紙は早くにいただきました。全く、うれしくてたまりませんでした、旦那様がお帰りになると聞きまして……。」と、ルントウは言った。

「まあ、②なんだってそんな他人行儀にするんだね。おまえたち、昔は兄弟の仲じゃないか。昔のように、③シュンちゃん、でいいんだよ。」と、母はうれしそうに言った。

「めっそうな、御隠居様、なんとも……とんでもないことでございます。あの頃(ころ)は子供で、何のわきまえもなく……。」そして、またもシュイションを前に出してお辞儀させようとしたが、子供ははにかんで、父親の背にしがみついたままだった。

「これがシュイション？　五番目だね。知らない人ばかりだから、はにかむのも無理ない。ホンルや、あちらでいっしょに遊んでおやり。」と、母は言った。

言われて、ホンルはシュイションを誘(さそ)い、シュイションもうれしそうに、そろって出ていった。母はルントウに席を勧(すす)めた。彼はしばらくためらった後、ようやく腰(こし)を下ろした。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「これぞまさしく三十年前のルントウであった」とあるが、このあと、三十年前のルントウと「私」のように、シュイションとホンルがすぐに仲よくなることが読み取れる一文がある。その文の最初の三字を書きぬきなさい。

(2) ——線②「なんだってそんな他人行儀にするんだね」とあるが、ルントウはなぜこのような態度をとっているのか。最も適当なものを選びなさい。

ア 身分や立場の違いをわきまえるべきだと考えているから。
イ 「私」に長く会わなかったので、距離(きょり)を感じているから。
ウ 子供の頃からの親しみを礼儀で示そうとしているから。

〔　　〕

(3) ——線③「シュンちゃん」とあるが、ルントウはこの人物のことを何と呼んでいるか。適当なものを選びなさい。

ア 御隠居様　イ 旦那様　ウ 水生

〔　　〕

(4) かつての「私」とルントウの関係を表す言葉を本文中から四字で探し、書きぬきなさい。

故郷(6)

魯迅
竹内好 訳

(ルントウと再会した数日後、「私」たちは故郷から旅立ちました。)

船はひたすら前進した。両岸の緑の山々は、たそがれの中で薄墨色に変わり、次々と船尾に消えた。

私といっしょに窓辺にもたれて、暮れてゆく外の景色を眺めていたホンルが、ふと問いかけた。

「伯父さん、僕たち、いつ帰ってくるの。」

「帰ってくる？ どうしてまた、行きもしないうちに、帰るなんて考えたんだい。」

「だって、シュイションが僕に、家へ遊びに来いって。」

大きな黒い目をみはって、彼はじっと考え込んでいた。

私も、私の母も、はっと胸をつかれた。(中略)

古い家はますます遠くなり、故郷の山や水もますます遠くなる。だが名残惜しい気はしない。自分の周りに目に見えぬ高い壁があって、その中に自分だけ取り残されたように、気がめいるだけである。すいか畑の銀の首輪の小英雄の面影は、元は鮮明このうえなかったのが、今では急にぼんやりしてしまった。これもたまらなく悲しい。

母とホンルとは寝入った。

私も横になって、船の底に水のぶつかる音を聞きながら、今、自分は、自分の道を歩いているとわかった。思えば私とルントウとの距離は全く遠くなったが、若い世代は今でも心が通い合い、現にホンルはシュイションのことを慕っている。せめて彼らだけは、私と違って、互いに隔絶することのないように……とはいっても、彼らが一つ心でいたいがために、私のように、むだの積み重ねで魂をすり減らす生活を共にすることは願わない。また、ルントウのように、打ちひしがれて心が麻痺する生活を共にすることも願わない。また、他の人のように、やけを起こして野放図に走る生活を共にすることも願わない。希望をいえば、彼らは新しい生活をもたなくてはならない。①私たちの経験しなかった新しい生活を。

希望という考えが浮かんだので、②私はどきっとした。たしかルントウが香炉と燭台を所望したとき、私は、相変わらずの偶像崇拝だな、いつになったら忘れるつもりかと、心ひそかに彼のことを笑ったものだが、今私のいう希望も、やはり手製の偶像にすぎぬのではないか。ただ、彼の望むものはすぐ手に入り、私の望むものは手に入りにくいだけだ。

まどろみかけた私の目に、海辺の広い緑の砂地が浮かんでくる。その上の紺碧の空には、金色の丸い月が懸かっている。思うに希望とは、もともとあるものともいえぬし、ないものともいえない。それは③地上の道のようなものである。もともと地上には道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。

時代背景

『故郷』では古い時代の風習が象徴的に登場し、語り手の「私」を通して社会に対する批判や新しい時代への希望が訴えられている。ここには、作品が発表された当時の社会に対する魯迅の思いが反映されている。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「私たちの経験しなかった新しい生活」とあるが、これに対して、「私」の世代が経験した生活を、本文中から十五字以上二十字以内で三つ探し、それぞれ最初の三字を答えなさい。

(2) ――線②「私はどきっとした」とあるが、「私」は何に気付いてこのように感じたのか。適当なものを選びなさい。

ア 私が思う希望というものは、地上の道のようなものではないかということ。
イ ルントウが香炉と燭台で偶像崇拝をするのを、心の中でひそかに笑っていたこと。
ウ 若い世代に新しい生活を望むのは、偶像崇拝と変わらないのではないかということ。
エ 私よりルントウが望むもののほうがすぐに手に入るので、笑うのはおかしいということ。

〔　〕

(3) ――線③「地上の道のようなものである」とあるが、これはどういうことを表しているか。最も適当なものを選びなさい。

ア もともと地上には道がないように、実際には存在しないものだということ。
イ 歩くときは道に沿って歩くように、最初からそこにあるものだということ。
ウ 同じ願いのもとに進む人が増えれば、確かなものになるのだということ。
エ 具体的な道筋を示さなければ、行動する人は増えないのだということ。

〔　〕

故郷 (7)

魯迅
竹内好 訳

次の表は、教科書本文の内容をまとめたものである。

帰郷	母との対面	ルントウの思い出（回想）
真冬のある日 厳しい寒さの中、「私」は、古い家を明け渡すため、二十年ぶりに故郷に帰った。故郷のわびしさに寂寥の感が胸に込み上げた。	**明くる日の朝早く** 「私」は家で、母、甥のホンルと対面した。母から、ルントウが「私」に会いたがっていたと聞いた。	・脳裏に繰り広げられた不思議な画面 紺碧の空に、金色の丸い月。銀の首輪をした十一、二歳の少年（＝ルントウ） ・ルントウと知り合ったとき（三十年ほど前） 「私」は十歳くらいで、家の暮らし向きも楽だった。ルントウは「私」の家の雇い人の息子で、正月に家に来たルントウと、「私」はすぐに仲よくなった。 （ルントウとの会話） チアオチー、跳ね魚、貝殻、チャー。 ルントウの心は神秘の宝庫で、高い塀に囲まれた中庭から四角な空を眺めているだけの「私」や遊び仲間とは大違いだった。

ヤンおばさんとの再会	ルントウとの再会	旅立ち
「豆腐屋小町」とよばれていたヤンおばさんを「私」は見忘れてしまっていた。ヤンおばさんは「身分のあるお方は目が上を向いている」と言い、その後、母の手袋をズボンの下にねじ込んで出ていった。	**ある寒い日の午後** 「私」はルントウと再会するが、その姿は記憶にあるルントウとは似もつかなかった。ルントウの「旦那様」という言葉に、「私」は、悲しむべき厚い壁が二人の間を隔ててしまったのを感じた。ルントウの子・シュイションは、ホンルに誘われ、うれしそうに遊びに出ていった。	**旅立ちの日** 「私」たちは船に乗って旅立った。ホンルの「シュイションが……遊びに来いって。」という言葉に、「私」も母も、はっと胸をつかれた。 ・「私」の思い 「私」は、若い世代が「新しい生活」をもつことを希望する。まどろんだ「私」の目に、紺碧の空、金色の丸い月が浮かぶ。「私」は、希望とは地上の道のようなものだと考える。

確認テスト　教科書本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 「私」の母は、「私」とともに二十年ぶりに故郷を訪れた。
イ ホンルは「私」の息子で、「私」の帰郷を庭先で待っていた。
ウ ルントウは「私」と三十年ほど前に出会い、仲よくなった。
エ シュイションはルントウの甥で、ホンルと仲よくなった。

〔　　〕

(2) 次の各選択肢を、回想の場面と現在の場面に分け、記号で答えなさい。

ア ルントウの顔は深いしわが畳まれ、目の周りが赤く腫れていた。
イ ルントウは艶のいい丸顔で、毛織りの帽子をかぶっていた。
ウ ヤンおばさんの立った姿は、まるでコンパスのようだった。
エ ヤンおばさんは顔におしろいを塗り、一日中座っていた。

回想の場面〔　　〕
現在の場面〔　　〕

(3) 次の中から、「私」が新しい生活をもってほしいと願っている「若い世代」に当たる人物を二人選び、記号で答えなさい。

ア シュイション　イ ホンル　ウ ヤンおばさん
エ ルントウ　オ 「私」

〔　　・　　〕

慣用句

二つ以上の言葉が組み合わさって全体として特別な意味を表す言葉を、**慣用句**という。

〈体や心に関連する慣用句〉

・**頭**が下がる……敬服する。
・**顔**が広い……知り合いが多い。
・**目**に余る……黙(だま)って見ていられないほどひどい。
・**耳**を疑う……聞いたことが信じられない。
・**鼻**につく……嫌(いや)な臭(にお)いがする。嫌味に感じられる。
・**口**が重い……口数が少ない。
・**歯**が立たない……対抗(たいこう)できない、かなわない。
・**肩**(かた)を並べる……相手と対等の地位で張り合う。
・**腕**(うで)を上げる……上達する。
・**手**を焼く……対処に困り、てこずる。
・**胸**がすく……心につかえていたことがとれ、さわやかになる。
・**腹**を割る……本心を全てさらけ出す。
・**足**を洗う……好ましくない行いや仲間から離(はな)れ、まともになる。
・**心**に刻む……忘れないように覚えておく。
・**息**が合う……互(たが)いの調子が合う。
・**骨**が折れる……苦労する、面倒(めんどう)である。

〈衣食住に関連する慣用句〉

・**袖**(そで)にする……親しくしていた人を冷淡(れいたん)に扱(あつか)う。
・**襟**(えり)を開く……思っていることをすっかり打ち明ける。
・**お茶**を濁(にご)す……いいかげんな処置でその場をごまかす。
・**棚**(たな)に上げる……都合の悪いことに触(ふ)れないでおく。
・**薄紙**(うすがみ)をはぐよう……病気が少しずつ良くなる様子。
・**水**に流す……過去のいざこざをなかったことにする。

〈動植物に関連する慣用句〉

・**鵜**(う)呑(の)みにする……物事を十分考えずに受け入れる。
・**鶴**(つる)の一声……周囲を否応(いやおう)なく従わせる権力者の一言。
・**花**を持たせる……相手を立てて手柄(てがら)を譲(ゆず)る。
・高嶺(たかね)の**花**……遠くから見ているだけで、手に入らないもの。
・**根**も**葉**もない……何の根拠(こんきょ)もない。
・**根**に持つ……恨(うら)みに思い、いつまでも忘れない。

確認テスト

(1) 次の慣用句の意味を、それぞれ**ア**～**エ**から選びなさい。

① 顔が立つ〔　　〕　② 顔が広い〔　　〕
③ 顔を出す〔　　〕　④ 顔から火が出る〔　　〕

ア 知り合いが多い。
イ 世間に対して面目が保たれる。
ウ 恥ずかしさで顔が真っ赤になる。
エ 訪問する、会に出席する。

(2) （　）内の意味の慣用句になるように、□に当てはまる言葉をそれぞれ漢字一字で書きなさい。

① □が高い（よいものを見分ける力がある。）
② □が痛い（自分の弱点を突かれ、聞くのがつらい。）
③ □にかける（自慢する、得意がる。）
④ □がすべる（言ってはいけないことをうっかり言う。）

(3) 次の慣用句の意味を、それぞれ**ア**～**エ**から選びなさい。

① 板につく〔　　〕　② 油を売る〔　　〕
③ 筆が立つ〔　　〕　④ 水を差す〔　　〕

ア むだ話をして仕事を怠ける。
イ 経験を積み、動作や態度が役目にしっくり合う。
ウ 文章を書くのが上手い。
エ 上手くいっているものをじゃまする。

(4) （　）内の意味の慣用句になるように、□に当てはまる言葉をそれぞれ**ア**～**エ**から選びなさい。

① □の額（場所がせまいこと。）〔　　〕
② □の涙（ごくわずかなもの。）〔　　〕
③ □の子（大切にして手放さないもの。）〔　　〕
④ □が合う（気が合う、意気投合する。）〔　　〕

ア 雀　**イ** 猫　**ウ** 馬　**エ** 虎

言葉3 慣用句・ことわざ・故事成語(2)

ことわざ

古くから世間で言いならわされてきた教訓的な言葉を**ことわざ**という。

- **石橋をたたいて渡る**……用心に用心を重ねる、大変慎重な様子。
- **馬の耳に念仏**……人の意見を聞き流し、少しも聞き入れようとしないこと。
- **果報は寝て待て**……幸運は人力ではどうすることもできないので、静かに時機を待つのがよいということ。
- **弘法にも筆の誤り**……その道に長じた人も時には失敗すること。
- **三人寄れば文殊の知恵**……平凡な人も三人集まればすばらしい知恵が出るものだということ。
- **知らぬが仏**……知らないから、平気でいられること。
- **出る杭は打たれる**……頭角をあらわす者は人から憎まれがちだということ。
- **灯台下暗し**……身近なことはかえってわかりにくいものだということ。
- **泣きっ面に蜂**……不運なときに、さらに不幸が重なること。
- **花よりだんご**……風流なものや外見がよいものよりも、利益のあるものを重んじること。
- **身から出たさび**……自分の行いが原因で災いにあうこと。
- **焼け石に水**……少しの援助や努力では効果がないこと。

故事成語

中国の古典に記された話など、言い伝えられている昔の出来事がもととなってできた言葉を**故事成語**という。

- **覆水盆に返らず**……一度してしまったことは取り返しがつかないということ。
- **他山の石**……他人のつまらない言動も、自分への戒めや人格を磨くのに役立つということ。
- **背水の陣**……一歩も引くことができない立場で、全力で事に当たること。
- **塞翁が馬（人間万事塞翁が馬）**……その人にとって何が幸か不幸かは、予測しがたいということ。
- **竹馬の友**……幼い頃からの友人、幼なじみ。

誤用されやすい表現

- **浮足立つ**……恐れや不安でそわそわする。
- **気が置けない**……気遣いしなくてよい、心から打ち解けられる。
- **敷居が高い**……相手に不義理をしたために、その人の家に行きにくい。
- **ぞっとしない**……面白くない。
- **情けは人のためならず**……人への親切は、やがてよい報いとなって自分に返ってくる。

確認テスト

(1) 次のことわざの意味を、それぞれア～エから選びなさい。

① 雨降って地固まる　② 枯れ木も山のにぎわい
③ 朱に交われば赤くなる　④ たで食う虫も好き好き

ア 人は交わる友人によって善にも悪にもなること。
イ つまらないものでも、ないよりはましであること。
ウ 人の好みはさまざまであるということ。
エ もめごとの後にかえってよい状態になること。

①［　］②［　］③［　］④［　］

(2) 次のことわざと似た意味のことわざを、それぞれア～エから選びなさい。

① 医者の不養生［　］　② 猿も木から落ちる［　］
③ 月とすっぽん［　］　④ のれんに腕押し［　］

ア 弘法にも筆の誤り　イ 紺屋の白袴
ウ 提灯に釣り鐘　エ ぬかにくぎ

(3) 次の故事成語の意味を、それぞれア～エから選びなさい。

① 杞憂［　］　② 漁夫の利［　］
③ 蛍雪の功［　］　④ 五十歩百歩［　］

ア 当事者が争うすきに第三者が利益を横取りすること。
イ 苦学した成果、また、苦労して学問にはげむこと。
ウ 少しの違いはあっても、本質的には変わらないこと。
エ 心配する必要のないことを心配すること。

(4) 「気が置けない人」の意味を選びなさい。

ア 油断ならない人　イ 気が許せる人

［　］

(5) 「情けは人のためならず」の意味を選びなさい。

ア 情けをかけることは、かえってその人のためにならない。
イ 情けをかけることは、自分によい報いとなって返ってくる。

［　］

漢字2

漢字の造語力(1)

翻訳語

幕末から明治時代にかけて、西洋の文化や学問が積極的に日本に取り入れられるようになった。この時代、それまでになかった事柄を表す西洋の語を翻訳するために、たくさんの翻訳語が生まれた。

(例) 社会…英語 society の翻訳語。
個人…英語 individual の翻訳語。

※漢語を翻訳語として用いたもの。

翻訳語の中には、もともとあった熟語を別の意味に転用したものもある。

(例) 自然…元は、おのずからの、本来のままの状態を指していたが、英語の nature などの翻訳語としても用いられるようになった。

新しい語

社会の変化に応じて新しい事柄を表す語が生まれるときには、漢字や熟語を組み合わせて新しい熟語が作られることも多い。

(例) 可視化…目に見えない物事を、グラフや図版などにしてわかりやすくすること。

また、熟語を組み合わせて長い熟語になったときは、省略した語が使われることもある。

(例) 学割…学生割引の省略。

確認テスト

(1) 次の英単語の翻訳語をそれぞれ選びなさい。

① culture［　］　② science［　］

③ telephone［　］　④ time［　］

ア 科学　**イ** 時間　**ウ** 電話　**エ** 文化

(2) 次の熟語の意味をそれぞれ選びなさい。

① 印象［　］　② 権利［　］

③ 理性［　］　④ 倫理（りんり）［　］

ア 人として守り行うべきあり方、道徳。

イ 物事が人の心に与（あた）える直接的な感じ。

ウ 筋道を立てて考え、判断する精神の働き。

エ あることを自由に行うことができる資格。

(3) 次の語の意味を選びなさい。

循環型（じゅんかんがた）社会

ア 誰（だれ）もが互（たが）いの人格と個性を尊重し合い、人々の多様なあり方を認められる社会。

イ 資源を繰（く）り返し利用することで、資源の消費を抑（おさ）え、環境（かんきょう）への負荷（ふか）を減らした社会。

ウ 情報通信ネットワークを通して自由で安全に情報を発信・共有することができる社会。

［　］

(4) 次の語は、ある熟語を省略したものである。元となった熟語を四字で答えなさい。

国連

□□□□

漢字２　漢字の造語力(2)

漢字から熟語の意味を捉える

熟語は抽象的な意味を表すことも多い。含まれる一つひとつの漢字の意味やその熟語の類義語・対義語を知ると、その熟語の意味が捉えやすくなる。

(例) 普遍…すべてのものに当てはまること。
※「普」「遍」ともに広く行きわたるという意味がある。
対義語は「特殊」。

漸増…だんだん増えること。
※「漸」はだんだん、「増」は増えるという意味。
対義語は「漸減」。

類義語・対義語の中には共通する漢字を含むものも多い。似た意味の漢字、対の意味の漢字に注目して熟語の意味を捉えるとよい。

(例) 安価≒廉価　※「安」と「廉」が似た意味を表す。
顕在↔潜在　※「顕」と「潜」が対の意味を表す。

共通する漢字を含まない類義語・対義語も、含まれる漢字の意味を考え、熟語の意味を捉えるとよい。

(例) 用意≒準備　　生産↔消費

複数の熟語が組み合わされて作られた熟語も、含まれる漢字や熟語から全体の意味を捉えることができる。

(例) 地産地消…「地」域で生「産」されたものを、その「地」域で「消」費すること。
綱紀粛正…「綱紀」は国家を治める根本の規律、「粛正」は厳しく取り締まって不正をなくすこと。

また、熟語の意味をきちんと捉えることで、漢字を間違えにくくなる。

(例) 異口同音　※異句同音ではない。
多くの人々が口をそろえて同じことをいうこと。
異なる口が同じ音を発することから。

確認テスト

(1) 次の各組が類義語の組み合わせとなるように、□に入る漢字をそれぞれ後から選びなさい。

① 改良・改□

② 罷免（ひめん）・免□

③ 賛成・同□

③ 欠点・□所

〈 除　短　遠　衆　備　意　善　職 〉

(2) 次の各組が対義語の組み合わせとなるように、□にそれぞれ漢字を書きなさい。

① 直接・□接

② 積極・□極

③ 偶然（ぐうぜん）・□然

④ 絶対・□対

(3) 次の各組が対義語の組み合わせとなるように、□にそれぞれ漢字を書きなさい。

① 天然・人□

② 需要（じゅよう）・供□

③ 保守・□新

④ 困難・□易

(4) 四字熟語となるように、解答欄（かいとうらん）に入る漢字をそれぞれ答えなさい。

① □機一転

② □刀直入

③ □和雷同（らいどう）

④ □機応変

複数の意見を読んで、考えよう ――正解が一つに決まらない課題と向き合う (1)

【テーマ】
環境問題を解決するために、今、何が必要か。

A まずは、科学的根拠に基づき、現状や原因を正しく理解すること

真鍋 淑郎

産業革命前の千年間ではあまり変動しなかった地球の平均気温は、その後、二〇二〇年までの間に、既に一度ほど上昇している。気候モデルの計算によると、このままでは今世紀中にさらに二度ほど上がり、温暖化は海上よりも陸上で、熱帯よりも北極域で著しく進むと考えられる。

（中略）

温暖化がもたらす被害の大きさは、地域や世代によって異なる。そのため、問題への向き合い方にも温度差があり、今なお、「地球温暖化は起きていない」と主張する人もいる。しかし、問題の認識そのものがずれていると、解決は難しい。まずは、科学的根拠に基づき、現状や原因を正しく理解すること。そのうえで有効な対策を講じることが、問題を解決するための第一歩である。

B 社会全体で解決できる仕組みを作る

伊勢 武史

（筆者は、ごみ拾いや節電、募金といった個人の良心や自己犠牲に基づく取り組みだけに頼っていては、地球環境を守ることはできないと考えています。）

では、どうすればよいか。個人に負担を強いるのではなく、社会全体で解決する工夫が必要だ。例えばスーパーで食材を選ぶ際、私たちはなるべく安くておいしいものを選ぶ。あたりまえだ。このような人間の「あたりまえ」を利用して、環境を守る仕組みを作るのだ。つまり、安くておいしいものを選んだら、最も環境によい商品だった、という状況を作り出せばよい。①こんな都合のよい状況の実現のために「インセンティブ」という考え方が使える。これは経済学の用語であり、人々の意思決定や行動を変化させる要因のことだ。例えば、政府が環境によい製品に補助金を出すことで、その製品の価格は安くなり、消費者に人気が出る。逆に、環境に悪い製品には補助金が出ないので、価格が高くなり、あまり売れなくなる。このように、②政策決定者がしっかりとインセンティブを実施すれば、「お買い得」みたいな言葉に弱い我々でも環境保全に貢献できる。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) Aの文章で、「環境問題を解決するために、今、何が必要か。」というテーマに対する筆者の提言を表すひとつづきの二文を探し、その最初の三字を答えなさい。

(2) Aの文章の内容に合うものを選びなさい。

ア 産業革命以前の千年間で地球の平均気温は数度上昇しており、現在もその傾向(けいこう)が続いている。

イ 気候モデルの計算によると、地球の平均気温は今世紀中に現状から二度ほど上がると予想される。

ウ 地球の温暖化は、海上よりも陸上で、北極域よりも熱帯の地域でより進むと考えられている。

〔　　〕

(3) Bの文章の——線①「こんな都合のよい状況」とはどのような状況か。適当なものを選びなさい。

ア 社会全体で一人一人が自らの良心に基づいて行動し、地球環境を守ろうとすることがあたりまえになる状況。

イ 世の中の人が自分の「あたりまえ」を改め、安くておいしいものよりも環境によい商品をあたりまえに選ぶ状況。

ウ 安くておいしいものを選ぶというあたりまえの行動をすれば、結果的に環境によい商品を選ぶことになるという状況。

〔　　〕

(4) Bの文章の——線②「政策決定者がしっかりとインセンティブを実施すれば」とあるが、インセンティブを政策として実施する場合の具体的な例が書かれたひとつづきの二文を探し、その最初の三字を答えなさい。

複数の意見を読んで、考えよう ――正解が一つに決まらない課題と向き合う (2)

C　一人が踏み出す一歩は、実は大きな一歩　　堅達 京子

気温の上昇を止めるために、すぐにでも取り組めることは、たくさんある。電気をこまめに消すこと。自転車や公共交通機関を使うこと。木を植えること。マイバッグを持ち歩き、プラスチックなど石油製品の使用を控えること。

だが、①そんな小さなことの積み重ねで、本当にこの状況が変わるのかと感じる人もいるだろう。

確かに、個人がこうしたことに取り組むだけでは、温暖化は止まらない。一人一人の直接的な力はとても小さい。しかし、もし膨大な数の個人が一度に行動を起こせば、どうだろうか。国や企業も活動の方針を変えざるをえなくなる。多くの人が行動を起こせば、間接的に世の中を動かす効果があるのだ。

身の回りでも既に変化は現れ始めている。例えば、店舗の電力を一部、再生可能エネルギーに切り替えたり、商品の包装を削減したりする企業が増えている。②私たち消費者が、持続可能性に配慮した商品を選ぶようになれば、企業の態度は変化する。一人が踏み出す一歩は、実は大きな一歩なのだ。

複数の意見を比較する

［テーマ］
環境問題を解決するために、今、何が必要か。

●真鍋さん
提言の要旨　まずは科学的根拠に基づいて環境問題の現状や原因を正しく理解することが必要であり、そのうえで有効な対策を講じることが問題を解決するための第一歩である。
事例　世界各地の観測データ、気候モデルの計算による予測。

●伊勢さん
提言の要旨　個人に負担を強いるのではなく、社会全体で環境問題を解決する工夫が必要であり、どのような考えをもった人にも通用するような現実的な仕組みが求められている。
事例　インセンティブを用いた政策。

●堅達さん
提言の要旨　市民一人一人が環境問題を自分のこととして捉え、行動を起こし、声を上げれば、国や企業の活動の方針を変え、問題の解決につながる。
事例　電気をこまめに消すといった個人の取り組み、店舗の電力を一部、再生可能エネルギーに切り替えるといった企業の変化。

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) Cの文章の――線①「そんな小さなことの積み重ねで、本当にこの状況が変わるのか」とあるが、この考えに対する筆者の主張として最も適当なものを選びなさい。

ア　確かに個人の取り組みでは温暖化を止めることはできないため、環境に配慮したとしても、小さなことの積み重ねでは状況に影響は与えないと言える。

イ　消費者による節電や石油製品の使用を控えるといった活動では世の中を動かすことはできないため、現在の活動の方針を変える一歩が必要である。

ウ　一人一人の行動の直接的な力は小さくても、多くの人が行動を起こせば国や企業を動かすので、間接的には状況を変える力があると言える。

［　　］

(2) Cの文章の――線②「私たち消費者が、……企業の態度は変化する」とあるが、企業の変化の事例が具体的に述べられている一文を探し、その最初の三字を答えなさい。

［　　　］

(3) 次の各文はどの筆者の提言について述べたものか。適当なものをそれぞれ選びなさい。

❶ 環境問題を解決していくうえで一人一人の行動の重要性を指摘しており、多くの人が問題を自分のこととして捉え、今すぐに行動することを呼びかけている。

❷ 環境問題を解決していくうえで社会全体で問題を解決する現実的な仕組みの必要性を指摘しており、具体的な例としてインセンティブに基づく政策を挙げている。

❸ 環境問題を解決していくうえで科学的な根拠に基づいた認識の重要性を指摘しており、問題の現状や原因をさまざまなデータをもとに説明している。

ア　真鍋さん　　イ　伊勢さん　　ウ　堅達さん

❶［　　］　❷［　　］　❸［　　］

文法への扉2 「ない」の違いがわからない？（文法のまとめ）(1)

文節

文を自然な発音や意味となる範囲（はんい）でできるだけ短く区切ったまとまりを**文節**という。各文節は文の中でさまざまな働きをする。

● **主語・述語** （例）庭に／きれいな／花が／咲く。

主語と述語の関係を、**主・述の関係**という。

● **修飾（しゅうしょく）語** （例）庭に／きれいな／花が／咲く。

修飾語と修飾語を受ける文節の関係を、**修飾・被（ひ）修飾の関係**という。

● **接続語** （例）晴れた。／だから、／外で／遊んだ。

接続語がつなぐ文同士の関係や、接続語と後に続く部分の関係を、**接続の関係**という。

● **独立語** （例）ああ、／すばらしい／景色だ。

独立語とそれ以外の文節の関係を**独立の関係**という。

二つ以上の文節がまとまって主・述・修飾・接続・独立の働きをするものを**連文節**といい、**主部**・**述部**・**修飾部**・**接続部**・**独立部**などとよぶ。連文節では、並立（へいりつ）や補助といった関係がみられることがある。

・**並立の関係** （例）雨と 風が 強い。（並立の関係（主部））　山は 高く けわしい。（並立の関係（述部））

・**補助の関係** （例）犬が 走って いる。（補助の関係（述部））　今日は 暑く ない。（補助の関係（述部））

単語

それだけで意味をもつ最も小さい言葉の単位を**単語**という。単語は大きく自立語と付属語に分けられる。

● **自立語**…単独で文節を作ることができる。

※各文節に一つだけ含まれる。

● **付属語**…単独では文節を作ることができない。

※文節に含まれないことや、複数含まれることもある。

（例）赤い（自）／花（自）が／咲き（自）まし た。

単語を分類したものを**品詞**という。単語は、**自立語**か**付属語**か、**活用**があるかないか、どのような文の成分になるか、などによって10種類の品詞に分けられる。

- 単語
  - **自立語**
    - 活用する
      - 述語になる（用言）
        - 動作・作用・存在を表す・終止形が「ウ段」で終わる → **動詞**
        - 状態・性質を表す
          - 終止形が「い」で終わる → **形容詞**
          - 終止形が「だ・です」で終わる → **形容動詞**
    - 活用しない
      - 主語になる（体言） → 物事の名前を表す・物事を指し示す → **名詞**
      - 修飾語になる
        - 主に用言を修飾する → **副詞**
        - 常に体言を修飾する → **連体詞**
      - 接続語になる → **接続詞**
      - 独立語になる → **感動詞**
  - **付属語**
    - 活用する → **助動詞**
    - 活用しない → **助詞**

(1) 例に従って、次の文を斜線（しゃせん）（／）で文節に区切りなさい。また、含（ふく）まれる自立語を□で囲み、付属語に――線を引きなさい。

（例）　花が／咲きました。

私は昨日、文法を勉強しました。

(2) 次の各文の――線部の文節同士の関係を、それぞれ**ア**～**エ**から選びなさい。ただし同じ記号を何度使ってもよい。

① 白い　鳥が　空を　飛んだ。（　　）

② メッセージが　書いて　ある。（　　）

③ この　食べ物は　安くて　おいしい。（　　）

④ あの　赤い　花は　ツバキです。（　　）

⑤ 言葉の　誤用は　めずらしく　ない。（　　）

⑥ シカや　キツネが　生息する。（　　）

⑦ 今朝　みんなと　校庭で　走った。（　　）

⑧ 彼（かれ）も　この　中学校の　生徒です。（　　）

ア　主・述の関係　　**イ**　修飾・被修飾の関係

ウ　並立の関係　　**エ**　補助の関係

(3) 次の各組の単語の品詞を、それぞれ**ア**～**エ**から選びなさい。

① 花・これ・いくつ（　　）

② 歩く・見る・着る（　　）

③ 赤い・丸い・新しい（　　）

④ 静かだ・きれいです（　　）

ア　動詞　　**イ**　形容詞　　**ウ**　形容動詞　　**エ**　名詞

(4) 次の各組の単語の品詞を、それぞれ**ア**～**エ**から選びなさい。

① この・大きな・あらゆる（　　）

② ゆっくり・とても・もし（　　）

③ だから・しかし・そして（　　）

④ ああ・ねえ・おはよう・はい（　　）

ア　副詞　　**イ**　連体詞　　**ウ**　接続詞　　**エ**　感動詞

活用

文中での言葉の組み合わせに応じて単語の形が変化することを**活用**という。**動詞・形容詞・形容動詞**と**助動詞**が活用する。

（例）　話す＋た　→　話した
　　　明るい＋た　→　明るかった
　　　静かだ＋た　→　静かだった
　　　走ります＋た　→　走りました

●動詞の活用

基本形	語幹（続き方）	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
		―ない ―う（よう）	―ます ―た（だ） ―て（で）	―。 言い切る。	―とき ―こと ―ので	―ば	―。 命令して言い切る。
話す	はな	さ そ	し	す	す	せ	せ

動詞の活用の仕方は５種類に分けられる。

①**五段活用**……活用語尾（ごび）が五段（ア・イ・ウ・エ・オ）にわたって変化する。

②**上一段活用**…活用語尾がイ段を中心に変化する。

③**下一段活用**…活用語尾がエ段を中心に変化する。

④**カ行変格活用**…「来る」のみの特殊（とくしゅ）な活用。

⑤**サ行変格活用**…「する」や「〜する」の形の複合語の特殊な活用。

●形容詞の活用

基本形	語幹（続き方）	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
		―う	―た ―ない ―なる	―。 言い切る。	―とき ―こと ―ので	―ば	―。 命令して言い切る。
明るい	あかる	かろ	かっ く （う）	い	い	けれ	○

●形容動詞の活用

基本形	語幹（続き方）	未然形	連用形	終止形	連体形	仮定形	命令形
		―う	―た ―ない ―なる	―。 言い切る。	―とき ―こと ―ので	―ば	―。 命令して言い切る。
静かだ	しずか	だろ	だっ で に	だ	な	なら	○
静かです	しずか	でしょ	でし	です	（です）	○	○

確認テスト

(1) 次の①〜⑥の――線部の動詞の活用形の種類を、それぞれ**ア**〜**カ**から選びなさい。

①文章を書く人。〔　　〕
②作文を書く。〔　　〕
③手紙を書いた。〔　　〕
④何も書かない。〔　　〕
⑤書けば覚える。〔　　〕
⑥答えを書け。〔　　〕

ア　未然形　**イ**　連用形　**ウ**　終止形
エ　連体形　**オ**　仮定形　**カ**　命令形

(2) 次の①〜⑤の動詞の活用の種類を、それぞれ**ア**〜**オ**から選びなさい。

①　歩く〔　　〕
②　運動する〔　　〕
③　食べる〔　　〕
④　起きる〔　　〕
⑤　来る〔　　〕

ア　五段活用　**イ**　上一段活用　**ウ**　下一段活用
エ　カ行変格活用　**オ**　サ行変格活用

(3) 次の①〜⑥の――線部の形容詞の活用形の種類を、それぞれ**ア**〜**オ**から選びなさい。ただし同じ記号を何度使ってもよい。

①外は暖かい。〔　　〕
②今日は暖かかった。〔　　〕
③暖かくなる。〔　　〕
④暖かければ出かける。〔　　〕
⑤暖かい気候。〔　　〕
⑥もう暖かかろう。〔　　〕

ア　未然形　**イ**　連用形　**ウ**　終止形
エ　連体形　**オ**　仮定形

(4) 次の①〜⑥の――線部の形容動詞の活用形の種類を、それぞれ**ア**〜**オ**から選びなさい。ただし同じ記号を何度使ってもよい。

①簡単な問題。〔　　〕
②簡単になる。〔　　〕
③簡単だった。〔　　〕
④テストが簡単だ。〔　　〕
⑤簡単だろう。〔　　〕
⑥簡単ならば解ける。〔　　〕

ア　未然形　**イ**　連用形　**ウ**　終止形
エ　連体形　**オ**　仮定形

文法への扉2 「ない」の違いがわからない？（文法のまとめ）(3)

品詞・用法の識別

●「ない」

・**形容詞「ない」**…助動詞「ぬ（ん）」に言い換えられない。

（例）リンゴが　ない。（形容詞）→「リンゴがぬ」×

赤く　ない。（補助形容詞）→「赤くぬ」×

※「～て（で）ない」や「形容詞（形容動詞）＋ない」の形なら補助形容詞。

・**助動詞「ない」**…助動詞「ぬ（ん）」に言い換えられる。

（例）私は　行かない。→「行かぬ」○

※「いない」「しない」の「ない」も助動詞である。

※直前の単語が動詞であることでも見分けられる。

・**形容詞の一部**

（例）部屋が　きたない。※「きたない」で一つの形容詞。

●「……だ」

・**形容動詞の終止形**…連体形「～な」の形にできる。

（例）ここは　静かだ。→「静かな」○

※副詞「とても」で直接修飾できる。「とても　静かだ」○

・**名詞＋断定の助動詞「だ」**…「～な」の形にできない。

（例）彼は　中学生だ。→「中学生な」×

※副詞「とても」で直接修飾できない。「とても　中学生だ」×

・**動詞＋過去（完了・存続）の助動詞「だ」**（例）本を　読んだ。

・**助動詞「そうだ」「ようだ」**（例）雨が　降りそうだ。

●「……な」

・**形容動詞の連体形**…終止形「～だ」の形にできる。

（例）静かな　湖。→「静かだ」○

・**連体詞**…「～だ」の形にできない。

（例）大きな　湖。→「大きだ」×

・**助動詞「そうだ」「ようだ」**

（例）海のような　湖。※「ような」で一つの助動詞。

●「……に」

・**形容動詞の連用形**…連体形「～な」の形にできる。

（例）静かに　なる。→「静かな」○

・**名詞＋格助詞「に」**…「～な」の形にできない。

（例）教室に　いる。→「教室な」×

・**副詞**

（例）すぐに　さらに　※「すぐに」「さらに」で一つの副詞。

・**助動詞「そうだ」「ようだ」**

（例）雨が　降りそうに　なる。※「そうに」で一つの助動詞。

確認テスト

(1) 次の中から、——線部が助動詞であるものを三つ選びなさい。

ア 答えがわからない。
イ テキストがない。
ウ 選択肢（せんたくし）は多くない。
エ 自動車が動かない。
オ 理由を説明しない。
カ 服装がだらしない。

［　・　・　］

(2) 次の——線部は何か。それぞれ**ア**～**エ**から選びなさい。

① 火が消えそうだ。［　］
② 彼女（かのじょ）は元気だ。［　］
③ 公園で遊んだ。［　］
④ これが答えだ。［　］

ア 形容動詞の一部
イ 断定の助動詞
ウ 過去の助動詞
エ 様態の助動詞の一部

(3) 次の——線部は何か。それぞれ**ア**～**ウ**から選びなさい。

① 郊外（こうがい）ののどかな村。［　］
② 綿菓子（わたがし）のような雲。［　］
③ とてもおかしな話。［　］

ア 形容動詞の一部
イ 連体詞の一部
ウ 助動詞の一部

(4) 次の——線部は何か。それぞれ**ア**～**エ**から選びなさい。

① 庭にバラの花が咲（さ）いた。［　］
② まるで雪のように白い。［　］
③ 雨が急に降り出した。［　］
④ 帰ってすぐに出かける。［　］

ア 形容動詞の一部
イ 格助詞
ウ 副詞の一部
エ 助動詞の一部

「ない」の違いがわからない？（文法のまとめ）(4)

品詞・用法の識別

●「……らしい」

・推定の助動詞…「どうやら～」を補える。

（例）彼は先生の子どもらしい。

・形容詞の一部（接尾語）…「いかにも～」を補える。

（例）彼は子どもらしい性格だ。

※「子どもらしい」という形容詞の一部。

●助詞「の」

・連体修飾語を表す格助詞…前後が名詞である。

（例）私の本。

・主語を表す格助詞…「が」に言い換えられる。

（例）雪の降る日。→雪が降る日。

・体言の代用として使われる格助詞

…「～のもの・こと」に言い換えられる。

（例）これは私のだ。→これは私のものだ。

・終助詞

（例）いつ終わるの。

●助詞「が」

・格助詞……主に体言に付く。

（例）鳥が飛ぶ。（主語）

・接続助詞…主に用言や助動詞に付く。

（例）春になったが、まだ寒い。（逆接）

※「しかし」に言い換えられる。

●助詞「から」

・格助詞……主に体言に付く。

（例）学校から帰る。（起点）小麦から作る。（原料）

疲れから体調をくずす。（原因・理由）

・接続助詞…主に用言や助動詞に付く。

（例）暑いから休む。（原因・理由）

※「だから」に言い換えられる。

●助動詞「れる・られる」

・受け身…「～に…される」と言い換えられる。

（例）名前を呼ばれる。

・可能……「～することができる」と言い換えられる。

（例）早く起きられる。

・尊敬……接続する動詞が、尊敬の対象となる人物の動作である。

（例）先生が話される。

・自発……「自然と」を補える。前に心情を表す語がある。

（例）彼のことが案じられる。

●助動詞「そうだ」

・様態・推定…動詞の連用形や形容詞・形容動詞の語幹に付く。

（例）雪が降りそうだ。

・伝聞………用言の終止形に付く。

（例）雪が降るそうだ。

確認テスト

(1) 次の――線部は何か。それぞれ選びなさい。

① 次の発表者は彼らしい。

② 彼らしい発表だった。

ア 推定の助動詞　**イ** 形容詞の一部

(2) 次の――線部の助詞の働きを、それぞれ**ア**～**ウ**から選びなさい。

① 桜の咲(さ)く季節が来た。

② これは誰(だれ)のですか。

③ 先生の本を借りる。

ア 連体修飾語を表す。　**イ** 主語を表す。

ウ 「～もの・こと」という意味を表す。

(3) 次の――線部が、格助詞なら**ア**、接続助詞なら**イ**で、それぞれ答えなさい。

① 庭に美しい花が咲いた。

② 急いだが間に合わなかった。

(4) 次の中から、――線部が接続助詞であるものを選びなさい。

ア 終わったから帰ろう。　**イ** 教室から出てきた。

ウ 姉からもらった本。　**エ** 古紙からつくられた製品。

(5) 次の――線部の意味を、それぞれ**ア**～**エ**から選びなさい。

① 昔のことがしのばれた。

② 先生から声をかけられた。

③ 私はぐっすり寝(ね)られた。

④ 家にお客様が来られた。

ア 受け身　**イ** 可能　**ウ** 尊敬　**エ** 自発

(6) 次の――線部の意味をそれぞれ選びなさい。

① 外は風が強そうだ。

② 外は風が強いそうだ。

ア 様態・推定　**イ** 伝聞

初恋

島崎 藤村

①まだあげ初めし前髪の
林檎のもとに見えしとき
前にさしたる花櫛の
花ある君と思ひけり

やさしく白き手をのべて
林檎をわれにあたへしは
薄紅の秋の実に
人こひ初めしはじめなり

②わがこころなきためいきの
その髪の毛にかかるとき
③たのしき恋の盃を
君が情に酌みしかな

④林檎畑の樹の下に
おのづからなる細道は
誰が踏みそめしかたみぞと
問ひたまふこそこひしけれ

文語定型詩と口語自由詩

昔の書き言葉を用いて表現された詩を**文語詩**、現代の話し言葉を用いて表現された詩を**口語詩**という。また、音数に一定のきまりがある詩を**定型詩**、きまった音数などの規則にしばられない詩を**自由詩**という。

江戸時代までの日本では、詩はおもに漢詩を指していたが、明治時代に西洋の詩を翻訳する中で**文語定型詩**が生まれた。さらに明治時代末期頃には、話し言葉を用いて自由な音数で表現する**口語自由詩**が広まるようになった。

確認テスト

詩を読んで、問いに答えなさい。

(1) 詩を、使われている言葉や形式、内容から分類したときに、「初恋」に当てはまるものを次から二つ選びなさい。

ア 文語定型詩　イ 口語自由詩　ウ 叙情詩　エ 叙景詩　オ 叙事詩

[　　・　　]

(2) 「初恋」で、初めて恋心を抱いたことがうたわれているのは第何連か。漢数字で答えなさい。

第□連

(3) ――線①「まだあげ初めし前髪」の意味を選びなさい。

ア まだ結い上げたばかりの前髪
イ まだ結い上げたことのない前髪
ウ まだ結い上げたことしかない前髪

[　　]

(4) ――線②「こころなきためいき」の意味を選びなさい。

ア 思いやりがなく、無愛想なためいき
イ 本心ではない、表面的なためいき
ウ 思わず、無意識についたためいき

[　　]

(5) ――線③「たのしき恋の盃を／君が情に酌みしかな」に用いられている表現技法として、適当なものを選びなさい。

ア 体言止め　イ 倒置　ウ 対句　エ 比喩

[　　]

(6) ――線④「おのづからなる細道」とはどのような道か。適当なものを選びなさい。

ア 二人が樹の下で見つけた、自然のままに草で覆われている道。
イ 二人が何度も樹の下に行き来するうちに自然にできた道。
ウ 二人が林檎畠を訪れる以前からあった、昔のままの道。

[　　]

和歌の世界

和歌の世界

和歌は日本古来の定型の歌で、日本では古くからさまざまな人の詠んだ和歌を集めた歌集が作られてきた。代表的な歌集には『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』がある。

●万葉集

成立　**奈良時代**の末頃までに成立

歌風　素朴、力強い

現存する日本最古の歌集で、二十巻、約四千五百首の歌を収める。長い期間にさまざまな人によって編纂されており、大伴家持によっておおむね現在の形にまとめられたとされる。代表的な歌人は、額田王、柿本人麻呂、山部赤人、山上憶良、大伴家持など。

天皇、貴族のほか、兵士や農民といった民衆の歌も収められている。日本語の音を漢字で表す**万葉仮名**が用いられている。

（例）波都波流（初春）

年	時代	作品
	奈良	『万葉集』この頃までに成立
800	平安	
900		『竹取物語』 『古今和歌集』
1000		『枕草子』 『源氏物語』
1100		
1200	鎌倉	『新古今和歌集』

●古今和歌集

成立　**平安時代**初期

撰者　紀友則・**紀貫之**・凡河内躬恒・壬生忠岑

歌風　技巧的、理知的で、繊細、優美

天皇や上皇の命によって作られた歌集を勅撰和歌集といい、古今和歌集は、醍醐天皇の勅命で作られた、**最初の勅撰和歌集**である。二十巻、約千百首の歌を収める。代表的な歌人は、在原業平、小野小町、紀貫之など。

仮名で書かれた序文「**仮名序**」、漢文で書かれた「真名序」が収められている。古今和歌集の「仮名序」は紀貫之によって書かれたとされ、和歌の本質や※六歌仙への評、古今和歌集の編集の経緯などが記されている。

●新古今和歌集

成立　**鎌倉時代**初期

撰者　源通具・藤原有家・**藤原定家**・藤原家隆・藤原雅経・寂蓮法師

歌風　自然美や感情が、象徴的・幻想的に表現されている。体言止めなどの技巧が多用され、余情にあふれる。

後鳥羽上皇の命によって作られた、八番目の勅撰和歌集。二十巻、約千九百八十首の歌を収める。代表的な歌人は、西行法師・式子内親王など。

※六歌仙…僧正遍昭、在原業平、文屋康秀、喜撰法師、小野小町、大伴（大友）黒主。

確認テスト

(1) 次の①～③の歌集が成立したとされる時代をそれぞれ選びなさい。

① 古今和歌集 〔　　〕
② 新古今和歌集 〔　　〕
③ 万葉集 〔　　〕

ア 奈良時代　**イ** 平安時代　**ウ** 鎌倉時代

(2) 次の①・②の歌集の撰者として適当な人物をそれぞれ選びなさい。

① 古今和歌集 〔　　〕
② 新古今和歌集 〔　　〕

ア 大伴家持　**イ** 紀貫之　**ウ** 藤原定家

(3) 次の中から最初の勅撰和歌集とされるものを選びなさい。

ア 古今和歌集　**イ** 新古今和歌集　**ウ** 万葉集 〔　　〕

(4) 次の説明に当てはまる歌集を選びなさい。

幅広(はば)い階層の人々の歌が収められており、素朴で力強い歌風である。日本語の音は漢字を用いて表されている。

ア 古今和歌集　**イ** 新古今和歌集　**ウ** 万葉集 〔　　〕

音読を楽しむ　古今和歌集　仮名序

やまとうたは、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。
やまと歌（和歌）は、人の心を種として、さまざまな言の葉（言葉）となったものである。

世の中にある人、ことわざ繁きものなれば、
この世の中に生きる人々は、関わりのある出来事が多いものだから、

心に思ふことを、見るもの聞くものにつけて、言ひ出せるなり。
託して、言い表すのである。

花に鳴く鶯、水にすむ蛙の声を聞けば、
※河鹿

生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける。
どれが歌を詠まないということがあろうか。

力をも入れずして天地を動かし、

目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、
精霊たちをもしみじみと感じさせ、

男女の仲をも和らげ、
親しくさせ、

猛き武士の心をも慰むるは、歌なり。
勇猛な　なごませるのは、

※河鹿…カジカガエル。清流に生息し、夏から秋にかけて澄んだ声で鳴く。

仮名序

『古今和歌集』には、仮名で書かれた序文「仮名序」が収められており、和歌の本質や六歌仙への評、古今和歌集の編集の経緯などが記されている。

確認テスト

(1) 古今和歌集の「仮名序」を書いたとされる人物を答えなさい。

［　　　　］

(2) 次の文の解答欄に当てはまる言葉を、本文中から書きぬきなさい。

古今和歌集の「仮名序」では、和歌というものは、人の心を［　　］として、そこから生え育った［　　］のようなものであると述べられている。

(3) ――線部「いづれか歌を詠まざりける」が表す内容として適当なものを選びなさい。

ア いつか歌を詠むことだろう
イ いつしか歌を詠まなくなった
ウ どれもみな歌を詠むのだ
エ どれも歌を詠むことはない
オ どれでも歌に詠むことができる

［　　］

(4) 古今和歌集の説明として適当なものを選びなさい。

ア 漢文で記された「仮名序」が収められている。
イ 最初の勅撰和歌集で、平安時代に成立した。
ウ 藤原定家が代表的な撰者である。

［　　］

君待つと――万葉・古今・新古今 (1)

和歌の基礎知識

和歌は五音と七音を基調としており、代表的な形式に短歌と長歌がある。

・**短歌**…五・七・五・七・七の三十一音の歌。
・**長歌**…五・七を三回以上繰り返し、最後を多くは七・七で結ぶ歌。
　長歌の後には**反歌**とよばれる歌が添えられ、長歌の意味を要約したり補足したりする。

音数が五音・七音の定型となっていないものもあり、音数が定型より多いものを**字余り**、定型より少ないものを**字足らず**という。

●句切れ

一首の中の意味上の切れ目を句切れという。短歌の句切れには、**初句切れ・二句切れ・三句切れ・四句切れ・句切れなし**、などがある。

（例）五（初句）・七（二句）／五（三句）・七（四句）・七（結句）…二句切れ

句切れの位置によって、歌のリズムは異なる。
・五七調…二句切れ・四句切れ。万葉調。
・七五調…初句切れ・三句切れ。古今調・新古今調。

和歌の表現技法

●枕詞

特定の語を導くために、その直前に置かれる言葉。主に五音で、直後にくる言葉が決まっている。通常は訳さない。後の語を修飾したり、リズムを整えたりする。

・おもな枕詞
　しろたへの↓衣・袖・雲 など　　**ひさかたの**↓光・日・空 など
　たらちねの↓母 など　　**ちはやぶる**↓神 など

●序詞

ある語句を導くために、その前で述べる言葉。歌ごとに創作され、音数や直後にくる言葉に決まりはない。枕詞より長いものが多い。省略せずに訳す。

（例）多摩川にさらす手作りさらさらに何そこの児のここだ愛しき
※「多摩川にさらす手作り」が「さらさらに」を導く。

●掛詞

一つの語に二つ以上の同音の言葉の意味を重ねたもの。

（例）「ながめ」＝「眺め・長雨」

確認テスト

(1) 現代語訳を参考に、次の歌の句切れを漢字で答えなさい。

見わたせば花も紅葉(もみぢ)もなかりけり浦(うら)の苫屋(とまや)の秋の夕暮(ゆふぐれ)

見渡すと、花も紅葉もないことだ。海辺の苫屋の辺りの秋の夕暮れよ。

□ 句切れ

(2) 次の①〜③の枕詞について、後に続く言葉として適当なものをそれぞれ選びなさい。

① たらちねの　② ちはやぶる　③ ひさかたの

ア 神　**イ** 衣　**ウ** 母　**エ** 光　**オ** 山

①〔　　〕②〔　　〕③〔　　〕

(3) ①〜③の表現技法の説明に当てはまるものをそれぞれ選びなさい。

① 一つの語に二つ以上の同音の言葉の意味を重ねる。
② ある語句を導く言葉で、音数や直後にくる言葉に決まりがない。
③ 特定の語を導く言葉で、主に音数が五音である。

ア 縁語(えんご)　**イ** 掛詞　**ウ** 序詞　**エ** 枕詞

①〔　　〕②〔　　〕③〔　　〕

君待つと――万葉・古今・新古今 (2)

万葉集

A

春過ぎて夏来るらし※白たへ（エ）の衣干したり天の※香具山

持統（ジ）天皇

春が過ぎて、夏が来たらしい。真っ白な衣が干してあるよ。天の香具山に。

B

東（ン）の野に炎（イ）の立つ見えてかへ（エ）り見すれば月傾きぬ

柿本人麻呂

東の野にあけぼのの光がさすのが見えて、振り返って見ると月は西に傾いている。

C

君待つと我が恋ひ（イ）居（オ）れば我が屋戸のすだれ動かし秋の風吹く

額田王（オ）

あなたを待って私が恋しく思っていると、我が家の戸のすだれを動かして秋の風が吹く。

※白たへ…コウゾなどの木の皮から作られる白い布。
香具山…奈良県橿原市にある山。畝傍山・耳成山と合わせて大和三山という。

D

天地の　分かれし時ゆ　神（ン）さびて　高く貴（トウ）き
天と地が　神々しく
※駿河なる　富士の高嶺を　天の原　振り放け見れば
駿河にある　大空に　振り仰いで遠く見やると、
渡る日の　影も隠らひ（イ）　照る月の　光も見えず
（空を）渡る太陽の姿も隠れ、
白雲も　い行きはばかり　時じくぞ　雪は降りける
（山にはばまれて流れが）行きとどこおり、時季にかかわらずに雪は降っている。
語り継ぎ　言ひ継ぎ行かむ（ン）　富士の高嶺は
言い継いでいこう

山部赤人

E

田子の浦ゆうち出でて見れば真白にそ富士の高嶺に雪は降りける

田子の浦を通って出て（遠くに）見ると、なんと真っ白に富士の高嶺に雪が降っているよ。

※駿河…現在の静岡県中央部。

確認テスト 和歌を読んで、問いに答えなさい。

(1) **A**の歌は句切れが二か所ある。それぞれ漢字で答えなさい。

□句切れ・□句切れ

(2) **B**の歌でうたわれている光景の時間帯を選びなさい。

ア 明け方　**イ** 真昼　**ウ** 夕方　**エ** 夜中

〔　〕

(3) **C**の歌にうたわれている心情を選びなさい。

ア 恋しい人を待っているときの切ない思い。

イ 恋しい人が待っているのではないかとときめく思い。

ウ 恋しい人とともに人を待つときの退屈(たいくつ)な思い。

〔　〕

(4) **D**の歌について、――線部の意味を選びなさい。

ア 分かれた時に　**イ** 分かれた時から　**ウ** 分かれた時まで

〔　〕

(5) **E**の歌は、**D**の長歌に添(そ)えられたものである。このような歌を何というか。適当なものを選びなさい。

ア 東歌(あずまうた)　**イ** 旋頭歌(せどうか)　**ウ** 反歌(はんか)

〔　〕

君待つと――万葉・古今・新古今 (3)

万葉集

F
憶良らは今は罷らむ子泣くらむ（ン）それその母も我を待つらむぞ（ン）
山上憶良（エ）
私、憶良めはもう退出いたしましょう。子が泣いているでしょう。それ、その母も私を待っているでしょう。

G
※多摩川にさらす手作りさらさらに何そこの児のここだ愛しき
東歌（ズ）
多摩川にさらさらとさらす手織りの布のように、さらにさらに、どうしてこの娘がこんなにもいとしいのだろうか。

H
父母が頭かき撫で幸くあれて言ひし（イ）言葉ぜ忘れかねつる
防人歌
父母が（私の）頭をなで、無事であれと言った言葉が忘れられない。

I
新しき年の初めの初春の今日降る雪のいやしけ吉事
大伴家持（オ）
新しい年の初めの初春（正月）の今日降る雪のように、ますます重なれ、よいことよ。

※多摩川…山梨県東部から東京都・神奈川県を流れ、東京湾に注ぐ川。

東歌と防人歌

東国地方の歌を**東歌**という。東歌には民謡的な歌も多く、言葉には東国の方言がみられる。
また、防人やその家族の歌を**防人歌**という。防人は、古代、九州北部などに派遣された兵士で、多くは東国から集められた。「父母が……」の歌は、駿河国の防人・丈部稲麻呂によるもの。

確認テスト 和歌を読んで、問いに答えなさい。

(1) **F**の歌について、「罷らむ」の意味を選びなさい。

ア 黙(だま)っていましょう
イ 退出いたしましょう
ウ お伺(うかが)いしましょう

〔　　〕

(2) **G**の歌に含(ふく)まれる序詞(じょことば)に〜〜線を引き、序詞に導かれる言葉に——線を引きなさい。

多摩川にさらす手作りさらさらに何そこの児のここだ愛しき

(3) **H**の歌から、「父母」が言った言葉を書きぬきなさい。

〔　　〕

(4) **I**の歌から、雪のように重なってほしいとうたわれているものを書きぬきなさい。

〔　　〕

(5) **F**〜**I**の中から、句切れがあるものを選び記号で答えなさい。

〔　　〕

君待つと——万葉・古今・新古今 (4)

古今(こきん)和歌集

J ※人はいさ心も知らずふるさとは花ぞ昔の香(か)ににほ(オ)ひ(イ)ける

紀貫之(きのつらゆき)　（春歌上）

人は、さあ、心がどう変わってしまったのかわかりません。（しかし、）昔なじみのこの土地は、梅の花が昔のままに香っていますよ。

K ちはやぶる神世(かみよ)も聞かず龍田(たつた)河韓紅(からくれなゐ)(イ)に水くくるとは

在原業平(ありはら(ワ)のなりひら)　（秋歌下）

（不思議なことがあったという）神代の昔でも聞いたことがない。龍田川が（流れる紅葉で）韓紅色に水をくくり染めにするとは。

L 思ひ(イ)つつ寝(ぬ)ればや人の見えつらむ(ン)夢と知りせば覚めざらましを

小野小町(を(オ)ののこまち)　（恋歌二）

恋しく思いながら寝たので、あの人が（夢に）現れたのだろうか。夢とわかっていたならば、目覚めないでいただろうに。

※人はいさ〜…かつて奈良の長谷寺に参詣するたびに宿を借りていた人の家を、久しぶりで訪れたところ、家の主人から「このように昔のままに宿はありますよ」と言われ、そこに立っていた梅の花を折り取って詠んだ歌。「人」は家の主人を指す。

新古今和歌集

M 道の辺に清水(しみづ)(ズ)流るる柳(やなぎ)かげしばしとてこそ立ちどまりつれ

西行法師(さいぎやう)(ギョウ)　（夏歌）

道のほとりに清水が流れている柳の木かげよ。ほんのしばらく（休もう）と思って、立ちどまったのであったが（涼しさに思わず長居してしまった）。

N 見わたせば花も紅葉(もみぢ)(ジ)もなかりけり浦(うら)の苫屋(とまや)の秋の夕暮(ゆふぐれ)(ウ)

藤原定家(ふぢ(ジ)は(ワ)らのさだいへ(エ))　（秋歌上）

見渡すと、花も紅葉もないことだ。海辺の苫屋の辺りの秋の夕暮れよ。

O 玉の緒(を)(オ)よ絶えなば絶えねながらへ(エ)ば忍(しの)ぶることの弱りもぞする

式子(しよくし)(ショク)内親王　（恋歌 一）

（私の）命よ。絶えてしまうものなら絶えてしまえ。生きながらえていると、秘める力が弱まって（恋心を人に知られて）しまうかもしれないから。

確認テスト　和歌を読んで、問いに答えなさい。

(1) J～Oの歌の中で、三句切れのものを三つ選び、記号で答えなさい。
［　・　・　］

(2) Jの歌で、昔と変わらないものとしてうたわれているものを選びなさい。
ア 人の心　イ なじみの土地の人々
ウ 桜の花の姿　エ 梅の花の香り
［　］

(3) Kの歌に含(ふく)まれる枕詞(まくらことば)を書きぬきなさい。
［　］

(4) Lの歌について、「夢と知りせば覚めざらましを」の意味を選びなさい。
ア 夢だと知っていたから、目覚めようとしたのに。
イ 夢だと知っていたならば、目覚めないでいただろうに。
ウ 夢だと知らせていれば、目覚めてくれただろうに。
［　］

(5) Mの歌の「しばしとてこそ立ちどまりつれ」の表す意味として適当なものを選びなさい。
ア 少しの間と思って立ちどまったが、思わず長い時間を過ごしてしまった。
イ しばしば立ちどまってしまったために、長い時間がかかってしまった。
ウ ゆっくり休もうと思って立ちどまり、ずいぶん長居をしてしまった。
［　］

(6) Nの歌について、正しいものを選びなさい。
ア 見渡すかぎりに花と紅葉が広がる光景に、風情(ふぜい)を感じている。
イ 花も紅葉もない寂(さび)しげな光景に、しみじみと趣(おもむき)を感じている。
ウ 秋なので花はないが、紅葉の美しい光景に季節を感じている。
［　］

(7) Oの歌にうたわれている心情を選びなさい。
ア 思いがけないことが起こったことへのとまどい。
イ 何気ないことから感じた、しみじみとした感動。
ウ 人に知られないようにしている、激しい恋心。
［　］

夏草 ――「おくのほそ道」から(1)

松尾 芭蕉

『おくのほそ道』の基礎知識

『おくのほそ道』は**江戸時代**前期の**松尾芭蕉**による紀行文。芭蕉（本名・宗房）は伊賀国出身の俳人で、俳諧の芸術性を高め、蕉風俳諧を創始した。

『おくのほそ道』には、芭蕉が四十六歳の元禄二（一六八九）年、門人・河合曾良とともに江戸を出発し、奥羽・北陸を経て美濃国大垣に至った旅について記されている。

A
閑かさや岩にしみ入る蟬の声
なんという静けさだろう。ただ岩にしみ入るように蟬の声だけが聞こえている。

B
五月雨をあつめて早し最上川
折からの梅雨の雨を集めて水がみなぎり、いちだんと流れが速い。この最上川よ。

C
荒海や佐渡によこたふ天河
日本海の荒海よ。海のかなたにある佐渡島にかけて天の川が横たわっている。

D
蛤のふたみに別れ行く秋ぞ
蛤が蓋と身にわかれるように、集ってくれた親しい人々と別れ、私は伊勢の二見が浦に行く、過ぎ行く秋よ。

俳諧

複数の人が長句（五七五）と短句（七七）を交互に詠み継いでいく文芸を**連歌**という。連歌は室町時代に流行し、連歌の中でも滑稽さを求めたものは、俳諧の連歌、略して**俳諧**とよばれた。また、連歌の最初の一句を**発句**という。発句には最初の句としてその時々の季節を表す語が求められた。

江戸時代になると、松尾芭蕉のほか、与謝蕪村、小林一茶といった俳人が現れ、発句は独立して鑑賞されるようになった。その後、明治時代の正岡子規らによって、近代俳句が確立した。

確認テスト

(1) 次の文の（　）に当てはまる言葉をそれぞれ選びなさい。

『おくのほそ道』は（①）の前期に（②）によって書かれた紀行文である。

ア 室町時代　**イ** 安土桃山時代　**ウ** 江戸時代
エ 小林一茶　**オ** 松尾芭蕉　**カ** 与謝蕪村

①［　　］ ②［　　］

(2) **A**～**D**の句の季語が表している季節をそれぞれ答えなさい。

A［　　］ **B**［　　］ **C**［　　］ **D**［　　］

(3) **A**と**C**の句は、含(ふく)まれる切れ字と、句切れが共通している。共通して含まれる切れ字を書きぬき、句切れの種類を記号で答えなさい。

切れ字［　　］ 句切れ［　　］

ア 初句切れ　**イ** 二句切れ　**ウ** 句切れなし

(4) 次の①・②の句に含まれる季語をそれぞれ書きぬき、季語が表す季節を答えなさい。

① 野を横に馬牽(ひき)むけよほととぎす（那須(なす)）
② むざむやな甲(かぶと)の下のきりぎりす（小松）

① 季語［　　］ 季節［　　］
② 季語［　　］ 季節［　　］

夏草――「おくのほそ道」から(2)

松尾芭蕉

『おくのほそ道』冒頭

※月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。
月日は永遠の旅人であって、おとずれては過ぎ去る年もまた旅人である。

舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、
舟の上で一生を送る者（船頭）や馬のくつわを取って老年をむかえる者（馬子）は、

日々旅にして旅を栖とす。※古人も多く旅に死せるあり。
日々が旅であって　昔の人にも、多く、旅の中で死んだ人がいる。

予もいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて、
私もいつの頃からか、ちぎれ雲が風に誘われるように、

①漂泊の思ひやまず、※海浜にさすらへて、
漂泊の思いがやまず、（近年は）海辺をさすらって、

去年の秋、※江上の破屋に蜘蛛の古巣をはらひて、やや年も暮れ、
隅田川のほとりのあばらやに（もどり、）蜘蛛の古巣を払って、やがて年も暮れたが、

春立てる霞の空に、※白河の関越えむと、
新春（新年）となり霞が立ちこめる空のもとで、白河の関を越えたいと、

そぞろ神の物につきて心をくるはせ、
そぞろ神がとりついて心をそわそわさせ、

※道祖神の招きにあひて取るもの手につかず。
道祖神が招いているようで何も手につかない。

②股引の破れをつづり、笠の緒付け替へて、※三里に灸据ゆるより、
つくろい、　灸をすえると、

※松島の月まづ心にかかりて、
松島の月のことがまず気にかかって、

住める方は人に譲りて、※杉風が別墅に移るに、
今まで住んでいた庵は人に譲って、杉風の別荘に移ったが、

E 草の戸も住み替はる代ぞ雛の家
わびしかった草庵も、あるじが住み替わる時が来た。（これまでとは違って）雛人形をかざる華やかな家だよ。

※面八句を③庵の柱に懸け置く。
（という句を発句にした）面八句を（これまで住んでいた）庵の柱に掛けておいた。

※月日は～…李白の文章をふまえたもの。
古人…中国の李白・杜甫、日本の西行・宗祇など、人生の大半を旅に過ごした詩人・歌人を念頭におく。
海浜に～…一六八七年から翌年にかけて、芭蕉は鳴海（愛知県）、明石（兵庫県）などを旅した。
江上の破屋…江戸の深川（現在、東京都江東区西部）の隅田川のほとりにあった芭蕉庵のこと。江はここでは隅田川を指す。
白河の関…奥州への関所。現在の福島県にあった。　道祖神…道行く人を守る神。
三里…ひざがしらの下の外側のくぼんだ部分で、ここに灸をすえると足を丈夫にし、万病にきくという。
松島…現在の宮城県松島湾一帯。日本三景の一つ。
杉風が別墅…芭蕉の門人であった杉山杉風の別荘。
面八句…連歌・俳諧で、百韻（百句からなる連句）のときに、懐紙の一枚目の表に記す八句。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「漂泊の思ひ」とはどのような思いか。適当なものを選びなさい。

ア　あてのない旅に出たいという思い。
イ　ものごとの移り変わりをむなしく感じる思い。
ウ　新たな仕事に取り組もうとする思い。

〔　　　〕

(2) ——線②「股引の破れをつづり」とあるが、何のためにこのようなことをしているのか。適当なものを選びなさい。

ア　あばらやの掃除(そうじ)をするため。
イ　旅の支度(したく)をするため。
ウ　道祖神への供え物とするため。

〔　　　〕

(3) Eの句に含(ふく)まれる季語と、季語が表す季節を答えなさい。

季語〔　　　〕　季節〔　　　〕

(4) Eの句に含まれる切れ字を書きぬき、句切れの種類をア〜ウで答えなさい。

ア　初句切れ　イ　二句切れ　ウ　句切れなし

切れ字〔　　　〕　句切れ〔　　　〕

(5) ——線③「庵」が指す建物として適当でないものを選びなさい。

ア　江上の破屋　イ　住める方
ウ　杉風が別墅　エ　草の戸

〔　　　〕

夏草――「おくのほそ道」から(3)

松尾芭蕉

平泉

三代の栄耀一睡のうちにして、※大門の跡は一里こなたにあり。
奥州藤原氏三代の栄華ははかなく消え、一里ほども手前にある。
※秀衡が跡は田野になりて、※金鶏山のみ形を残す。
まづ※高館に登れば、※北上川、※南部より流るる大河なり。
北上川が見え、これは南部地方から流れる大河である。
衣川は※和泉が城を巡りて、高館の下にて大河に落ち入る。
和泉が城のまわりを流れて、高館の下で北上川に流れ込む。
※泰衡らが旧跡は、※衣が関を隔てて※南部口をさし固め、
衣が関を（前に）置いて南部口をさし固め、
夷を防ぐと見えたり。
蝦夷の侵入を防ぐためのもののようである。
さても義臣すぐつてこの城に籠もり、①功名一時の草むらとなる。
それにしても（義経が）忠義の臣をえりすぐってこの高館に籠もったが、
②「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」と、
と思い、
笠打ち敷きて時のうつるまで涙を落としはべりぬ。
笠を敷いて腰をおろし、いつまでも涙にくれていた。

F 夏草や兵どもが夢の跡
夏草よ。かつてこの地で功名を立てた兵たちも、今ではそれが夢のようにただ草むらが広がっている。

G 卯の花に※兼房見ゆる白毛かな　曾良
真っ白な卯の花に、兼房の白髪がしのばれることだ。

※大門の跡…奥州藤原氏の館である平泉館の南大門の跡。
秀衡が跡…秀衡の館である伽羅御所の跡。平泉館の中心部。
金鶏山…平泉館西方の小山。秀衡が築き、山頂に金の鶏を埋めたという言い伝えがある。
高館…源義経の館の跡。
北上川…岩手県北部から宮城県に向かって流れる川。平泉で衣川が合流する。
南部…南部地方。岩手県盛岡市を中心とした地方。　和泉が城…秀衡の三男である忠衡の館。
泰衡らが旧跡…泰衡ら奥州藤原氏一族の館を広く指す。泰衡は秀衡から伽羅御所を継いだ。
衣が関…高館の西方にあった関所。　南部口…平泉から南部地方への出入り口。
兼房…義経の物語に登場する老臣で、最後まで義経に付き従った。

奥州藤原氏

平安時代後期、東北地方に勢力をのばした豪族、藤原清衡とその子孫を、**奥州藤原氏**という。奥州藤原氏は**平泉**を中心にさかえ、秀衡の時代には挙兵前の**源義経**が身を寄せていた。壇の浦の戦いののち、義経は兄・頼朝と対立し、奥州藤原氏のもとに逃れた。しかし、秀衡の死後、頼朝の圧力に屈した泰衡によって義経は自害に追い込まれ、泰衡もまた頼朝に滅ぼされた。

・奥州藤原氏
藤原清衡―基衡―秀衡―泰衡

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア　秀衡の館や金鶏山は、形を残していた。
イ　北上川は、南部地方から平泉に流れる。
ウ　衣川は、和泉が城の下で北上川に合流する。

〔　　〕

(2) ——線①「功名一時の草むらとなる」の意味を選びなさい。

ア　戦いの功名も一時のことで、その跡はただ草むらとなっている。
イ　戦いの功名とは草むらのようなもので、無益なものである。
ウ　戦いの功名はここにある草むらのように、今でも残っている。

〔　　〕

(3) ——線②「国破れて山河あり」は、漢詩「春望（しゅんぼう）」を思い起こしたものである。「春望」の作者を答えなさい。

〔　　〕

(4) Fの句に含（ふく）まれる切れ字を書きぬき、句切れの種類をア〜ウで答えなさい。

ア　初句切れ　　イ　二句切れ　　ウ　句切れなし

切れ字〔　　〕　句切れ〔　　〕

(5) Gの句に含まれる季語と、季語が表す季節を答えなさい。

季語〔　　〕　季節〔　　〕

夏草――「おくのほそ道」から (4)

松尾芭蕉

平泉

かねて耳驚かしたる※二堂開帳す。経堂は※三将の像を残し、
以前から話に聞いて驚嘆していた二堂が開かれていた。経堂には三将の像があり、
光堂は三代の棺を納め、※三尊の仏を安置す。
※七宝散り失せて、玉の扉風に破れ、
（かつてかざられていた）七宝は散りうせて、宝玉をちりばめた扉も長年の風に傷み、
金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廃空虚の草むらとなるべきを、
金箔の柱も霜や雪で朽ちて、もう廃墟の草むらとなるはずのところを、
※四面新たに囲みて、甍を覆ひて風雨を凌ぎ、
（鞘堂で）四方を新しく囲んで、瓦の屋根を覆って風雨をしのぎ（このおかげで）、
しばらく千歳の記念とはなれり。
当分の間は千年の昔をしのぶことができる記念として残っているのである。

H 五月雨の降り残してや光堂
五月雨もここだけは降り残した（降らなかった）のだろうか。
光堂だけは今も昔の姿をとどめている。

※二堂…中尊寺の経蔵（経堂）と金色堂（光堂）の二堂。
三将…清衡・基衡・秀衡。三代も同じ。
三尊の仏…阿弥陀如来・観世音菩薩・勢至菩薩。
七宝…仏教における金・銀・瑠璃などの七種の宝。
四面～…鎌倉時代末期、光堂を保護するため、堂を覆う鞘堂が建てられ、以後補修、維持されている。

中尊寺

中尊寺は平泉にある奥州藤原氏ゆかりの寺院。境内には経蔵（経堂）・金色堂（光堂）などが建ち並ぶ。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 芭蕉(ばしょう)は以前から二堂のことを聞き知っていた。
イ 経堂には奥州藤原氏三代の棺が納められていた。
ウ 光堂は既になく、草むらとなってしまっていた。

〔　　〕

(2) ――線部「しばらく千歳の記念とはなれり」とあるが、なぜ光堂は残っているのか。適当なものを選びなさい。

ア 玉の扉によって、風が吹(ふ)きつけるのを防いでいたから。
イ 金箔(きんぱく)の柱があることで、霜(しも)や雪にも朽ちなかったから。
ウ 四方を囲み、瓦(かわら)で覆って風雨をしのいでいたから。
エ 平泉には雨や雪が降ることがなかったから。

〔　　〕

(3) **H**の句に含(ふく)まれる季語と、季語が表す季節を答えなさい。

季語〔　　〕　季節〔　　〕

(4) **H**の句に含まれる切れ字を書きぬき、句切れの種類を**ア**～**ウ**で答えなさい。

切れ字〔　　〕　句切れ〔　　〕

ア 初句切れ　**イ** 二句切れ　**ウ** 句切れなし

古典名作選 (1)

A

筒井筒（つつゐづつ）井筒にかけしまろがたけ過ぎにけらしな妹（いも）見ざるまに

井戸の枠と背比べをしていた私の背丈も、その高さを越してしまったようです。あなたを見ない間に。

「伊勢（いせ）物語」（筒井筒）

B

「雀（すずめ）の子を犬君（いぬき）が逃（に）がしつる。伏籠（ふせご）の中（うち）に籠（こ）めたりつるものを。」とて、いと口惜（を）しと思へり。

「雀の子を犬君（遊び相手の童女）が逃がしてしまったの。伏せた籠の中に入れておいたのに。」と言って、とても残念そうである。

「源氏物語」（若紫（わかむらさき））　紫式部（むらさきしきぶ）

C

心なき身にもあはれは知られけり鴫（しぎ）立つ沢（さは）の秋の夕暮（ゆふぐれ）

ものの趣を感じることのない（出家した）この身にも、しみじみとした趣が感じられる。鴫が飛び立つ沢の秋の夕暮れよ。

「新古今（しんこきん）和歌集」（秋歌上）　西行（さいぎょう）法師

D

花は盛（さか）りに、月は隈（くま）なきをのみ、見るものかは。

花は盛りのものだけを、月はかげりのないものだけを、見るものだろうか。いや、そうではない。

「徒然草（つれづれぐさ）」（第百三十七段）　兼好（けんこう）法師

E

是非（ぜひ）初心忘（わす）るべからず。

良いことも悪いことも、初めて体験したときのことを忘れてはならない。

「花鏡（かきょう）」　世阿弥（ぜあみ）

各句の出典

●伊勢物語
平安時代に成立した歌物語。作者は不明。本文は主人公が幼なじみの女性に求婚（きゅうこん）する場面。

●源氏物語
平安時代に成立した物語文学。本文は主人公の光源氏（ひかるげんじ）が、幼少期の紫の上を見かける場面。

●新古今和歌集
鎌倉（かまくら）時代に成立した勅撰（ちょくせん）和歌集。象徴（しょうちょう）による表現を用いた歌や余情にあふれる歌が多く収められている。

●徒然草
鎌倉時代末期に成立した随筆（ずいひつ）。無常観を基調として、自らの人生観、美意識がつづられている。

●花鏡
室町（むろまち）時代に成立した能楽書。世阿弥は能を大成した人物で、「花鏡」には能の芸道論がつづられている。

確認テスト

各句を読んで、問いに答えなさい。

(1) Aはどのような場面か。適当なものを選びなさい。

ア 幼い主人公と幼なじみが、井戸の枠と背比べをする場面。
イ 幼なじみの二人が成長し、恥ずかしがって会わなくなる場面。
ウ 主人公が、疎遠になっていた幼なじみの女性に求婚する場面。

〔　　〕

(2) Bについて、何を残念に思っているのか。適当なものを選びなさい。

ア 籠の中に入れておいた雀を、犬君が逃がしてしまったこと。
イ 逃がしたと思った雀を、犬君が籠の中に入れておいたこと。
ウ 犬君が籠に入れておいた雀を、自分が逃がしてしまったこと。

〔　　〕

(3) Cの歌の内容に合うものを選びなさい。

ア 出家した身なので、沢の夕暮れの景色の趣がわからなかった。
イ 出家した身にも、沢の夕暮れの景色の趣は感じられた。
ウ 出家した身には、沢の夕暮れの景色の趣は知られていない。

〔　　〕

(4) Dについて、「見るものかは」の意味を選びなさい。

ア 見るものなのである。
イ 見るものかもしれない。
ウ 見るものだろうか。いや、そうではない。
エ 見るものであるかはわからない。

〔　　〕

(5) Eの言葉の意味を選びなさい。

ア 良いことも悪いことも、初めて体験したときのことを忘れてはならない。
イ その時々で、初めて体験することの一つひとつを大切にすれば、忘れるはずがない。
ウ 年を重ねても初めて体験することがあるのだということは、忘れがちである。

〔　　〕

古典名作選（2）

F

大器は晩成す。

大きな器はすぐにはできあがらないように、すぐれた人物も大成するのには時間がかかる。

「老子徳経　下」

G

吾十有五にして学に志す。三十にして立つ。

私は十五歳にして学問を志した。三十歳にして思想の基礎が確立した。

四十にして惑はず。五十にして天命を知る。

四十歳にして迷うことがなくなった。五十歳にして天から与えられた自らの使命を自覚した。

「論語」（為政）

H

禍ひを転じて福と為す。

身にふりかかった災難をうまく活かして、かえって状況がよくなるようにする。

「戦国策」（燕一）

I

葡萄の美酒夜光の杯

葡萄の美酒を注いだ夜光の杯、

飲まんと欲すれば琵琶馬上に催す

飲もうとすると、琵琶の音が馬上から鳴り響く。

酔うて沙場に臥すとも君笑ふこと莫かれ

酔って砂漠に倒れ伏しても笑ってくれるな。

古来征戦幾人か回る

古来、戦場に行き、いったい何人が生きて帰っただろうか。

「涼州詞」　王翰

J

人事を尽くして天命を待つ。

人としてできる限りの事をして、結果は天の運に任せるのがよい。

「読史管見」　胡寅

名句の出典

●老子徳経

老子という人物によって書かれたとされる。本文は「大器晩成」という四字熟語になった。

●論語

中国の春秋時代の思想家・孔子とその弟子たちの言行録。本文は、年齢を表す語の元ともなった。

●戦国策

中国の戦国時代の策略を国別に収めた書。故事成語の元となったさまざまな話を収める。

●涼州詞

中国の唐代の詩人・王翰の詩。涼州は中国北西部の地名で、「涼州詞」は涼州に派遣された兵士をうたったもの。

●読史管見

中国の宋代の学者・胡寅の書。本文は日本でもことわざとして用いられている。

確認テスト 各句を読んで、問いに答えなさい。

(1) **F**の言葉の意味を選びなさい。

ア すぐれた人物は幼いころから学業を修めているということ。
イ すぐれた人物は時間をかけ徐々(じょじょ)に大成するということ。
ウ すぐれた人物は早くから才気があることがわかるということ。

［　　］

(2) **G**は年齢を表す言葉の由来となった。次の年齢を表す言葉をそれぞれ**ア**～**エ**から選びなさい。

十五歳(さい)［　　］　三十歳［　　］
四十歳［　　］　五十歳［　　］

ア 而立(じりつ)　**イ** 知命(ちめい)　**ウ** 不惑(ふわく)　**エ** 志学(しがく)

(3) **H**の言葉の意味を選びなさい。

ア 人生における幸と不幸とは予測することが難しい。
イ わざわいと幸福は表裏(ひょうり)一体で、ものの吉凶(きっきょう)はわからない。
ウ ふりかかった災難を活(い)かしてかえって状況(じょうきょう)を好転させる。

［　　］

(4) **I**について、「笑ふこと莫かれ」とあるが、これはなぜか。適当なものを選びなさい。

ア 古来、戦場に行って帰ったものは少なく、明日の命もわからない身だから。
イ 古来、戦場からは何人もの人が帰ってきており、しばらくすれば戻(もど)ってこられるだろうから。
ウ 古来、何人かの人が戦場から帰ってきており、自分も兵士が帰ってくるのを待っているから。

［　　］

(5) **J**の言葉の意味を選びなさい。

ア 人は何もせず、ものごとはただただ天の運を待つのがよい。
イ 何もやることがないときは、天命を待って行動するのがよい。
ウ できる限りのことをして、結果は天の意思に任せるのがよい。

［　　］

それでも、言葉を (1)

鷲田 清一

（1～5は教科書本文における形式段落番号を表します）

1 新聞で毎日、誰かの言葉の一節を紹介するコラムを担当するようになって、ずいぶんたつ。引用する一節を探して、日々、言葉の森をうろついていると、たまに言葉の貯金が増えてうれしくなることもあるが、たいていは乏しくなった米びつの底をさらうときのような心細い気持ちでいる。

2 そういう思いとは別に、このところ言葉を選ぶことそれ自体がしんどくなる日がある。戦争、感染症、災害、貧困、権勢の不正と、気の塞ぐような記事と同じ紙面に並んで掲載されることも増え、ふと頰が緩むような言葉、気を取り直せるような言葉を取り上げにくいということもある。だが、それ以上に、①言葉そのものの惨状にめげそうになっている。

3 言葉がまるでうぶ毛をなくしたかのように、むき出しで人にぶつかるようになった。言葉が、露骨な差別や捨てぜりふ、居直りとして礫のように投げつけられたり、アリバイや言い逃れ、時に隠れみのとして巧みに操られたりする場面に、路上で、報道で、頻繁に触れる。

4 同じことの裏返しともいえようが、言葉が現実の前でうなだれる逆の光景もよく目にする。声を上げたところで何も変わらない、聞いてももらえないと、言葉の無力に打ちひしがれ、口をつぐんでしまう人。言葉に何かを託すことをあらかじめ断念した人たち。

5 ②言葉の暴力と無力。③言葉の横暴と言葉の喪失。一方に言葉であおる人たちがいて、もう一方に言葉の前で身をひく人たちがいる。言葉が両端に裂かれ、イエスかノーか、オール・オア・ナッシングといった、両極端な形でしか出てこない。

抽象的な概念を表す語句

本文では抽象的な概念を表す語句が用いられている。抽象的な概念の定義を表す部分や、抽象的な概念に対する具体的な事例を挙げた部分に注目して、意味を捉えるようにするとよい。

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「言葉そのものの惨状」とあるが、これはどのような状況か。適当なものを選びなさい。

ア 新聞のコラムで紹介するような言葉の一節を探しても、なかなかそれにふさわしい言葉が見つからない状況。

イ 悲惨な出来事が多く、気の塞ぐような記事が増えているために、明るい言葉を取り上げにくいという状況。

ウ 言葉がむき出しで人にぶつけられるようになり、一方で言葉の無力に打ちひしがれる人がいる状況。

〔　　〕

(2) ——線②「言葉の暴力と無力」が表す状況となるように、解答欄に入る言葉を三十五字以上四十字以内で探し、最初と最後の三字を答えなさい。ただし句読点も字数に含む。

□□□～□□□状況。

(3) ——線③「言葉の横暴と言葉の喪失」とあるが、「言葉の横暴」と「言葉の喪失」が表す状況を具体的に述べた段落をこれより前から探し、それぞれ段落番号を答えなさい。

言葉の横暴〔　　〕

言葉の喪失〔　　〕

それでも、言葉を (2)

鷲田 清一

（筆者は、絶えず言葉を発する傾向がＳＮＳの普及でエスカレートし、言葉を受け取る側も言葉をのみ込むことなく反射的に言葉を返してしまっていると述べています。）

7 私たちは、言葉が音として届けば、あるいは文字として送られれば、言葉が伝わったかのような錯覚に陥りやすい。「わかり合う」「通じ合う」「触れ合う」、そんな安易な言葉の洪水が、わかってくれて当然という甘えを生み、さらに言葉を通じにくくさせている。理解してほしいという気持ちが高じてくると、理解してもらえないときにはその反動で、「キレる」「ムカつく」といった荒々しい言葉が投げつけられる。

8 しかし、①言葉は単なるメッセージの媒体なのではない。言葉には言いたいこと（言葉の意味）だけでなく、言いたいという気持ちも含まれている。②それは「言葉の肌理」となって現れる。対話の場でふと何かが腑に落ちるとき、私たちは語りの整合性や合理的根拠によってではなく、むしろその感触や肌理、口調や声によって、相手が本当に言いたい何かに気づかされることが多い。言葉の背景にある体温や手応えに、どれだけ想像力を向けられるかなのだろう。それがないと、言葉の意味だけをむき出しのままぶつけ合うだけになる。

9 わかりやすさや反応の速さが求められる時代、大量の言葉を前に、じっくり言葉と向き合い思考する時間も、吟味して言葉を選ぶ心の余裕もなくなっている。社会に、隙間という意味での「あそび」がなくなってきている。短絡的な言葉で片づけようとして言葉が先鋭化し、一気に攻撃的になる。法令を遵守しているかいないか、ファクト（事実）かフェイク（でっちあげ）か、ラブ（愛）かヘイト（憎悪）か、大声か沈黙かというふうに、両極端に分かれ、③グレイな対応を許さない、そうした社会の余裕のなさが、言葉の二極化の背後にあるように思われてならない。

（7〜9は教科書本文における形式段落番号を表します）

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「言葉は単なるメッセージの媒体なのではない」とあるが、ここで述べられていることとして適当なものを、この後の内容をふまえて選びなさい。

ア 言葉は単に音や文字として送られるだけのものではなく、さまざまなメディアを通して送られるものだということ。
イ 言葉はその言葉が表す意味を伝えるだけのものではなく、何かを言いたいという気持ちも含んだものだということ。
ウ 言葉はいつでもメッセージを伝達することができるというわけではなく、伝わらないこともあるのだということ。
エ 言葉は単純な情報を表すだけではなく、思考力が必要な意味や気持ちを言葉にすることもあるのだということ。

[　　]

(2) ――線②「それは『言葉の肌理』となって現れる」とあるが、ここで述べられている内容に合うものを選びなさい。

ア 言葉が表している意味内容が、その言葉のもつわかりやすさや肌理となって現れる。
イ 言葉に含まれる言いたいという気持ちが、その言葉のもつ感触や肌理となって現れる。
ウ 言葉のもつ整合性や合理的根拠が、その言葉を発するときの口調や声となって現れる。

[　　]

(3) ――線③「グレイな対応」とはここではどのような意味か。適当なものを選びなさい。

ア おざなりではない、効果的な対応。
イ 慎重(しんちょう)ではない、短絡的な対応。
ウ 極端ではない、中間的な対応。

[　　]

(4) 筆者は、対話において何が重要だと述べているか。適当なものを選びなさい。

ア 相手を納得(なっとく)させるために整合性や合理的根拠をもつこと。
イ 相手にわかりやすい言葉で率直(そっちょく)に意味を伝えること。
ウ 相手からのメッセージに対してすぐに返信すること。
エ 相手の言葉の背景にあるものに想像力を向けること。

[　　]

それでも、言葉を (3)

鷲田 清一

次の表は、教科書本文の内容をまとめたものである。

1～5	**導入** 筆者は新聞で誰かの言葉の一節を紹介するコラムを担当している。このところ言葉を選ぶことがしんどくなる日がある。 **言葉の惨状** 言葉がむき出しで人にぶつけられるようになった。（言葉の暴力、横暴）。一方で、言葉の無力に打ちひしがれ、口をつぐんでしまう人もいる（言葉の無力、喪失）。
6～10	**SNSの普及と言葉の変化** 絶えず言葉を発する傾向がSNSの普及でエスカレートし、言葉を受け取る側も言葉をのみ込むことなく反射的に言葉を返してしまっている。 言葉が音や文字として届けば言葉が伝わったのだという錯覚、わかってくれて当然という甘えが言葉を通じにくくさせている。 **言葉の肌理** 言葉には言いたいこと（言葉の意味）だけでなく、言いたいという気持ちも含まれており、それは言葉の肌理となって現れる。相手の言葉の背景にあるものに想像力を向けることがなければ、言葉の意味だけをぶつけ合うことになってしまう。
	言葉の二極化の背後にある社会の変化 わかりやすさや反応の速さが求められ、言葉にじっくり向き合う時間や余裕がなく、社会がグレイな対応を許さなくなっている。 **価値の二極化** わかりやすさが善い、わかりにくさは悪い、という社会になり、わかりやすい言葉や説明にすぐに飛びついてしまう。
11～14	**言葉の可能性** 戦争の足音が響いてきている今、言葉の無力にうなだれてばかりいてはならない。どんなときも言葉の力が人々を支えてきた。 **言葉の厚み** 言葉と思考が二極化した時代だからこそ、「間」に息づく言葉、多様なグラデーションを許容する言葉のありようが求められる。 **筆者のコラムと思い** コラムでは一瞬意味のつかめないような表現、逆説、言外に含みや毒のある言葉を用いている。 私の見つけた言葉がきっかけとなり、誰かを支えられたらよい。

（1～14は教科書本文における形式段落番号を表します）

確認テスト 教科書本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 次の内容は、言葉の暴力と無力のどちらの事例として挙げられているか。言葉の暴力なら**ア**、言葉の無力なら**イ**で、それぞれ答えなさい。

① 言葉がむき出しで人にぶつかるようになった。
② 言葉に何かを託すことをあらかじめ断念した人たち。
③ 言葉であおる人たち。
④ 言葉の前で身をひく人たち。

①［　］②［　］③［　］④［　］

(2) 言葉の二極化と連動している価値の二極化について、本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 社会が変化して反応の速さが求められる時代になっているにもかかわらず、人々が言葉をのみ込んで口ごもるようになったため、社会の問題への対処が困難になった。
イ ファクトかフェイクか、ラブかヘイトかといった二極化が進み、人々の価値が多様になったため、わかりにくい言葉があらゆる場面で頻繁にみられるようになった。
ウ わかりやすさが善くて、わかりにくさは悪いという価値観が広まり、現実の社会での正解がない問いにわからないまま向き合い続ける知的耐性が失われている。

［　］

(3) 言葉について、本文の内容に合うものを選びなさい。

ア SNSの普及によって、本気で何かを訴える切実な思いから発せられる言葉が大量にみられるようになった。
イ 言葉には言いたいことだけではなく言いたいという気持ちも含まれており、それは言葉の肌理となって現れる。
ウ 今の時代、間に息づく言葉や、言葉のもつ独特の厚みが大切で、曖昧さのないわかりやすい言葉が求められている。

［　］

温かいスープ(1)

今道 友信

(一九五七年、筆者はフランスのパリで大学の講師を務めていました。筆者は毎土曜ある小さなレストランで夕食を取っており、しばらくするとそのレストランを切り盛りする母親と娘の二人と顔なじみになりました。)

若い非常勤講師の月給は安いから、月末になると外国人の私は金詰まりの状態になる。そこで月末の土曜の夜は、スープもサラダも肉類も取らず、①「今日は食欲がない。」などとよけいなことを言ったうえで、いちばん値の張らないオムレツだけを注文して済ませた。それにはパンが一人分付いてくるのが習慣である。そういう注文が何回かあって気づいたのであろう、この若い外国生まれの学者は月末になると苦労しているのではなかろうか、と。

(中略　二月のある日、筆者はいつものようにレストランに行きました。)

その夜は雹が降った。私は例によって無理に明るい顔をしてオムレツだけを注文して、待つ間、本を読み始めた。店には二組の客があったが、それぞれ大きな温かそうな肉料理を食べていた。そのときである。背のやや曲がったお母さんのほうが、湯気の立つスープを持って私のテーブルに近寄り、震える手でそれを差し出しながら、小声で、「お客様の注文を取り違えて、余ってしまいました。よろしかったら召しあがってくださいませんか。」と言い、優しい瞳でこちらを見ている。小さな店だから、今、お客の注文を間違えたのではないことぐらい、私にはよくわかる。

こうして、目の前に、どっしりしたオニオングラタンのスープが置かれた。寒くてひもじかった私に、それはどんなにありがたかったことか。涙がスープの中に落ちるのを気取られぬよう、②一さじ一さじかむようにして味わった。フランスでもつらいめに遭ったことはあるが、この人たちのさりげない親切のゆえに、私がフランスを嫌いになることはないだろう。いや、そればかりではない、人類に絶望することはないと思う。

国際性、国際性とやかましく言われているが、その基本は、流れるような外国語の能力やきらびやかな学芸の才気や事業のスケールの大きさなのではない。それは、相手の立場を思いやる優しさ、お互いが人類の仲間であるという自覚なのである。その典型になるのが、名もない行きずりの外国人の私に、口ごもり恥じらいながら示してくれたあの人たちの無償の愛である。求めるところのない隣人愛としての人類愛、これこそが国際性の基調である。そうであるとすれば、一人一人の平凡な日常の中で、それは試されているのだ。

確認テスト

本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「『今日は食欲がない。』などとよけいなことを言ったうえで」とあるが、なぜこのようなことを言ったのか。適当なものを選びなさい。

ア 金詰まりでオムレツだけを注文していることが恥ずかしく、気づかれたくなかったから。
イ オムレツにはパンが一人分付いてくるので、それ以外を注文しても食べきれないから。
ウ 月末は食欲がわかないほど苦労することが多く、不機嫌(ふきげん)になってしまっていたから。

〔　〕

(2) ――線②「一さじ一さじかむようにして味わった」とあるが、このときの筆者の様子として適当なものを選びなさい。

ア 「お母さん」がスープを持ってきたことに驚(おどろ)き、本当に注文が間違っていたのか疑問に思っている。
イ 温かいオニオングラタンのスープに心を奪(うば)われ、思いがけない料理に涙が出るほど夢中になっている。
ウ スープを食べさせてあげようとする「お母さん」の気遣(きづか)いに心を打たれ、その思いをかみしめている。

〔　〕

(3) 筆者が考える国際性の基調とは何か。本文中から十九字で探し、最初と最後の三字を書きぬきなさい。

□□□～□□□

温かいスープ (2)

今道 友信

次の表は、教科書本文の内容をまとめたものである。

まとまり1	まとまり2	まとまり3
戦後しばらくの日本の状況 国際的評価の厳しさ、みじめな時代	**国際性について考えさせる筆者の体験** 一九五七年、筆者はパリで大学の講師を務めていた。筆者は毎土曜、母親と娘が切り盛りする小さなレストランで夕食を取っていたが、月末にはお金がなく、オムレツだけ注文していた。 ところがある晩、娘さんのほうが、パンをそっと二人分添えてくれ、それ以後月末にはいつも二人前のパンが出るようになった。 二月のある夜、お母さんのほうが、注文を取り違えて余ってしまったと言って、温かいスープを差し出した。筆者は涙が落ちるのを気取られないよう、一さじ一さじかむようにしてそのスープを味わった。	**国際性についての筆者の主張** 国際性の基本は、流れるような外国語の能力、きらびやかな学芸の才気、事業のスケールの大きさではない。それは、相手の立場を思いやる優しさ、お互いが人類の仲間であるという自覚であり、その典型がレストランの母娘が示してくれた無償の愛である。 求めるところのない隣人愛としての人類愛こそが国際性の基調であり、それは平凡な日常の中で試されている。

確認テスト

教科書本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 本文の内容に合うものを二つ選びなさい。

ア 一九五七年に筆者はパリで大学の講師を務めており、経済的に裕福(ゆうふく)な状態だった。
イ 筆者は毎土曜、小さなレストランで夕食を取っており、月末はオムレツだけを注文していた。
ウ レストランで接客を受け持つ娘さんは、月末にパンを二人分添えてくれるようになった。
エ 二月のある夜、レストランを切り盛りするお母さんは注文を間違えてオムレツを差し出した。
オ 国際性の基調である人類愛は、国際社会で海外の人々と触(ふ)れ合うときにのみ試されるものである。

〔　　・　　〕

(2) 次の中から、筆者が考える国際性の基本に当たるものを、二つ選びなさい。

ア お互いが人類の仲間であるという自覚。
イ きらびやかな学芸の才気。
ウ 事業のスケールの大きさ。
エ 相手の立場を思いやる優しさ。
オ 流れるような外国語の能力。

〔　　・　　〕

(3) 本文中の筆者の体験について、正しく述べたものを選びなさい。

ア パリのレストランでの筆者の体験は、戦後しばらくの日本の状況を説明するために示されている。
イ パリのレストランでの筆者の体験は、国際性の基調とは対照的な事例として示されている。
ウ パリのレストランでの筆者の体験は、国際性の基本の典型になるものとして示されている。

〔　　〕

アラスカとの出会い（1）

星野 道夫

十代の頃、北海道の自然に強くひかれていた。その当時読んだ、さまざまな本の影響があったのだろう。あの頃、北海道は僕にとって遠い土地だった。北方への憧れは、いつしかさらに遠いアラスカへと移っていった。だが、現実には何の手がかりもなく、気持ちが募るだけであった。二十年以上も前、アラスカに関する本など日本では皆無だったのだ。

ある日、東京、神田の古本屋街の洋書専門店で、一冊のアラスカの写真集を見つけた。たくさんの洋書が並ぶ棚で、どうしてその本に目が留められたのだろう。まるで僕がやって来るのを待っていたかのように、目の前にあったのである。それからは、学校へ行くときも、どこへ出かけるときも、かばんの中にその写真集が入っていた。①手あかにまみれるほど本を読むとは、ああいうことをいうのだろう。もっとも僕の場合は、ひたすら写真を見ていただけなのだが。

その中に、どうしても気になる一枚の写真があった。本を手にするたび、どうしてもそのページを開かないと気が済まないのだ。それは、北極圏の　あるイヌイットの村を空から撮った写真だった。

灰色のベーリング海、どんよりと沈む空、雲間からすだれのように差し込む太陽、その中でぽつんと点のようにたたずむイヌイットの集落……。初めは、その写真のもつ光の不思議さにひきつけられたのかもしれない。そのうちに、僕はだんだんその村が気にかかり始めていった。

なぜ、こんな②地の果てのような場所に人が暮らさなければならないのか。それは、実に荒涼とした風景だった。人影はないが、一つ一つの家の形がはっきりと見える。いったいどんな人々が、何を考えて生きているのだろう。

昔、電車から夕暮れの町をぼんやり眺めているとき、開け放たれた家の窓から、夕食の時間なのか、ふっと家族の団欒が目に入ることがあった。そんなとき、窓の明かりが過ぎ去ってゆくまで見つめたものだった。そして、③胸が締めつけられるような思いが込み上げてくるのである。あれはいったい何だったのだろう。見知らぬ人々が、僕の知らない人生を送っている不思議さだったのかもしれない。同じ時代を生きながら、その人々と決して出会えない悲しさだったのかもしれない。

その集落の写真を見たときの気持ちは、それに似ていた。が、僕はどうしても、④その人々と出会いたいと思ったのである。

写真のキャプションに、村の名前が書かれていた。シシュマレフ村……。この村に手紙を出してみよう。でも誰に。住所は。辞書を開くと、村長に当たる英語が見つかった。住所は、村の名前にアラスカとアメリカを付け加えるしか方法がない。

「あなたの村の写真を本で見ました。訪ねてみたいと思っています。何でもしますので、誰か僕を世話してくれる人はいないでしょうか。……。」

手紙の内容は、それが正直な気持ちだった。初めて書いた英語の手紙は、どんなに拙い文章だったろう。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ——線①「手あかにまみれるほど本を読む」とはここではどういうことか。適当なものを選びなさい。

ア　手あかが付くくらいその本を繰り返し読むこと。
イ　手あかが付かないようにその本を大切に読むこと。
ウ　手あかが付いたもののようにその本に興味を失うこと。

〔　　〕

(2) ——線②「地の果てのような場所」とあるが、この場所の様子が具体的に描かれている一文をこれより前から探し、その最初の三字を答えなさい。

□□□

(3) ——線③「胸が締めつけられるような思い」とあるが、この思いを、「僕」はどのようなものだったと考えているか。二十五字以上三十字以内で二つ探し、その最初と最後の三字を答えなさい。ただし句読点も字数に含む。

□□□～□□□
□□□～□□□

(4) ——線④「その人々」とはどのような人々か。適当なものを選びなさい。

ア　夕暮れの町に暮らす人々。
イ　写真に写った村に暮らす人々。
ウ　その集落の写真を撮った人々。

〔　　〕

アラスカとの出会い (2)

星野 道夫

次の表は、教科書本文の内容をまとめたものである。

まとまり１	まとまり２	まとまり３
雑誌社のカメラマンに会うために車でホテルに向かっていた「僕」は、突然その名前に覚えがあることに気づき、家に戻った。本棚から引き出した一冊の写真集には、ジョージ・モーブリイと書かれていた。	十代の頃、あるアラスカの写真集の中の一枚の写真が気になっていた「僕」は、その写真に写っている村に手紙を出した。 半年後、村のある家族からの返信を受け取った「僕」は、約半年の準備を経て、アラスカに向かった。その村で過ごした三か月は強烈な体験として「僕」の心に沈澱していき、「僕」は人の暮らしの多様性にひかれた。	写真家となった「僕」は七年ぶりにアラスカに戻り、それ以来アラスカで十四年を過ごしてきた。 あの写真を見たことをきっかけに「僕」の人生は動いていったが、その写真を撮ったのがジョージ・モーブリイだった。 ホテルで会ったジョージ・モーブリイは、「僕」のこれまでのいきさつを聞くと、目の奥に優しい笑みをたたえて話しかけた。「僕」は、日々の暮らしの中で無数の人々と擦れ違いながらも出会うことがないという悲しみは、人と人とが出会うかぎりない不思議さに通じているのだと考える。

確認テスト

教科書本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) 次の各文の出来事を、最も過去のものから順に並べかえなさい。

ア ホテルに向かっていた「僕」は、これから会おうとしている人物の名前に覚えがあることに気づき、車をUターンさせた。

イ ある日、東京、神田の洋書専門店で一冊のアラスカの写真集を見つけた「僕」は、いつもその写真集を持ち歩くようになった。

ウ 写真集の中の一枚の写真が気になっていた「僕」は、その写真に写っていた村に手紙を出し、村を訪ねることになった。

エ ホテルでジョージ・モーブリイに会った「僕」は、古い写真集を取り出し、彼にこれまでのいきさつを話した。

〔　　→　　→　　→　　〕

(2) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア ジョージ・モーブリイは「僕」の手紙に返事を送り、シシュマレフ村で十九歳の「僕」を迎え入れてくれた。

イ 十代の頃「僕」はある一枚の写真にひきつけられており、その写真を撮ったのがジョージ・モーブリイだった。

ウ ホテルで十四年ぶりにジョージ・モーブリイに再会した「僕」は、これまでのいきさつを話し旧交を温めた。

〔　　〕

(3) 本文の内容に合うものを選びなさい。

ア 同じ時代を生き、日々の暮らしの中で擦れ違うということは、それ自体がその人との喜ばしい出会いであるといえる。

イ 遠く離れたところに暮らす見知らぬ人々も、日々擦れ違うような人々も、暮らしのあり方は不思議と似ているものである。

ウ 日々無数の人々と擦れ違いながらも出会うことがないという悲しみは、人と人とが出会うかぎりない不思議さに通じている。

〔　　〕

律儀な桜

角田 光代

（筆者は、昨年タクシーの運転手さんから聞いた、毎年桜は律儀に咲く、という言葉をことあるごとに思い出しています。）

　七年前、二〇一一年四月、私は新聞社の依頼を受けて、東北の太平洋沿岸の町々を歩いた。町がなくなっているのに咲いている桜があった。そのことに私は心底驚いた。青空に映える満開の桜がうつくしいことに衝撃を受けた。①自然とはなんと残酷なのだろうと思った。こんなにもかなしい現実のなかで、季節が来れば桜はうつくしさを誇るかのように花開くのだ。たたえる人も、見る人すらもいなくても。

　運転手さんが何気なく言った一言は、私にこの光景を思い出させた。本当にそうだ。何があっても桜は咲くし、そのことはあたりまえのことではなくて、とても不思議なことなのだ。

　七年前に抱いた、残酷だという感想は、私のなかで少しずつ変わっていたらしいと、②それもまた運転手さんの言葉で気づかされた。例年より寒かろうが暑かろうが、降雨量が多かろうが少なかろうが、温度が緩むとつぼみが膨らみ、あるときいっせいに花が開く。変わり続けるしかない私たちの暮らしに、そんなふうに変わらないものがあるということは、時に私たちを救うのではないか。③そんなふうに思うようになった。

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「自然とはなんと残酷なのだろうと思った」とあるが、どんな点が残酷だと述べているのか。適当なものを選びなさい。

ア　周囲の町が大きな被害を受けている状況で、やはり桜も大きな被害を受けてしまっている点。

イ　かなしい現実のなかにあっても、桜はそのことに関わりなくいつものようにうつくしく咲く点。

ウ　桜がどんなにうつくしく咲いても、そのことをたたえる人も、花を見る人もいないという点。

〔　　〕

(2) ――線②「それ」が指す内容となるように、解答欄に入る言葉を三十五字以上四十字以内で探し、最初と最後の三字を答えなさい。ただし句読点も字数に含む。

□□□～□□□こと

(3) ――線③「そんなふうに思うようになった」とあるが、どのように思うようになったのか。適当なものを選びなさい。

ア　何があっても桜が咲くとは限らないのであって、私たちの暮らしが変わり続けるように、桜も変わり続けているのだと思うようになった。

イ　変わり続けるしかない私たちの生活に、桜のように変わることのないものがあるということが、時には救いとなることもあると思うようになった。

ウ　桜が咲くのは温度が緩むことがきっかけであり、私たちの暮らしがどのようなものかに関わらずに桜が咲くのを嘆いても仕方がないと思うようになった。

〔　　〕

わたしを束ねないで

新川　和江

わたしを束ねないで　新川（しんかわ）　和江（かずえ）

わたしを束ねないで
あらせいとうの花のように
白い葱（ねぎ）のように
束ねないでください　①わたしは稲穂（いなほ）
秋　大地が胸を焦（こ）がす
見渡（みわた）すかぎりの金色（こんじき）の稲穂

わたしを止めないで
②標本箱の昆虫（こんちゅう）のように
高原からきた絵葉書（えはがき）のように
止めないでください　わたしは羽撃（はばた）き
こやみなく空のひろさをかいさぐっている
目には見えないつばさの音

わたしを注（つ）がないで
日常性に薄（うす）められた牛乳のように
ぬるい酒のように
注がないでください　わたしは海
夜　とほうもなく満ちてくる
苦い潮（うしお）　③ふちのない水

④わたしを名付けないで
娘（むすめ）という名　妻という名
重々しい母という名でしつらえた座に
坐（すわ）りきりにさせないでください　わたしは風
りんごの木と
泉のありかを知っている風

わたしを区切らないで
，（コンマ）や・（ピリオド）いくつかの段落
そしておしまいに「さようなら」があったりする手紙のようには
こまめにけりをつけないでください　わたしは終（おわ）りのない文章
川と同じに
はてしなく流れていく　拡（ひろ）がっていく　⑤一行の詩

確認テスト

詩を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「わたしは稲穂」に用いられている表現技法を二つ選びなさい。

ア 直喩（ちょくゆ）　イ 隠喩（いんゆ）　ウ 体言止め　エ 倒置（とうち）

〔　　・　　〕

(2) ――線②「標本箱の昆虫」と似たようなものとして挙げられているものを選びなさい。

ア 高原からきた絵葉書　イ 羽撃き　ウ つばさの音

〔　　〕

(3) ――線③「ふちのない水」と対照的なものとして挙げられているものを選びなさい。

ア ぬるい酒　イ 海　ウ 苦い潮

〔　　〕

(4) ――線④「わたしを名付けないで」とあるが、「わたし」が名付けてほしくないと願っているものとして適当ではないものを選びなさい。

ア 娘　イ 妻　ウ 母　エ 風

〔　　〕

(5) ――線⑤「一行の詩」はどのようなものとして挙げられているか。適当なものを選びなさい。

ア 区切られたもの　イ おしまいがあるもの
ウ けりがつけられているもの　エ 拡がっていくもの

〔　　〕

(6) この詩の主題として適当なものを選びなさい。

ア 豊かな自然の中で生きていくことへのあこがれ。
イ 豊かな生命力をもつものたちへのあこがれ。
ウ 何ものにも縛（しば）られず自分らしく生きたいという思い。
エ 日常を実りあるものにしていきたいという思い。

〔　　〕

初日

池田 瑛子

初日（はつひ）　池田（いけだ）瑛子（えいこ）

かすかな響（ひび）きが走り
風がすばやく
①曙（あけぼの）をほどいてゆくと
ういういしい光は
②ほのかに空をうるませた

くりかえし夜明けは訪（おとず）れるのに
初めての誕生を待つようだ

③胸の底ふかく
陽（ひ）は射（さ）しこむだろう
見失いかけたもののかたちを
鮮（あざ）やかに浮（う）かびあがらせて

確認テスト 詩を読んで、問いに答えなさい。

(1) 「初日」の詩の種類として適当なものを二つ選びなさい。

ア 文語詩　**イ** 口語詩
ウ 定型詩　**エ** 自由詩　**オ** 散文詩

〔　　・　　〕

(2) ――線①「曙」の意味を選びなさい。

ア 真夜中から朝にかけての時間帯。
イ 夜がほのぼのと明け始める頃。
ウ 朝から真昼にかけての時間帯。
エ 夕方、次第に日が暮れていく頃。

〔　　〕

(3) ――線②「ほのかに空をうるませた」が表す様子として適当なものを選びなさい。

ア 初日の光に強く照らされ、空がまぶしいほどに輝く様子。
イ 初日の光にかすかに照らされ、空がぼんやりと明るくなる様子。
ウ 初日の光が雲に遮られ、空一面がかげで暗くなっている様子。

〔　　〕

(4) ――線③「胸の底ふかく……鮮やかに浮かびあがらせて」で用いられている表現技法として適当なものを選びなさい。

ア 直喩　**イ** 体言止め　**ウ** 倒置　**エ** 対句

〔　　〕

(5) 詩の内容に合うものを選びなさい。

ア 初日の光を待つ中で、見失いかけていたものが心によみがえるような新たな気持ちになっている。
イ 生まれて初めて見るような初日だったので、見失うことがないように陽が差すのを待っている。
ウ くりかえし夜が明けても、見失ってしまったものは変わらず失われてしまったままである。

〔　　〕

握手

語句	解説
達者（たっしゃ）	【意味】物事に慣れていて、巧みなさま。 【例文】達者な芸を披露する。
年季が入る	【意味】長年従事していて、腕が確かである。 【例文】年季が入った見事な演技をみせる。
気前がいい	【意味】金銭や物を惜しまない。けちけちしない。 【例文】この店の店長は気前がいい。
精を出す	【意味】一生懸命に励む。熱心に働く。 【例文】毎日のトレーニングに精を出す。
奇妙（きみょう）	【意味】普通ではなく変わっているさま。 【例文】海岸に奇妙な形の岩が並んでいる。
……（の）わりに	【意味】（基準の程度と比べて）……にしては。 【例文】時間がないと言うわりには、急ぐ気配がない。
こたえる	【意味】刺激を痛手として身にしみて強く感じる。 【例文】寒さが身にこたえる。
いとまごい	【意味】別れの挨拶。別れを告げること。 【例文】故郷に帰る友人がいとまごいにやって来た。
平凡（へいぼん）	【意味】特に優れた点もなく、普通なこと。 【対義語】非凡

語句	解説
腕前（うでまえ）	【意味】身につけた能力や技術、技量。 【関連語】腕が立つ…技量が優れている。 腕によりをかける…優れた技量を発揮しようと張り切る。 腕を振るう…技量を十分に発揮する。
むやみに	【意味】度を越しているさま。 【例文】むやみに長い文は読む気にならない。

作られた「物語」を超えて

権化（ごんげ）	【意味】ある抽象（ちゅうしょう）的な特質が具体的な姿になって現れたかのように思えるもの。 【例文】横暴なふるまいを続ける姿は、まさに悪の権化だ。
勇壮（ゆうそう）	【意味】勇ましく意気盛んなこと。 【例文】勇壮な行進曲が聞こえてくる。
蓄積（ちくせき）	【意味】蓄（たくわ）えること。たまること。 【例文】データを蓄積して分析（ぶんせき）する。
脚色（きゃくしょく）	【意味】話をおもしろくしようと事実に枝葉をつけること。 【例文】その話は多くの部分が脚色されている。
増幅（ぞうふく）	【意味】物事の程度を大きくすること。 【例文】うそによって憎（にく）しみが増幅する。

俳句の可能性

かきたてる	【意味】感情や気力を起こさせる。わきたたせる。 【例文】競争心をかきたてられる。
断念	【意味】思っていたことなどを諦（あきら）めること。 【例文】資金不足で計画を断念する。
感性	【意味】物事を心に感じ取る能力。感受性。 【例文】兄は豊かな感性をもつ人だ。

挨拶——原爆の写真によせて

すがすがしい	【意味】さわやかで心地(ここち)よい。 【例文】高原にすがすがしい風が吹(ふ)く。
りつぜん	【意味】恐(おそ)ろしさにふるえおののくさま。 【例文】戦地の状況(じょうきょう)にりつぜんとする。
きわどい	【意味】もう少しで悪い事態に陥(おちい)るようなぎりぎりの危ない状態であるさま。 【例文】最終のバスにきわどいところで間に合った。
見きわめる	【意味】物事の本質や動向などを追究する。見定める。 【例文】本当の原因を見きわめる。
油断	【意味】気を緩(ゆる)めて注意を怠(おこた)ること。 【例文】もう安全だろうと思って油断する。

故郷

わびしい	【意味】貧しくてみすぼらしい。粗末(そまつ)な感じである。 【例文】わびしい景色に寂(さび)しさを感じる。
込(こ)み上げる	【意味】感情などが抑(おさ)えきれずにわき上がる。 【例文】それを聞いて怒(いか)りが込(こ)み上げた。
心境	【意味】その時の心の状態。 【例文】私のその時の心境は言葉に表せない。
やるせない	【意味】悲しみや寂しさなどを晴らすことができずつらい。 【例文】別れが近づき、やるせない気持ちになった。
かたわら	【意味】あることをする合間に。あることをする一方で。 【例文】仕事のかたわら勉強する。
ことづける	【意味】人に頼(たの)んで品物や伝言を取り次いでもらう。 【例文】友人に彼(かれ)へのお祝いの言葉をことづけた。
不服	【意味】納得(なっとく)できず不満に思うこと。 【類義語】不平・不満
蔑(さげす)む	【意味】見下す。軽蔑(けいべつ)する。 【例文】蔑むような目で見られる。
嘲(あざけ)る	【意味】馬鹿にして笑ったり悪く言ったりする。 【例文】人の失敗を嘲る。
冷笑	【意味】見下して冷ややかに笑うこと。あざ笑うこと。 【関連語】苦笑…にがにがしく思いながらしかたなく笑うこと。苦笑い。 微笑(びしょう)…にっこり笑うこと。ほほえみ。 失笑…笑うべきでないようなときに、思わず吹(ふ)き出すこと。

思案	【意味】あれこれと考えをめぐらせること。 【例文】解決方法を思案する。
うやうやしい	【意味】相手を敬い丁重に振る舞うさま。 【例文】相手にうやうやしい態度で頭を下げた。
はにかむ	【意味】恥ずかしそうなそぶりや表情をする。 【例文】その子は私を見てはにかんだ。
物騒（ぶっそう）	【意味】危険な感じがするさま。穏やかでないさま。 【例文】物騒な世の中になる。
境遇（きょうぐう）	【意味】その人が置かれた状況や立場。 【例文】私は恵まれた境遇で育った。
寄ってたかって	【意味】大勢が寄り集まって。 【例文】みんなが寄ってたかって文句をつけた。
とりとめのない	【意味】きちんとしたまとまりがない。要領を得ない。 【例文】しばらくとりとめのない立ち話をした。
胸をつかれる	【意味】思いがけないことにはっとする。 【関連語】胸が締めつけられる…悲しみや不安で胸が圧迫されたようにつらく苦しくなる。 胸がすく…心につかえていたものがなくなり、さわやかになる。 胸に迫る…強い感情が抑えきれないほど込み上げてくる。
名残惜しい（なごりおしい）	【意味】別れがつらく、心残りである。 【例文】別れが名残惜しく、何度も手を振った。

気がめいる	【意味】気分がふさぐ。憂鬱になる。 【関連語】気がもめる…心配で落ち着かない。 気が置けない…気遣いしなくてよい。気軽に打ち解けられる。 気が気でない…気になって落ち着いていられない。
打ちひしぐ	【意味】精神的な衝撃などで意欲や気力をなくさせる。 【例文】悲しみに打ちひしがれる。
野放図（のほうず）	【意味】決まりに従わず、思うままにふるまうこと。 【例文】野放図なふるまいを改める。

頬(ほお)が緩(ゆる)む	【意味】うれしくなり、思わずにこにこする。 【例文】友達からの手紙に頬が緩む。
惨状(さんじょう)	【意味】いたましい、むごたらしいありさま。 【例文】現地の惨状に胸を痛める。
露骨(ろこつ)	【意味】むきだしであること。あからさまなこと。 【類義語】あからさま・むきだし
うなだれる	【意味】悲しみや失意などのために気持ちが沈み、頭を前にたれる。うつむく。 【例文】失敗してしまい、彼はうなだれた。
あおる	【意味】他人を刺激してある方向に向かうようにたきつける。扇動する。 【例文】不安をあおるような言説が広がる。
折り合いをつける	【意味】双方が譲り合って意見を合わせる。 【例文】意見の違いが大きく、折り合いをつけることができなかった。
肌理(きめ)	【意味】皮膚や物の表面の細かなあや。手で触れたときの感じ。 【例文】肌の肌理が細かい。
腑(ふ)に落ちる	【意味】納得がいく。合点がいく。 【例文】事情を聞いて彼の発言が腑に落ちた。
短絡(たんらく)（的）	【意味】筋道をたどることなく物事を性急に結び付けてしまうこと。 【例文】この結果だけでその人の性格を判断するのはあまりにも短絡的だ。

先鋭(せんえい)（化）	【意味】考えや行動が急進的なこと。 【例文】対立が先鋭化し、緊張が高まる。
遵守(じゅんしゅ)	【意味】規則などに従い、それをきちんと守ること。 【関連語】順守…規則などに従い、それを守ること。 厳守…規則などを厳しく守ること。 適応…その状況や条件によく合うこと。
ひもとく	【意味】書物を開いて読む。 【例文】歴史をひもとくとさまざまな交易の事例が見つかる
反芻(はんすう)	【意味】あることを繰り返し考えたり思ったりすること。 【例文】先生の言葉を反芻する。
曲折	【意味】物事や状態に変化があること。複雑に入り組んでいること。 【例文】完成まではさまざまな曲折を経た。
微細(びさい)	【意味】極めて細かいこと。 【類義語】微小・緻密
寛容(かんよう)	【意味】心が広く、人や物事をよく受け入れること。 【類義語】寛大
あわい	【意味】ものとものとの間。 【例文】雲と雲とのあわいが輝く。

温かいスープ

独善（的）	【意味】自分だけが正しいと考えること。独りよがり。 【例文】人の意見を聞かず、独善に陥（おちい）る。
気取（けど）られる	【意味】様子などから事情を悟（さと）られる。感づかれる。 【例文】動揺（どうよう）していることを気取られぬよう、平静をよそおった。
口ごもる	【意味】言うのをためらう。言いかけてやめる。 【例文】何かを言いかけて、口ごもった。

アラスカとの出会い

権威（けんい）	【意味】その分野で優（すぐ）れたものと認められており、信頼（しんらい）されていること。 【例文】この賞は物理学でもっとも権威がある賞だ。
募（つの）る	【意味】いっそう激しくなる。高じる。 【例文】旅に行きたい思いが募る
皆無（かいむ）	【意味】まったくないこと。 【例文】旅行にいける見込（みこ）みは皆無だ。
手あかにまみれる	【意味】人の手に多く触（さわ）られるさま。 【例文】ノートが手あかにまみれるほど勉強する。
どうしても	【意味】どんなことをしてでも。ぜひとも。 【例文】どうしても遊園地に行きたい。
気が済む	【意味】気持ちがおさまる。満足して落ち着く。 【類義語】満足する
どんより	【意味】空が曇（くも）って薄暗（うすぐら）いさま。 【類義語】濛々（もうもう）
荒涼（こうりょう）	【意味】景色が荒（あ）れ果てていてものさびしいさま。 【例文】山の向こうには荒涼とした風景が広がっていた。
団欒（だんらん）	【意味】親しい人たちが集まり、なごやかに過ごすこと。 【例文】夕食後は一家団欒の時間を過ごした。
拙（つたな）い	【意味】巧（たく）みではない。 【類義語】下手（へた）
たとえ……としても	【例文】たとえバスに乗ることができたとしても間に合わないだろう。

沈澱（ちんでん）	【意味】底の方に沈（しず）み、たまること。 【例文】溶液（ようえき）に含（ふく）まれる物質が沈澱する。
矢のよう（に）	【意味】まるで飛ぶ矢のように素早（すばや）いさま。 【例文】楽しい時間は矢のように過ぎる。
未踏（みとう）	【意味】まだだれも足を踏（ふ）み入れていないこと。 【例文】未踏の地を旅する。
きしむ	【意味】物と物がこすれ合って音を立てる。 【例文】階段がきしむ音がする。
いきさつ	【意味】これまでの経緯（けいい）。そこに至るまでの経過。 【例文】この町を訪（おとず）れたいきさつを話す。
後悔（こうかい）	【意味】すんだことを後になって悔（く）いること。 【例文】後悔しないように全力で取り組む。
からくり	【意味】物事が動くときのその複雑な仕組み、しかけ。 【例文】人形が動くからくりを調べる。
根源（的）	【意味】物事のおおもと。物事の始まり。 【例文】根源的な問題を解決する。

律儀な桜

律儀	【意味】義理堅いこと。実直なこと。 【例文】毎年律儀に手紙が送られてくる。
心底	【意味】心の底から。 【例文】彼の話には心底驚いた。
ほうける	【意味】ぼんやりする。意識がにぶったような状態になる。 【例文】桜の花を眺めながらほうける。

写真　アフロ

参考文献　小学館『新編 日本古典文学全集』

©RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。